布教研究所報

昭和62年3月

第 4 号

浄土宗布教研究所



布教研究所報

昭和62年3月

第 4 号

浄土宗布教研究所



集中研究会指導講義

三上人のみ教え	松	啓	真····· 4
研究所員研究成果報告			
三上人大遠忌を迎えて	Щ	浄	教 … 36
金光上人阿	部	定	孝 … 41
家庭における宗教教育について	村	博	道 … 46
和歌からの布教	崎	浅	良 … 53
地獄の白蓮華・極楽の白蓮華浅	野	義	光 … 58
一念するために――くりかえしの効用――山	本	雄	毅 … 63
浄土宗における因果の問題――布教の立場から――有	本	亮	啓 … 68
現代布教上の一課題羽	田	恵	≡ ⋮ 72
布教の原理	上	光	俊······76
時機相応の念仏	子	貫	司 :: 82

編集後記	開祖一向上人を仰ぐ大 特別寄稿	口語訳『末代念仏授手印』輪読会報告	三上人のご事蹟をあおいで——布教師はこれでいいのか—— 教学布教大会意見発表	脳死・臓器移植と生命選択の時代	寺院とコンピュータ市	布教と視線	布教の実践と地域史村
	橋			藤	Ш	室	島
	俊			雅	隆	照	邦
181 178	雄 : : : : : : : : : : : : : : : : : : :	143	112	彦 … 104	士 :: 98	道 … 93	俊····· 88

集中研究会指導講義

三上人のみ教え

大正大学教授 戸 松 啓 真

一 法然上人と三上人のみ教え

法然上人の『選択本願念仏』をそれぞれ伝承されていかれた方と言えばそれで話はすむわけでござい 線があるわけで、それが法然上人の教えであります。即ち、浄土宗の二代目と三代目の面授のお弟子、 三祖には当然法然上人の教えが伝承されておりますから、だいたいこの筋道というのは、一つの太い ます。結局浄土宗の三上人というのは、この場合には法然上人は入っておりませんけれども、二祖、 るお話をということでございました。これは考えるとなかなか難しい問題で、さらっと受けますと、 「三上人の教え」という題で集中研究会がございますので、何か提言と申しますか、手がかりにな

と伝法 思い それに宗祖法然上人の教えを直接間接に布告伝承している三人であります。これは詳しく述べていく お 念 、ます。 仏の教えでございますけれども、場所により、人により、時代により、少しずつ違う点があると のお話になるんですが、それでは三上人の教えということにはそぐわないので、 その点を、 述べられるかどうか分かりませんけれども、 お話し申し上げるわけでございま それぞれ同じ

す。

り、 ますと、『選択集』でありますし、それを短くしたのが『一枚起請文』でありますから、『選択集』と い b ます。そこで、まず重なるとすれば、宗祖法然上人の教えの中で一貫して相伝されてい 枚起請文』が所伝では法然上人の教えの中で相伝されていく一貫したところのものであります。 その点において重なるということ。 ま申しましたように、この三上人の教えは、浄土宗として共通のものであるべきことは当然であ 即ち、三上人の教えは本来一つに重なるべきものであるということが言えると思うのでござ 総依法然と言うことが出来るとすれば、それは、所伝で言 るものが あ

ます 択本 さらに 法然上人の教えの中で一貫して相伝されていなければ、相伝とは言えません。 か 願 5 念仏集」、 『一枚起請文』は、同じことでありますが、言葉で言うと「一向専修」ということ。この二つ 所伝で一貫した、『選択集』で説かれているものを縮めて言うと「南 その次の行に 「南無阿弥陀仏」、その下に「往生之業念仏為先」とあります。 無阿弥陀仏」である。

集』は、

言で何であるかというと、題号の二十一字にございますように、

六字の名号。「選

から

なけ 修念仏」 わけです。 n ば が な 要する 伝 らない この所伝の教えを受け継いだのが えら っれてい \$ K ので 南 ある。 か 無 **阿弥陀** n なけ こういうことを言ってしまうと、 仏 ればなら 六字の名号が法然上人の教え な い 「三上人の教え」と言ってしまえば、 もので あ それで総てである。 の中 で _ 番 の根 本で それで終りに つまり あ n 相 伝 され 向 なる

人々の る思うのでございます。 色というの かい 求 めて は 考えてみますと、 いるもの 機に応じて教えを説く、 から L 違えば、 たが お釈 って同じ それに対して説く説き方もまた違ってくるようになるも 迦様 0 即ち対 $\overline{}$ 教えも、 向 機説法、 専修念仏」 ある 1, ある は法 が 説 い 然上人の教えも、 は カン れ 随 機説法 ましても、 というもの その時 この 教 が え 代 そ 0 0 0 0 説き方 社 で 特 会 あ 0 状 尼 0 特

は法は から 色とするところ 先ほ 然 ど申 特 凡 上人の 夫 色である。 しました、 『選択・ 出家 は 何であ る在家 それ 本願 法然 はどういうことに 念 3 上人の \$ 仏集』でございますけれども、 カン とい 総ての者が うことを、 貫し た教えである 区別 な る もうちょっと分解 かい なく平等に往生出 2 1, 南 うと、 その特色とするところは、 無 選 阿弥陀仏」 い 来 択 たしまし 本 る 願 2 でありますけ 1, 0 て申 うところ 念仏 し上げてみます。 は、 選択本 が 称名 'n 選 K 択 よ そ 0 願 特

平 往 生 即 ち凡 夫が往生するということが 「選択本願念仏」 の目的とするところになるわ 仏

特

あ

この 諸 善 その 2 義 者 賤 3 30 2 とであって、 ほ P T て、 本、 た 導 E 0 から お カン 11 大 中 n ある ます。 \$ あ 中 n まして、 0 「無 選 口 選 師 它 から 共通 、ます。 種 に平 2 択 本 沢 ても もこ 0 × 1, 「選択」 量 異 唐 集』 ۲ L 0 は 等 寿 訳 とい それ 0 7 そ 土 行 ま n 往 経 往生 切の 0 0 0 ある で 0 た は 生 P う言 とい 中 選 諸文を較べてみた。 念 第 2 第 から 1, 0 K 仏 択 衆 出 しい カン い 『選択集』 諸 1葉は だけ であ 往生す う言 生を は 章 うことが出 章 来 な 本 0 る 男女 る 0 は 法 ح ŋ 義 葉 ī 時 0 念仏 観 然 ますけれども、 0 て平 は 0 ることは でも 聖 n は 中 ح 别 経 上 全 道 に述べてあります平等往生。 から 等 K 0 から 往 て 門 人がどこか < あ くる。 な 時 0 入ってい K 念 あ 生 る。 を捨てて浄土 諸 ということによって、「選択」 い 往 仏 2 出 処 本 ても、 本、 選 生 K 来 諸 願 これ これ 世 ます 如くも 縁 篇 可 この らこれ 沢」 る L を ある は わ 8 け 論 に、 は 弥陀 とい けで、 るところの 菛 選 日 0 れども、 ぜず、 選択 をお その 本 は を取 11 経 う言 沢 で な は この 持 初 老若 い。 これを修するに便宜 念仏をどうして取 る。 0 [葉が ち L の義 0 8 諸 E 第二章 7 義 \$ ٢ カン 0 なぜこの 本、 法然 選択」 15 0 n X を説 は 選 しこ で 中 別 2 は こう たか 沢 玉 あるとい 易 の念仏とい は、 上 から 明するところ ということは、「選択 人の というの あっ K L お し、 の二字 なく、 2 1, 正 念仏を説 うもの ても、 特 る 行 かい 1, 色であ うことです 5 を取 を得ること念 か うと、 法然 うも な は 0 ___ その を これ に出 唐 切 って くか りま 調べてごら 上人 土 K 0 浄 5 通 は て 雜 0 ということが -は すけ くる 土 0 人 ず 5 行 本 い ると 本 願 師 お 0 14 を 1, かい 願 部 n 立 念 な わ 捨 11 カン K 念 諸 経 仏 N な る け カン 如 7 仏 K K でご 流 な る は 0 貴 出 0

7

うのは でありますけれども、「本願の念仏」は善導大師もお述べになっていますから、法然上人の特色とい 「選択」というところにその義があるわけでございます。

聖光上人のみ教え

その教 \$ 0 こにどういう具合に受け継がれているかというと、それは言うまでもなく『末代念仏授手印』 上人が三祖に伝えたところの『末代念仏授手印』の中に、 Ŧi. 最後のところに、「釈して曰く、我法然上人の言く、 それが二祖、三祖と受け継がれていくわけで、「選択」ということは、聖光上人の教えでそれはど 念も四修 えは継がれている。 も皆俱に南無阿弥陀仏と見ゆる也」、こう出ておるわけでございます。 特に『授手印』の奥図と申しますか、六十七歳 善導 聖光上人の教えがある。 の御釈を拝見するに、 の時にお作りになって聖光 源空が それ は 『授手 目に の中 は三心 印

最後 ある。 してそれは たが は n 聖光上人はそれをお受けになって、そして『授手印』 って聖光上人の教えも、 「結帰 を一口で言うと、ご存じのように「結帰一行三昧」であります。『授手印』を纒 「結帰一行三昧」即ち「南無阿弥陀仏」に帰するということ。これは聖光上人の教えであ 一行三昧」、 即ち 「南無阿弥陀仏」 法然上人の教え-に帰する。ここは伝法で言うところでござい 先ほど申しましたように「選択」というところに の奥図でそのことを言葉で示され めて言うと、 ます。 た。そ

L

るだけでなく、浄土宗のお念仏の教えにもなるわけです。

しまし かい た し二祖聖光上人の教えの 『授手 印 0 中 の奥図 特 結帰 色は、 その 行三昧」 ほ カン が聖光上人の教えの K \$ まだあります。 それを調べてみますと、 第一だとすると、 第二は ま申

念仏」というのが聖光上人の教えの特色であります。

す。 間 たもので、 であろうか 八万の法門を自然 それ にどのようにして受け入れられて その下巻の中に、「聖光上人云、八万の法門は死の一字を説く。 はどこに述られ 国文学のほうでも、 とい う説 K 心得たるものにてあるなり」これが もありますし、 てお る かと申 この 時 いずれにしても法然上人の いたかということを知るには、 i 代の ますと、 思想を知 『一言芳談』 る上に、 『一言芳談』 ある という、 お 弟子 1, 非常に参考に は 然 鎮西上人が の下巻に出 また念仏の の念仏門の関 れ ば 則 ち、 教 15 7 お 書きにな お 死を忘れざれ るものでござ えが 係 ŋ 0 方 般 から 製 2 0 た され 0

9

り死を念ずるということで、二祖上人が言わ それ ら言 われ る のが 念死念仏。 死を念じ、仏を念ずる。 n たのはこの 「念死念仏」の二念に 結局、 お念仏を申すということは、 あ り。 こうい やは

を三祖良忠上人が

お聞きになって、『決疑鈔』

の第三巻にこれを

お書きになって

い

る。

それ

り、これによって厭欣 すと、「先師 教えて日 < 心を俱 先師とは二祖上人のこと―― せんと欲 世 2 者は常にまさにこの二念に 一子が所存 0 如 お きは い いて心を ただ 念死念仏 カン けて忘 ざるべ

漸

々

K

薫習

せば、

厭欣

いずくんぞ起こらざらん。

まさに知るべし。一

切のことはみな免るべく死の

然に心 とい 門によってまた形 とい カン T か。 出 11 しい に 字は逃がるべからず――一切のことはみな、どういうことであっても、 0 5 ということの たということを、 必 来るけれども、 い ら考えを、 うこと、 死 心 仏 死 ま述べましたことは、 必ず死を怖れるものである。 いますか、 教 得た者 の一事、 が出てくる。 の終りを念ぜば、 者 0 往生するということは、 は、 根本には、 聖光上人は根本に 教 死 死をもって終る。 ルが違 えであって、それが 死を忘れなければ自然に八万の法門をやがて理解し、 に対する覚悟ということを説 免れることの出来ないのは死の一字、これは逃がれられないものである 即 それをお聞きになった三祖上人が『決疑鈔』の中でその教えを書い ち私 いますけれども、 P いずくんぞ厭怖の心を起こさざらんや」必ず死ぬという死の終り、 大乗、 は の考えるところは念死念仏であるということを、 り死というものが常 お持 小乗ありますけれども、 死を怖れることがあれば、必ず仏にお願 死の終りを念ぜば、どうして厭い怖れの心が起きないことがあろう 総てその死 い ちになってい ろい これは総て死の問 ろな小乗、 いたものが をい にある。 る。 かに受け止めるか、 それ 大乗に 結局 題。 往生浄土教、 仏の教え、 から 死を説 聖光上人の教えのお念仏の特色 よって形が 仏教の仏の教えというの いたこと、 八万の法門であって、 仏教そのもの全体 分かってくるものである。 方法を用いれば免れることが 違 死 い に対 聖光上人は をする、仏を頼む、 いますし、 それが してい 浄土 結局元で 7 お カン は K から 何 7 それ 覚悟 門と聖道 結 生 L かと言う の終り ある する を自 そう し常 念

死念仏によるということが、二番目の聖光上人の教えの特色である。

聖 出 徹 光 来 そ n 上 聖 る 択 人の 道 か 集 門 らも 聖 教えの は 道 K 5 捨 門 述べ てる は 中 9 法 5 に ほ 然 0 れ 聖光 は、 上人 うでござ て Li 聖 から E 人の 浄兼 る。 お 捨 い ۲ ま 教 学 7 ええ す。 0 K n の特 は 人 な 即 から 2 色は、 祖 最も ち聖 た。 から よく本 七 道 L 聖浄 + 門 ば 六 を 5 兼学 歳 捨 願 < ててて 聖道 念仏 0 時 0 を 浄 を K 閣されき 開 から お 土 菛 最 書 顕 を 7 き す \$ 取 とい 本 K る な る 願 う言葉 念仏 2 わけでございますけ から た 出 0 義 選 来 から ござ 択 を開 る 集』 顕 0 ます 注 n け 釈 n

就 あ 衆 生 n は い 聖 うこ 浄 兼 2 学 は 0 結 人 が 局 は 徹 徹 通 選 択 L 集 T しい る カン \$ 5 ので 出てくる あ る。 わ 大 け 乗 で、 14 念仏と 教 0 浄 1, 14 うことと大 玉 土 成 就 衆 乗 生 14 即 教 5 0 自 浄 利 14 利 玉 他 土 成

\$ 解 を そ そ 開 0 から n 0 から 行 顕 カン す 25 な 5 念仏 ることができ、 け 浄 れ to を称 聖 ば、 道門 そ え \$ 0 7 を 0 人 を 極 \$ こうい 理 理 楽 0 解 行 解 K 為 往 す Ļ 生す うことが n 2 ば、 浄 い うも ると 菛 そ だけで 0 七 い 0 うこととは、 十六 は 人 TF 0 歳 は 行 L 為 なく 11 0 浄 時 2 t V, K い うも 聖 結 \$ お 書 道 局 0 で 門 0 き 徹 E は は \$ 通 な 理 な 必 L す < 解 7 2 な 正 た す い しく る るところ ってくるとい 徹 人が なっ 選 択 最 集。 てくる \$ 0 よく \$ うことで に 0 あ 本 で 願 あ 理 解 念 仏 n 即 0 は 義 3

道

門

を

学

ん

で

理

解

L

7

カン

5

浄

土門

K

入るということが、

この

聖

浄

兼学

0

人が

最

\$

本

願

念仏

0

義

を

開

題

土

門

K

行

かい

n

そ

L

7

聖

道

門

を捨

7

る。

即

8

浄

門

0

お

念仏

だ

け

K

入

2

たけ

れども、

そ

0

た

2

K

は

聖

7

n

で

聖

浄

兼

学

0

人

から

最

\$

良

V,

浄

+

門

から

よ

<

分

かい

る

0

は

P

は

n

聖

道

門

に入って、

聖

道

カン

5

書道に 枚起請· 5 か Vi 解するためには、 徹選択集』 か。 理 て浄土門に行く。 と思うんですね。 解 文 することが しても、 私自身考えましても、 にしたがって例をあげますと、『一枚起請文』ですね。『一枚起請文』はどうでしようか。『 を読 であるとか、『決疑鈔』であるとか、 ある んで本当に徹底して理解をして、 その前 出 それはちょうど日本的なもの そうい い 来ない。 は 日本 K うようなものは、ご馳走でも、 い の食事にしても、 なかなか難しいと思うんですね。でありますか ろいろな、 たとえば 日本的なるものは非常に簡単にして要を得 そしてそこで信仰が起こるということはどうでしよ い ろい 『大智度論』であるとか、 私はよく分かりませんけれども、 ろ聖道門的な難しい 日本の食事はおい 教え、 L ら、『一枚起請文』 あるいはここで言うと い ということは こういうもの 茶道に たも な のが L ても を通 を理 か な 多

上で比 であ る。 るということが分かる。 世界で一 長谷 辛 る かとい 較 III と思っ 番 L 如是閑 た時 お うことが分か い 7 とい に、 L 食べたら、 しい 初めて ということを理解するためには、 う文化人が それをいきなり食べても、 日本食-る。 そ これ n は 自然 は甘味だと思って食べたら、 もう亡くなられましたけど、よく言っておられた。 懐石 の味である。 料理 のようなものですか、 何だ、 西洋の その味が分か これは簡単なもので、 食事 それ • 東洋の れ これ ば、 は甘味では ک ほ から 0 い か 料 カン 0 甘くもなけれ 理 なくて自 玉 K 味 は深 0 わ 食 日本の食事が 事 ご馳走であ 然 を味 0 深 0 味 ば辛く わ であ \$ 2 た 0

な \$ 15 そ n はちょうどお念仏と同じで、 お念仏だけ i, きなり聞 い 7 信が立 2 てい なけ n ば け

とが てそ 往生 5 んで 熊 分 出 谷 0 か 行 す 来 直 ね。 と解 実 ってくる。 な のような方は、 とが とい L カン うこ 行 しそうで ts とに わ n 7 な な 仰 れ 1, い いで信じた。 るうち 場合 ば、 これ E に は は もう仰 初 P もし法然上人のようなご人格 8 は 7 b P _ い っって 9 で信ずるという体 0 解 1 ることが か ら入って 理 屈 行って、そし .得 から をしていくことが の方がい なくて尊 て、 って行 い これ \$ に 0 れでなけ っだとい 行く。 出 来 る れ ば

六章 は な から るこ ぜ お 聖道 そ \$ 9 とが n 用 門を説 を終 P いり 出 T 2 来 7 書 るとい く必 K カン 1, る。 L なくても 要 75 うことo 即 が V 8 あ で 捨て る あ I んでし n か る だけけ 2 た た よら 8 お んで K 書 一きにな \$ カン す 聖道門 ね。 ね。 捨 2 番最 は 7 た る 必要。 0 初 た は 8 0 そこで初 K 即 ところでも 聖 8 道門 理 解 8 をさせる。 を説く、 ら終 7 浄土門 りに こう のこ 聖道 L 1, T とが 門 うことを法然 \$ を よ 理 捨 カン てる 解 2 でき、 た な 2 です

う方に 宗の 油 あ Ш 選択 ます 0 学 本 頭 カン 願 K ら、 念仏」 ts 5 n 祖 を た 上 方です 1, 人 は きなり説 多くの かい 5 人の V. だ ても分か た 1, 3 た に、 い 5 み な 特 2 K い。 15 周 祖 そこでどうしても聖道 b K E 一人は比 い る方 は 叡 天 Щ 台 で 勉強 の学 つされ 門 問 かい を 5 説 た方、 九 州 そうい 0 天

法

然

Ŀ

人は、

それ

を確

信

L

7

お

5

n

たた

めに

『選択

集』

をお

書きに

な

2

た。

本当

は

選

択

は

浄 \$ 非 聖 常 光 九 上人 に入 歳 に優れ で 5 郷 は二十二 里の n た学者であっ たわけです。 香 一歳で叡 月 荘 K たわけです。 お Ш それ 帰 りに お上りになって、 はや なって、 は り聖 その方が法然上人の教えを聞 その年 道門 足かけ八年そこで天台の学問を勉強され とい -の翌年 うも -に有名 0 から あって、 「な油 い Ш て、 の学 そこへ 頭と た 法然上人の ちまち なられ 聖道門 た。 教 天台宗で え を そして を 捨 お 7 聞 7

昧 東山 です。 た き K 順 7 祖 先 尼 ts 0 な 0 Ŀ で、 生 2 で、 n まっ 教 て、 2 最 人も天 は は 法 終 そ 非 法 た え ので、 た。 常 然 を 法 然 的 n ※上人の 二人 然 台 を手 に憤 お K そし 書 はそうで 上 0 l き に 0 学 人 から 慨 たちまち天台宗を捨ててとい て三十 0 問 教えを受け カン なさる。 場合ですが、 教え、 なっ をや ŋ に、 は -六歳 って、 な た 法然 L お カン 念 7 0 カン カン 秀才で、 上人 四 14 鎮 5 た \$ 十三 0 西 四四 わ 望 十三 は 月 義 けですが、 K 先生は あっ 天台、 歳まで天台の は お ح 帰 歳まで、 た b 5 方が、 黒谷 弊 うことになる K で そうい なっ 履 あ 沙 足 0 る 門 た。 如 勉強をした、 カン 法然上人の 2 う聖道 で け < い 八 捨てたと そして 5 生を終 年、 わけで 門 六十 先 間 教 か それ えを った す。 ほ K ら入っ ど申 Ł 5 法然上人正伝』 歳 ょ 聞 方だとい を捨てたということを福 i た。 2 い 0 述べ と帰 て、 時 法然上人と同 K まし ら根 5 た 授 'n 5 拠 K た 手 ま ま を立 印 L 5 お 結 念仏 た 書 「きに 帰 を け 7 じように、 お n 門 た 行三 井 作 K わ な 康 入 け n

ろが、 授手印』 0 ほ らを先にお書きになったんですね。二祖は六十七歳 の安貞二年にお 書き

七歳 VC 6 な なった。 と七十 徹 当 選 時 択 そし 法然 六 歳。 を 上 てそ 『授 人 お 書きに 0 手 の後 周 印 n 『徹選択集』 0 ならなけ 0 お お 弟子 念仏 P n 0 ば __ ですね。 ほ 般 15 うを先に らな 0 方 いい 々 『徹選択集』 0 お書きに 間 さら にそうい K 『識 なっ は七十六歳の時に 知浄 う空気 た 2 土 で 論 から あっ す を書 が たわ お P カン け 書きになっ 15 は で け りどうし n ば な た。 ても 5 75 六十 後 い よ カン

n 5 て、 そし 西 七十七 [宗要] て七十 六 歳 を K 歳 お 三祖 書き 0 時 上人 E K なっ 徹選択 は て、 往生をされ その二つを三祖 集 てい 2 る わけでござい K 上 人に n をお書きに 付属をされ ます。 なっ 7 い たその年に、 る。 七十六歳 心にそれ 浄 土 を付 要 属 即

と、

5

٢

安ら 教えも、 0 から 聖光 あ カン K 上人としては、 る 死 総 わ 7 け 2 で で 「念死念仏」、 あ V, < n ま かい 「結帰 ということで、 人が避け 行三昧」 ることのできな ر 0 n 教えと同 は法然上人の、 時 だ、 1, 死 聖浄 とい 皆さんもご存じ うも 兼学 0 0 を 人 で 1, カン あ 0 K る。 韋 L 提 て受け そしてその 希 0 念 止 14 K め お 通ずるも そし 念 14

幸 ず、 K 也 迎 で 幸 え る あ 世 る K カン 2 人生を送ると カン とい うことがあって、

そし うことを、 い うようなこ 年令 0 ٤ 7 長 3 生 0 根 短 VE 立 2 本 K 5 K 関 戻 は 係 2 15 た P 時 は く思考することが り私 に、 初 た 8 5 てそこ から 死 を 出来ると思うわけで、 K し、 人 カン 生 K 考 0 意 え 義 る で かい あ る 死 を この カン い か

5

が聖光

上人の特色であろうと私

は

思らんです。

私

た

5

は

S

だ

2

考

えて

お

n

ませ

2

け

れども、

結

局、

正

L

<

幸

世

K

生く、

年

一令の

長き短

きに

カン

カン

わ

5

禁じ難し」。 土 知 りや |兼学の人これを知るべし。 ただ聖道門の人、 すい。 おそらく総ての大乗教や大乗論とい こ
う
書 あるいはただ浄土門の人よりも、 いてあります。「但聖道門の人、 この心を得てより一切の大乗教を開き、 うものはお念仏を説くために説かれ 但浄土門の人はこれを知るべか 聖道・浄土兼学の人のほうが、 切の大乗論を見るに 7 らず。 本願念仏の義が 1, た \$ 随 聖道 喜 0 で 0 涙 浄 あ

たということが

感じられたと思うんですね。

とい まず 見 T 教えに入るということが述べられ しい るに ま浄 い そ の前 る。 うことが 浄 一切菩 その 土門 土 そして少し先に 教 のところから読むと本当は K 7 薩 義さらにも 書 入 は法蔵菩薩 の浄仏国土成就衆生 しい る 0 てあるわけでござい 後、 2 の本願 て教門 またこの選択本願 「沙門某甲昔聖道門を学せしの時 K ですが、そうではなくて一 7 違わず」 の義を知るべ い 分かり易い ます。 る。 これ ということで、 念仏往生の義を相 大乗教の教えも、 し。 は んですけれども、 『徹選択集』 また一 V, 切菩薩 切菩薩 い さささか まの 承す。二師 に述べられてい またこれを見て、 の本願か の本願か 聖 「それ念仏往生を知らんと欲 の国 道 • 上成就 浄 の相 を習らべしとい を習らべし」一 土 兼 伝 をも るわけでございます。 学の人これ 衆生の義 そして浄 って小 を習 うことを述べ 切菩薩 を知 乗 菛 の諸 い るべし 念仏の 伝え、 0 せば、 本願

良忠上人のみ教え

な ることは ŋ 次 ます に良忠上人の教えの特色は何 か に 容易なことで 説 ら、 カン それ n て用 だけ は い K 5 15 捉 n い われ てい わ けです か。 てくると、 る引用 ね。っ これは実際に皆さんもお読みになって、 0 経 報夢鈔』 思い 典、 から 漢籍、 けずほ 五十余巻ございますので、 国書、 かい 0 ほうへ入ってしまうわ そういうもの が非 良忠上人の教えを纒 常 まず量 K 巾 けです。 から 広くわ 多 それ た って そ で n 8

良

忠上人

0

教えは

難し

い

で

す

ね

ます。 まし n 忠上人研 カン を読 n 良 た。 た 忠 上 わ N で下さ 究 人は、 ほ けです。 N とい 0 三十 い。 少しだけ ら書 先ほどち 特 色 物 歳 を三つ がございます。 0 記主 ょ 時 9 に生 ば 教学 と話がござい 広法師 カン 0 b 特 あ げ 色 の勧 多くの ておきまし K 9 ましたけど、 めによって、 先生方 ζ, て とい た。 から お これ うの 鎌 二祖の浄土の 書きになって、 倉 で書きましたので、 かい 0 らそのことについ 光明寺さん 法門を聞 私も少し書 カン ら出 くため T 機 版 お 会が され カン に善導・ 話 世 7 し申 あ ま 2 L た た し上げ たらこ だき へ行 良

終 n 「徹選択 りに 三十 T 勉強され授戒されたも る。 八歳 「手次のこと」というのがござい 集 で筑後 「法然上人、 0 ほ らが、 の善導寺 三祖 浄土宗の のと思いますけ 上人も 聖光上人の下へ行って、 義をも ーこれ 2 れども、 ま 7 す。 弁阿 は比叡・ そこに書かれている言葉ですが、「法然上人、 K 聖光上人か 伝 山で戒を受けら 5 三十 九歳 n 5 は 徹 \equiv K n 選 祖上人に与えら 『徹選釈 た 択 集』 0 か、 を三十 集』 島 根 を授与され n 九 0 た 歳 鰐 淵 0 授 時 寺 # K で T 印 授 お 浄土宗 そ 与 0

さら L 0 義 畢 K h 2 祖 って弁阿 こう 上人 () 0 考えを書 5 K 伝う。 ふらに書 今また弁阿、 い た い 『徹選』 てござい 択 集』 ます 相承 を然阿 カン の義並び 5 K 譲 祖 に私の勘文徹選択集をもって、 b かい 渡しますということを 5 法然上人か 5 相 承 お L 書きに た 沙門然阿 義を三 な 祖 た。 K K 伝 之

そ n カン 5 八 + 九 歳で入滅されるまでに良忠上人は 五十余巻の 書、 聞き書き、 ある い は注 釈 書 お 遺

十九

歳

0

時

でござい

L

K

な

0

T

る

わ

けです。

そ 0 特 色とすることの第 は、 その 五十余巻の書物の 中で主なるものを見ましても、 三代 . の相 承

代に とい 本 願 念仏 う言 わ た って 葉を から 伝 非 伝 えら 常 えら K れて 重 れたところの教えで て用 1, るとい い T る。 うことであります。 意識 ある。「三代の相 して 「三代の 相 承 承 -即 2 5 1, 法然 5 0 は、 祖 先 カン にほど申 5 伝 え i 5 まし れ た 私 選 \equiv

決疑 お 書き そ を記 0 K 三代 15 す 0 2 み た 相 承 と書 決 疑 とい 鈔 いり う言 7 い 0 葉 巻 る。 五 は、 0 終 1, b 0 0 頃 ところに K 出てくる 「三代相 か と申 承 しますと、 」、「今三代の相 番 早 い 承 を 0 \$ は 5 五. + 一六歳 Ŧi. 0 卷 時 0 K

訓 0 み ほ ます。 うが 字 適当じゃ 『決疑 輒 を 鈔」 ないい 私 は 0 かと思います。「今三代の相承をもって、 \$ 巻五 2 0 ば 終りのところに、 5 と訓 7 でいい フク る んで す が送り仮名として付い が、 普通 たやすく五巻の決疑を記すのみ」― は 「たやすく」 てお りま 2 か す。 す 私 な わ は ラ

三代 と思 読 から 即 ては 私 む。 0 0 相 ょ ますね。 そ 1, ます。 ろ n 決 ま 承 私 疑 を L か 鈔 \$ 5 から 1, 「たやすく」「すなわち」「しば 「今三代の相 すす 2 わけですが、 『選択 だ。 7 なわ たやすく五巻 集』 輒 \$ ク に 承 9 この二つが ク と書いてあり をもって、 いて今日出 の決疑を記す」 が送り伝名として す 訓 てい な ま み らくし で す わ る す ち カン 1. ね。 ろ 五巻の決疑 5 だと、 『浄土宗全書』 1. たやすく疑いをここで解決 それ これ ろ な疑問、 どうも を かい 漢文の を記 5 \neg ここのところの そ すの L に n ば 辞典で見ます 書 らく み を三代の か れ と言 7 と訓 い 相 え L たとい ば、 る。 訓 ませ ٤ 承 で み そ 解 7 K うの 決を れ 適 やすく」と n かい は 意 5 た 15 今 前 0

きませ 信 は た T 11 だ 仰 そうすると、 1, \$ 「たやすく」 る 5 ん。 ば つば ら三 祖 L **『選** カン 0 5 宗 代 L 沢集』 もう しそれに カュ 教 0 2 相 訓 即 L <u>ー</u>っ 承 に しては ば 3 む \$ らくし 訓 \equiv 0 選 代 から み から 『決疑 択 0 二個 か、 ある。 相 番 本 願 前 伝 所、 鈔 後 0 2 す 念 は 0 た \$ あ 何で 意味 は 仏 る わ 2 な _ ば 5 1, ある で か 5 即 _ は な は、 かい 5 カン カン とい 『選択 です 決疑 難 と言うと、 南 L 砂 う訓 ね。 無 い 集』 呵 \$ で 弥陀 み 伝 す が K これ っぱら 通 ある Ļ 仏 9 記 い 『伝通 は 2 7 等 ٢ 先 で で n ほ 0 K す 記 ど申 出 疑 \$ で が 解 てくる 出てきます 問 決 に L から ک L ま あ 1, 0 n たし L る 疑 た は は 0 ましてもそう い よ を な け あ 5 解 い を 2 総 K 决 2 ま だ 1 で b 決 出 る い 祖 た

です。

後

0

意

味

カン

適当で

な

い

とは 代相 恵 0 ろ 良暁 よ 1, ま 5 隠 伝 ろ た 重 n のこと K な言葉をお 八十八歲 ない 私 与えた付 りまして、 K とい お とい の時 前 うことですが、 に 書きに 法 うと、 法を付す、 に、 玉 状 Ш K なっ 先生 寂恵良暁 P 法然 たも にはこれ 「三代相 ۲ 聖光 先ほど申 n 0 から は三代相 は 良忠 伝のこと、 あります。 実子で 良忠と一 のお弟子、 しまし 伝 のことで あるとい 世 貫したも ے たように二祖上人に 間 n トそ は詳 あるい あるとい 0 う論文が 0 隠 しくは から れ は子供と言われてい なけ な Ĺ うことをお書きになってい 調 ありますが、 ~ n てお は三つ ば みなも ならな りま 0 って王化するところ 古く 特 い 世 んけ る 色 わけで は 最 n 今岡 すね。 初 ども 先生 0 そ 結帰 その寂 そ

ので そう で 1, 1, は 5 で L あ 2 よ そ 5 とを言 n ます 0 聖 p 浄 矛 る。 カン 盾 兼 か 5 それ 5 L 学 た ئے んで なくて矛盾することが、 浄 カン 結帰 は、 5 土 宗 結 お _ 0 行三 教 念仏で救 帰 之 行三 昧 の 中 昧 わ と矛盾 K は n で、 法然上人の る 今日 するようで 根 戒 拠 で を強 から 薄く \$ 調 お Vi すが、 述べ なっ ろ すると、 い K ろ てしまうと叱ら な 私 な説、 は 浄土宗の先生 5 矛 た 聖 盾 選 净 L 沢 兼学 な n 集』 いり たこ 方 0 0 特 0 で から どこ とも 色を 戒 は から な に 大事 出 あ い され 根 カン ま 拠 だ な る方 から た。

n は 「選 2択集』 の中 にございますね。 法然上人が副詞を用い ているところがあ る 7 です。

そ

行三

昧

聖浄

兼学

というその二つ

を

おお

述べ

K

なっ

た特色

は、

相

反

するんです

ね。

相

反

して、

また

相

反

ī

な

9

0

教

え

K

なって

い

る。

そ

0

教

え

を三

祖

が受け

継

いで、

これ

を寂

恵良

暁

K

譲

られ

た。

ば 行に 択 とか 5 そこに帰する。 6 帰 K のところに 「試」という字なんですね。 選ん すべ と試 すべ し し。 で浄 した 正 正行を修 土 有名な、「それ ということです。 「且」というの 定の業と 門に入る。 世 にはす んと欲せば、 浄土 す から なわちこれ仏名を称するな 「試みに」 み それ 菛 出て P に入 ま カン カン 5 1, 正 K 5 生 助 2 りますですね。十六章ですか。 というのは、 二業 と欲 宛 且」というの を離れ せば、 0 中 K んと欲 は 正 完全に止めたというのではない りつ は時 雜 せば な 二行 名を称すれ お 間 助 0 0 業 中 種 意味と仮設 を K 0 傍 勝 は ば必ず浄土 法 らにして選ん 且 選択 0 中 諸 0 意 集』 × K は 0 味 K 雜 且. を から で 簡 生ずることを 行 < あ 2 IE 聖 単 を る。 です 道 抛 K 5 7 略 ね。 を IE. 閣 選

K K 聖 0 帰 道門 す 且. n ば を 持 とい とい ってきて、 う意味 うの は、 から 聖净 ある。 ち ょ 兼学をす 2 この との 間 且. ると だけ 聖道門を置い というところが、 いい う意味 か T あ お る そこに断定を法然 い い て、 は 仮設で、 また L \$ ばらく経 L 派上人が 聖 道 2 出され を捨 た ら二 7 7 祖 T 浄 0 75 よ +

しい

意味

から

ある

わ

け

、です。

得、

仏

0

本

願

K

よ

るが故り

な

り」。ここに

. 且.

があります。

願 に、 それ 0 念仏 法然 傍正 カン は 上 5 善導大師 人の のところ 試 教 み もえ、 に \$ とい 浄 ^ お 説きに 土 出 うの 宗 てくるわけでござい 0 は、 なって 教 え 三重 尼 いる。 貫 の選択のところに出てくるわけ ī L 7 か 流 ますね。 L れ る 「選択」 0 「選択」 は 選 ということは法然 沢本 とい 願 5 0 で 念仏 0 す。 は、 であ 先 第 上人 ほ 四 ど申 る。 章 だ で け そ L L 0 0 ま た 中 かい 0 た で も本 廃立、

無量 寿経』の異訳本をごらんになって、 『大阿弥陀経』 から「選択」 という言葉をお取りになってい

選択 助 廃 立 る。

どのように受け取 に、 先ほど言ったように、 い その ま 「略選択」 解 釈 から で三重の選択 5 その人に た 廃立、 カン 0 違 よって、 助正、 い いを述べ が 出 てくる。 ある 傍正 ましたが、 とい い は門下 う教 それ これを易しく言 は に 之 よって、 K 選択」 なる。 とい 法然上 『選択 5 うとこ た場合 人の 0 お 念仏 第 K K 出 四四 は 7

取 持 < る ってきて、 かい み 選択」 2 な 傍 どれ 違う Ĩ 正 とい を選ぶ わけです うのは選ぶわけです カン は、 ね。 そう その人に い 5 か 違 よって、 5 い と同 どれ 男性 じように、 を選ぶ と女性、 か。 廃立 若 た とえば 2 1, 人と年 助正 お 寄り 2 盆 0 傍 K Ŀ よっ にい 正 それぞ てどの ろ 2 な n ケ ケ 取 1 1 5 丰 丰 n を を

今若 立 から 劣 0 後 義 5 で 0 L 5 ですね。 は 善 7 0 出 7 導 から 7 L, としと ま 0 K る 前 よ カン \$ 5 2 n 0 のとこ ます 2 ば 5 いい ٢ ほ 初 うことは ろ が、 ろ 3 かる K をも K 0 廃立 \$ 出 出 知 7 0 てくると思うん 0 は択ら くる を て正とする n 難 お わ 択 しい な け ŋ 1, で K す。 聖浄兼学な 0 な です。 み 2 義 た。 ک n 0 これ 7 殿 は んて n 最 \equiv 義 が出 は 知 は 廃 い b 0 うの 難 殿 立 てくる場 「若し」 0 最 は 義 で 諸 1 とんでもないことである を択ると、 とい 合に、 カン 々 5 0 う言 学者、 どれ さっ 念仏だけ 葉 き言 が優 取 で 捨 す 心 n 2 ね。 とい た K T るべ 5 試 て、 試 これ 0 み 及 は K は 廃

る

時

K

違

てく

る

わけです

ね

察 だい 礼 た 拝 l, 源 智 潜 上人が 嘆 供 養 廃 ح 立。 5 助 1, Ī 5 \$ に なると、 0 を 用 い 念仏以: る わ け で、 外の 行 ح P n は当 \$ 然 L 司 い ま 類 申 0 助 L 上 業で げ よう あ るならば、 É 聖光 上 人 読 \$ 誦 良 観

然 願 諸 75 で 上人 行 傍 諸 ĪĒ. あ 太 は 用 5 る 願 わ P 行 異 かい \$ 0 n 義 多 る K K は わ 類 少 る ts わ よ n 0 E" H 違 け 5 る。 から 助 7 5 業 n \$ で し、 ども、 5 違 総 0 \$ は つ T カン を お あ 着 てくる 諸 2 説 ŋ ます そ 行 きに 1, る うと \$ n け 住 わ は 本 な って 傍 れども け 助 願 幸 業で で Ī い 1 2 1, 助 るご本 あ Ī 助 食べ いるとい は Ĩ る、 2 助 念仏 重 が 正 なる こうい ござ うとこ 0 場 から 部 本 い 合 ろ 5 ます 願 分 K \$ から で から は、 違 あ あ 0 ね 5 る 総 \$ 2 て、 た わ わ 7 2 念仏 とえば け け ば で で 6 往 生す す。 す 可 0 助 衣 類 ね る 0 諸 業 食 違 住 助 行 0 に 業で から は うところ な 0 Ξ 本 念 る 願 14 9 あ 2 だ。 る で K は は あ よ 念 わ けで、 異 る 5 14 傍 かい T 類 0 非 カン 助 正 0 業 法 本 な は 助

1, 5 0 は 分 B H は n 方 選 K 択 ょ 0 2 て、 仕 方 多少 K あ 門下 る わ で、 H で す。 派 から 諸 行 本 願 於義、 念仏 本 願 義 2 1, らよう É 分 カン n てくると

ども 法然 から 浄 西 土 上 n 方 宗 人 は ٤ 法 0 0 信 目 然 1, う意 仰 的 上 とす 人 で 味 0 あ る教 から り 上 入 で 法 え 2 は た 然 を \$ 説 0 5 上 が、 人 < は 0 わ 0 法 宗 け き 然 教 で b Ŀ す で 人の選択 あ ね。 7 る。 1, 所 る 求 求 わ され けでござ 8 る 1, とこ 5 たところの 0 ろ は い ます は 極 しい が、 極 楽 ま 楽 浄 0 浄 \equiv 浄 土 9 土 + 宗 K 所 n 5 0 帰 所 は 11 T 求 極 楽 信 所 帰 浄 仰 す を 土: 立 る で 所 1 去行 T る は け 四 n 0 から

弥陀 無 た 7 7 報 廃 身 14 SI 弥陀 立で でありまして、 0 四 弥陀 択 仏 5 n であ を選 n 仏。 Š 去行 ります 法然 0 は **上人の** カン 1, さっ 5 5 0 きの これ お は、 択 一若し を願行具足の りになっ 念仏であり、 善導 た阿 K 弥 ょ 念仏とい 5 南 陀仏というの ば」「試みに」 無阿弥 うように 陀 仏 は は な 道綽 って、 これ 阿 弥陀 は 法然上 善導と中国 お 仏」で 択 ŋ 人はこ E なくて、 カン な る n 方 を K 基 南

T で n から n ウ 生 n 憤 往 から どうの、 ま 先 0 は 4 L 慨 生 結 念 非 から ほ ど私 され 常 出 あ 論 14 来 で 即 K 2 戒 何 7 から す 戒 記 る が、 発言 憶 がどうの、 たることを言 0 申 か。 戒と念仏 K i K 「自ずからそこに戒 まし 残 な 私 L って た ぜ P 方が 円 たように、 い 四 い 頓 0 Iってる ます。 + 戒 問 まだに、 八 から 題 戒 K 個 必 教学大会で、 んだ、 要 L がどうのこうの、 人の 5 念仏 か な 1, から て、 名 L 0 備 浄土宗 前 か 即 ここにも わ 円 戒 は る そう 頓 先輩 か は 戒 念仏と戒とい こうい 戒 で () が お あ う質問 る そん 念 あります 必 0 要で 専 仏で 1, う説き方。 は本 門 なことは ある 家 極 から 当の 楽 カン うの の宮 あ 往 5 b カン ま 2 から 念仏が称 林 必 生 勘 弁し 要 L 1, 出 先 K され 決 生 た。 うことに な ま から T いり って その えら た時 いい とえら い ただ 5 るじ n 5 時 75 飞 い に、 い 0 n L て、 怒 P て、 1, ば、 中 それ な ろ 2 6 てま そ これ 非 n い い ħ ろ 常 を ま か 聴 ľ は す K 恵谷 が、 た。 円 憤 1, 六 頓 慨 T 念仏 そ そ 戒 ジ

1

方じ ح てきて と法然 具足の念仏というのはなかなか難しいですね。 n P は ない しようが 上人のご本 ことだと思ったことが か。 ない 始 終怒ってる方は、 0 中 んですね。 に、 具足してい だか あるんです。 三心 ら始 るかしてな 終顔 から 具足 から してい 歓喜 至誠 にこや 1 心 踊 かい カン な 躍 0 調べ 深心、 な人は、 1, の念仏ですね。 0 か 方があるんで、 回向発願心。 なと思 おそらく歓 って お念仏申 お 喜踊 私 どうして知るかっていう る は んです。 してたら嬉しく 昔それ 躍 の念仏をし

が、 まだ 出 L けです。 7 てくるわけ あ 助 亡く る お 正 元気で 時 た K そ なっ わ なると、 け S 0 で た です。 親 と気が い す。 とい 鸞 5 上人ですら、 これ 2 つい それで笠間、 うんで当 そして越後 L は P た。 親 n ば 鸞上人ですら助 上洛 法然上人 時 三部 0 0 鎌 奥か す 稲 倉幕 る 田 経 の言 0 お ら、 あ 府 0 0 われ たりで、 b 法然上人が IE 0 読 りで ある関東 0 誦をまだこ お た あっ 0 念仏をして は 親鸞上人は主として農民を相 流 たろうと思うんですが、 罪を解 の時 向 上野、 専 い おや 修 かれ た 下野、 んです b だ。 ると同 K なってい そうすると ね。 上総、 時 K 毎 これ 下 解 日 た。 手 総 かい 三部 n K \$ ^ 利 た。 布 異 部 教 根 説 経 をされ 法 経 III から の読 あ 然 K の読 沿 上 人が た うて ま 誦 わ 誦 な

L カン L 最 後 は もうはっきりし ている んですね。 最後は正行に行 か なければ、「選択本願 の念仏」 K

た

わ

け

で

け

る

時

です

カン

ね。

そ

n

で

 \equiv

部

経

0

読

誦

を

お

p

3

K

な

2

た。

即

3

助

E

でや

2

T

た

\$

0

から

廃

立

K

至

は

p

5

なくて

P

お

念仏だけ

で往生

出

来るとい

うことを、

ある

年令に来て、

気が

0

1,

た

のが

稲

K

お

ことに 命や 行 K カン って なけ な 諸 行 行 れば、 7 本 かい は な 極 願 困 い 楽 義を立てる。 るわ 2 往 浄土宗の法然上人の一貫 生 浄 けですね。 出 土 来る。 宗 傍 0 これ 正 ただし、 選 で 行って 択 は当然なんですね。 本 願 は、 i 親孝行しなが に た教えに これ 貫 ĩ は親 は た 三代相 らでも 孝行 ですからそういう説 行 カン ない をしても 出 承 0 来る易し んですね。 念 極楽往 14 K 行 1, です 生 カン お き方をなさって、 念 出 75 カン 14 来 から る ら法然上人の教えで 大事 15 商 売 んだ それ を 生 で 終 縣

就衆 無阿 きに なってくる をすることもお ウ 祖 そこのところ ts は 上 弥 兼 全体 陀 学 人 14 を た 0 が、 著 説 を見てこ 南 述で 無 1, その 識 が、 念仏を称えることも同じであるというところへ会通 呵 た 弥陀 は 知 れ 徹 前 助 な 浄 仏 選 は K 正 V, + 沢」 1 P 2 論 5 傍正 0 P ウだというので、 い う説 お を 2 0 2 ほ 念仏とが お で止まっ 書きに も出 5 『授手 は、 てくるわ p 同 なっ 印 7 は ľ い 耳だけ触 りそれ たけ で で た けで あ んで 后結 る。 れども、 す。 帰 は 0 線 不 い ってこれ 離 行三 け ある 上 捨てな 0 仏 な 味 過 ーつ。 い。 はゾ 程 値 聖光 だ 遇 カン を け だ ウだと言うことは L 14 お 2 とは たです カン 7 を見て、 立てになっ 上人も、 ら中 い 同 5 ね。 に た ľ 聖浄 総 は 75 0 てお 心てを律 カン から N だ。 え 兼 -識 学 間 徹 2 5 知 7 結 を晩年 違 選 n 沢 浄 局 た。 六 14 0 度 そ 玉 K 万 土 n お は 成 は 説

5 らに です か お説きに ら法 然上 15 いってい 人は、 るけれども、 n を選ぶ 0 それはそれを選ぶ人の自由 は 自 由 に、 若 しこれによら なわけです。 ば 試 み K です n か K 5 よ わ 5 ば れ わ n が

る。 た けでございます。 れ 方は往生するかというと、そうではなくて、 うことが仏の教え 8 生懸命にお念仏申している方と、世の中のために仕事をしている人と、片っ方は往生しないで片っ は法然上人のご遺志でもない に、 なるけれども、 ま言った傍正のほうであるとか、 の目的でありますから、 先ほど言いましたように、平等往生、 į 遡っては釈尊の遺志でもない。総てのものが平等に救わ どうしてもお念仏、 助正のほうは、 両方とも往生の業になる。 一切に通ずるのが念仏なんですから。 出来る人と出来ない人が出てしまう。 六字の名号にならなければならな 傍正と助正のほうで行くとな れるとい その い わ

い うことも私書きましたが、 な お、 良忠上人の中で、著述というのは五十余巻ございますけれども、代表的なものが三つあると 『決疑鈔』を第一とする。その次は『伝通記』、 それ から『東宗要』が代

的な著述である。

表

四 源智上人のみ教え

あるということを書いた、 い う著述がござ そ n から源智上人の教えでございますが、 い ますが、『選択 短かい著述がございます。 集 につい 源智上人には T 0 い ろい これ ろな疑問に答えて、 は昔から異論があって、 『浄土宗全書』の第七巻に これが法 果たして源智上人 然宗祖 『選択画 、要決』と 0 解 釈で

件 0 著作 から う少 するまで である L は カン どう は 9 きり ک カン する n ということには K まで ょ 2 て源 は、 智 応 疑問がございますので、 上 人 源 智 0 教 上人の えを述べ で は ることは な い とい 今日まであまり用 う説 出 来 15 0 ほ VI 5 から 有 力 1, で 7 す 11 ませ H れども、 ん。 その は

上人伝 『勅修 そう 御 なる 記 伝 ある で あ 1, 1, る は 0 2 た 勅 かい い 修 何 源智 御 K 伝 よ 上人の 2 **河**四 T 源 伝記 + 智 八 上 、巻伝』)、 から 人の教えを捉 書 かい n 7 あ る い えたたら る 1, \$ は そ のを見て読 1, 0 1, 他 か 0 というと、 み取る以 法水分流記』 外に あとは な で 醍 11 あ 醐 カン る 本 法然

鎮西 十三日 これ たけ です。 い 5 0 'n まず る -を 上 n 0 た 枚 源 第 K 人 から 0 起 智上人に授けた。 K 日 何 カン に、 字 K 請文』 お 枚起 それ 必ず 出 起 カン その教えはこれだろうということを、 き L 明 K Ĺ 上 請 5 は がござ な から 分 文 \$ カン 正 K 2 カン 2 を授け 月二十 たご消息でも、 分 7 b い ます。 とすると、 ま カン 世 ŋ 三日 ます たし ん。 5 その n K 私 た ね カン この 起き上が 時 K から 0 『善導寺御消 だ 尼 から 金 かい 戒 何 源 お 『一枚起請文』 光 5 年 書 智 って 「き に 明 E カン n 寺 人で、 前 お は 0 なっ K 息 書 実 周 書 疑 これ きに 際 問 た b い というのが 0 か を カン た 0 ならなくても、 持 は 5 真筆を見ますと、 0 間 詰 だろう、 2 前 向 めて た カン 違 『専修』 0 5 い ござい は、 書 な い 間 しい くと、 カン 二十 は、 違 んで、 n ま その 7 い す まず まず なぞ な Ŧi. 1, 今日 カン 日 た い 源智 建 5 と思 \$ って二 K 亡く 枚 0 金 暦 起 を 上 前 2 戒 人は 7 なっ 光明 年 請 重 お カン 文 与 に 0 と思うん 5 お え 感激 て、 ŋ 寺 TE 15 あ は K 2 にそ 0 7

そしてその教えというのは『一枚起請文』の教えそのものを、法然上人がお亡くなりになっても、 生

涯お守りになったと、こう受け取るのが普通ですね。

5 伝 源 気負いなむことごとしとて留められなどして」即ち、特に自分は法然上人からこの教えを受けたんだ ると「隠遁を好み自行を本とす。自ずから法談などは始められても諸家五、六人より多くなれば魔縁 実だと言われているものですが、この中に源智上人が出ております。そこに簡単に ということをしないで、ただ念仏の行者としてお過ごしになる。どこでということになると、京都 2 て、その後五十六歳の時に往生する。 《智上人のお弟子を門徒と言っていたわけですが、法然上人がお亡くなりになった時には三十歳であ 西山系統の方で、室町時代でしたか、静見の『法水分流記』― ?のあたりで念仏を事としておられた。その周りに集まった信者の方々を紫野門徒と称する。この -法然上人から門下、さらにその後ずっと何代かを書いている。 (しそれはほかに証拠がなければ分からないんですが、『勅伝』を見ますと、『法水分流記』とい これは拠り所とするのに一番確 - 浄土宗の血脈と言いますか、 ---『勅伝』によ 相

お念仏申してて人が集まってくると止めてしまって、また自分一人で念仏を申していたということが 法然上人が六十六歳の時に、『遺誡』をお書きになった時、本尊、坊舎、 ;は信空にということをお書きになっておりますから、法然上人に最も近い、信頼したところのお そして大勢集まってお念仏を申すと、魔縁が起こってきて事々しくなるというので、 諸経等を、これ

文 化研 言 願 出 願 ただく人た 0 文が て 文 た 宗 それ きた 0 0 2 添 れだけだ K な H え書 非 第 書 寺 7 四 ま 常 弥 二十 5 カン 0 贮 0 n BI きである K 一八号 仏を造 名 貴 弥 た りまし 前 陀 重 んですが、 そし に から 14 なものです。 すず た。 源 像 2 て、 伊 7 智上 1 0 これ 藤 同 胎 2 人の そしてその と書 時 最近になって、 唯 内 真 K は か 先生 そして源 法 非常 ものも、 5 カン 然 n 上人 源 0 7 に 中 V, 智 貴 智 る。 上人 重 それと比較し K 源 0 滋賀県 報 一な資 Ē 願 智 と法 その 恩謝 人 0 い 書 料。 0 を書 筆 然教 願 0 徳 か 文が 滋賀 跡 0 n 真言宗 1, て て、 団 もそれで分 念仏行をする人たち、 た み \$ 県 出てきた れば、 その中 とい 0 0 0 が 信 お うので、 出てきた。 楽 寺 真筆 か 町 に署名をして入れ カン んですが、 5 b とい ます で ある 出てきた阿 源智 うところ これ か それ かどうか 上 ら、 その願文も、 人の は 法然上 0 黒 カン 弥陀 ら現 SIII 谷 た 玉 分 桂 弥 0 そ 世 人 カン 14 寺 陀 ると 0 像 0 14 _ 利 枚 益 \$ 14 0 起 0 造 供 う真 を から 文 養

n を SI 行 た 弥 0 わ 願 75 贮 けで 文の 1/ 2 た 像 1 なか Ē 4 が、 0 付 な が、 造り H その後、 が、 どうい K なって、 建曆二年 う道筋 その そ 年 の十二月二十 0 カン 0 分 中 十二月二十 か K りま 願 Li 世 0 四 文を書 んけれども、 四 日 K 日 に、 な い 2 て、 源智 7 1, 滋賀 結 E る。 縁 人 、県信 は、 者 正 月 0 楽町 名 お 二 前 そらく一 + 0 を入 Ŧ. 日 真言宗の れ K て、 周 法 然上 忌 玉 そ 0 桂 L 供 寺 7 は 養 亡く 0 開 0 呵 眼 た 弥 供 3

貴重

立なも

ので

贮

仏像

0

胎

内

カン

ら出てきた。

養

15

5

そ の文章は非常に長いものですが、『仏教文化研究』 の第二十八号にございます。 その願文から、

い < 5 かい 0 事 柄 を伊 藤 唯 真先生は指 摘され てお ります。

ることが法然 ず第 は、 上人へ 法然 0 上人 報恩行であるとい への報 恩 心の念が 非常 うように に 強くその お 考えになって 願文に出てい 1, るとい る。 うの そしてまた庶民の教化 から まず 第

7 が 浄 そ て菩 n カン を択 薩 6 第 となって 二に る K · 至っ は、 悟 た。 法然 りの 境 そして浄土 上人の 地 に行くというようなことが 思想 門 0 を択 遍 歴 るに至 から そ 0 願 5 文の中 たら、 述べてあ 下に述べ 往 生で られ る。 あるけ て れども、 い る。 即 往生だけで ち、 聖 道 なくて、 を捨 7

第 勧 進 に ょ 2 7 仏像 を造立して、 これ に 結緣 者 0 名 前 を収 8 て、 その結縁 をした人に 利

p

施そうとしたことが

第三

0

特

色で

あります。

7 n 第 5 四 は 0 特 た 色は、 だ 車 修 念仏 仏 像 P 0 造 百 万遍 立 K 0 は 多くの念仏上人、 念仏などを行 なって あ る い たとい い 、は奇特 うことが 0 男女が結成され 書 1, てござい てい ま たの す。 で あ るが、

実践 L: 人 1 K 者 たが 対 で、 す て、 る 報 向 それ 恩 車 修 0 行で 念仏 5 か あるとい を多くの ら言えますことは、 ら考えを持 人 々 K 勧 8 p ることに 2 7 は お ŋ 源 5 n 智 よって、 上人は た。 特 多く K 源智 選択 0 上人は本当に 人が 本 願 往 の念仏」 生 出 来 0 念仏の行者でい n 実 ば 践 そ n 誠 から 実な 法 5 然

5

L

P

2

たということが言えるかと思うのであります。

益

を

75

けで、 人は、 カン れ 三上人の教えというものは、 多い また鎌 教化 どうして資料をごらんになっ ことがその特色。 0 倉 た 8 に帰るというように、 に移 動 L 7 いることが多い。 博引旁証。 それぞれ資料が 非常 た 漢籍 か ということなども、 に移動されてい か 上総、 5 いろいろございます。 し、 ろ 下 1, 総 ろな たに カン 5 \$ 鎌 まだ檀林 \$ のをお引きに かか 倉 ことに三祖 鎌 わ は成立 らず、 倉 に 1 ts たと思 著述 してい 2 た。 上人のも から 多い な だ 2 た い 1, けれども た 0 ということ 京 は い 三祖 都 上 わ

念上 念寺のご住職 動 この太い 脈 そ れぞ 人 をごら 三上人の教えで感じられ から 通 ,: っていて、 れ 2 捨世 に特色がございますけ イプというの である森博純 K な 派 0 ったことが その 祖 である称念上人の著 は、 ほ カン 先生にお訊きしたら、 私 ると思い K な い。 は い ろい 偶 n 然 ども ます。 心院にそれが ろな対機説法の教えがその上人によって違ってくるということ この二十四 述があるということが伝記に 要するに そうい =; あ 日 う意味で、

これは一つの参考になると思 「選択本願の念仏」「一 三年前に仏教大学 る K 京都 0 カン な い まいりまして、一 0 か。 の平 たま 出 てお 向専修の念仏」で、 先生と一心院 た ります まその機 心院 け 0 会を 開 れども、 0 Ш 調 得 で あ ますが、 查 だ行 太い 誰 る 称

博引

旁証

0

教えであると言うことが出

来

る

わけです。

2 た。 その時に、 伝記にあると書いてある著述もやはりあるので、 それを拝見して、 コピーしてい た

だいてまいりました。

法然上 手 のは、 L \$ 誠 派です。 印 南 捨世 0 諸 無 人の 呵 捨 派 ちょっと余談でございますが ってその 仏等 と同じことを述べている。 弥陀 捨世 世 神髄 0 は 仏願 うの 仏。 派 即 業 を開 0 8 堂塔 出家中 行 目的とすることは、 は 仏智にしたがい は 顕すること。 供養 浄土宗の一 専修念仏 の遁世、 る南 0 無阿 即 で、 出家者 つの て修するところの行者なれば、 行に尽きると言っても過言ではないというように私 ち還法然、 弥陀仏。 捨世 称念上人がお 派になっておりますけれども、その捨世派 の遁世を捨世派と言う。 派 このほ の開 法然に還るということであって、 祖である称念が生涯を通じて追 カン 述べになってる さらに余念なし」と、 だから二重の 極楽往生も んです が、「 源智 南 無 出家をすることが それの実習であ 上人、 呵 我 い で面白く感じました 弥陀 求 は 弥陀、 8 てい ある は感じま 仏。 亡者 た 釈 迦、 は 2 0 П た。 証 向 授 世

世派 ちょっと申し述べた次第でございます。 から 出家でも二 派 成 立したとい のや ってい 重 0 うような、 たことは、 出 家であり、 たい 徳川 即 時 5 へん興味のあるところで、 出 代の 一家にお 檀 林 けるところの名聞利 0 学問 か ら離れて、 これとあわせて思 即 養ということを捨てたところに捨 ち法然上人に還るということで い 出しましたので、

以上、「三上人の教え」について感じましたことで、とても結論を出すことは難しいことでござい

ます。お聞き苦しいことが多かったかとも思いますけれども、これで終らせていただきます。

ますが、その一端でも手がかりになって、これからお読みいただければありがたいことであると思い

研究所員研究成果報告

三上人大遠忌を迎えて

研究所員(北海道支部) 片山 浄 教

る機会を頂き「北海道の開教」について粗末な提案をさ昭和六十年度の教学布教大会において、意見を発表す

せて頂きました。江戸時代から明治時代の開教の歴史は、

今日では道央圏の市町村に五百万道民の約半数が集中す鉄道と道路網の開発にともない内陸にも都市形成が進み、岸に寺院の建立と布教活動が集中していました。その後、人口の分布と産業・交通網(主に海上交通)の関係で沿

関連して水産加工業の不振は、漁業を基幹産業とする都海里内の操業が事実上締め出された北洋漁業の減船問題の後も炭鉱の閉山による炭産地の人口流出や米ソ二百

るという状態です。

市が多いだけに深刻な問題となっています。

ど、産業経済の環境は著しく悪化しています。さらに国また、農業も慢性化した米の減反、畜産の生産調整な

鉄の民営化による職員の配置転換を始めとして、これら

一そう進行させることが予想されます。の要因は、道外への人口流出や道内に於ける過密過疎

一方、寺院の護持運営にあたる我が浄土宗の宗侶

着しつつ愛宗護法の念きわめてあつく、広大な北の大地大先輩をはじめとして、それぞれの地域にしっかりと密

跡を偲ぶことができるのです。

十夜の実施率は九割を越え、

教化団は指定又は

に精進しておられるところであり、

また先達の開教の足

を東奔西走し、また厳寒の風雪に耐えて、よく念仏弘通

— 36 —

特命布 の苦労の賜にほかなりません。 教 師 の巡教日程を確立せしめ今日に至るは諸先輩

子供の所へ転居します。お葬式があると檀家が減るとい があり、第二第三の幌延問題がおきない保証 う現象がおきてしまいます。 とします。結局は一人暮しができませんから都市にいる 例外ではありません。例えば老人世帯で一方が亡くなる ないのです。寺院の運営も、 しなければならない背景には過疎地の住民や行政の苦悩 んともしがたく、 しかし、産業構造の変化にともなら人口 道北の幌延町が核廃棄物貯蔵所を誘 この時代の流れの中にあり の流動はい は何処にも 致 か

とらえるべきでしょう。 市の寺院のみの問題としてではなく、全体の問題として 核家族化による宗教浮動人口に対する教化については都 ありません。 市部や周辺の新興団地開教は北海道だけの問題では ただ、 都市に集中する浄土宗信徒に加えて

念法真教の巨大な道場が相次いで完成しました。さらに ごく最近のことですが、 札幌市の郊外に立正佼成会と たのです。 るところです。新興教団の出発点は、いずれも共通して

年で既存寺院の建築ブームは一段落したことにより、 阿含宗やものみの塔などの教会が目につきます。ここ数 は平均的な寺院の遠く及ばないものであり、 築ブームが始まった観があります。 複する信者の財政上の理由からか、 しかも、 今度は新興教団 彼等の集金 その巨大さ の建 重

である」と、小田晋筑波大教授 教の教祖のところへ持って行くお金より安上がりな時代 ただ体の病気を治すだけなら医者にかかる方が、 のに困るとか、 病気にかかるといった不安は減っている。 (精神病理学) の指

であります。「戦後の復興から高度成長を経て、

食べる

彼等の教宣拡張の手段については既にご承知のとおり

能力にただただ感心させられます。

治療を進んで受けることはなく、宗教にそれを求めてき 野といえます。 の側からも認識されておらず、 のです。日本では欧米のように、 など)病気を、霊能者といわれる教祖が治療をしてきた 病気治し」であり、 したがってカウンセリングや精神科医の 肉体的·精神的 むしろ避けている医療分 精神医療の分野が患者 (神経症、 心身症

伝を得意とし、立正佼成会はカウンセリング法座を設け 阿含宗などは水子供養をすすめます。マスコミによる宣 たり、教祖の著作はもとより多くの出版は宣伝と財政に ることです。病気治しにはじまって、先祖供養をすすめ、 と既成教団は手を出すことはありません。特に禅宗、浄 たとえ心の病であっても、 神道、 キリスト教などは苦々しい思いをしてい 病気治しは現世利益である

です。 後も、 代人の多岐にわたる要求に答えるすべもありません。今 ていたり、 既成の各教団が葬式・法事など表面的な仏事に終始し 新宗教が発生するための条件はいくらでもあるの 観光寺院化している間は、 自己実現に悩む現

現代人の宗教観がどんなものなのかを見たいと思います。 こうした既成・新興宗教の一般的関係の中にあって、

「宗教をもつ人の信仰理由

多大な貢献をしているわけです。

信仰はあなたにとって、どんな意味をもっていますか。 1 P, 先祖をうやまう、とむらう………十二% 心の安らぎ、落ち着き………………二十二% 心のささえ、心のよりどころ……二十七%

精神修養、向上心、モラル

IJ, チ、 1 ホ その他 とくに意味はない、 家内安全などの現世利益…………七% 15 ックボーン……十% 四%

NHK世論調査部編 わ か らない、 「日本人の宗教意識」より 無回答……十一%

百%……八九二人)

とに回答者のまじめさがうかがえます。しかし、心のさ 人、日常生活の規範として信仰する人が二割をこえたこ らえている人が圧倒的に多いのは、 さえやよりどころとして、精神の安定が信仰の意味とと 先祖の供養やレベルの高い人間性を信仰の中に見出す 信仰があくまでも個

人のものとして意識されているからでしょう。

「救いの構造」としての宗教について

不安に対し、 宗教は救いになると思いますか、思いませ

わからない………………十二% 救いになると思わない…………四十一% ある程度救いになると思う…………三十三% 救いになると思う…………………十% 四%

般的にいって、あなたは、わが国の宗教団体は次のよ

うな要求に十分答えていると思いますか。 イ、道徳の問題・個人の要求 はい……十三・六%

はい……十一・三% 無回答…五十七。四%

家庭生活の問題

いいえ…三十一・五%

はい……二十三・三% 無回答…五十七・二%

ハ、人間の精神的要求

いいえ…二十二・九%

無回答…五十三・八%

月刊住職増刊号より転載

ゆく中で、不安の解消を宗教に求めた時に感じとった答

現代人の自己実現にたいする不安が、益々多様化して

えは、非常に厳しいものがあります。 「救いとしての宗教」を半数の人たちが肯定しつつ、

満や批判があらわれています。

宗教団体の姿勢と、前記の問題や要求に答えていない不

僧侶のありかたが、問題なのです。即ち、「救い」と「救 宗教そのものは肯定しているのですが、

JU

されているのです。

われる者」との媒体としの教団や僧侶が、するどく批判

いいえ……二十九%

なぜ今「自行化他」なのか。三上人の大遠忌を迎える

由を考えなければなりません。

にあたり、能化としての永遠のテーマが強く叫ばれる理

この際ですから遠慮しないで全国の浄土宗信者に対して 御遠忌を機会に、総大本山の修復工事も結構でしょう。

教団や寺院、

るものと信じております。 の流れであり、まさにその方向に向かって進行しつつあ はおくとして、 大いに宣伝して協力を仰げばよいことです。ハードな面 自行化他を実践する教団に蘇ることが時

が腐心した時代の様相となんら変わらないものを感じる のです。三上人の遺徳を偲ぶ時、能化の心に刻む字は まさに時は、邪宗異流が巷にあふれ、あたかも三上人

自行化他」の四文字であろうと思います。

寺檀の関係についても、本州とは状況が異なります。例 えば、墓地にしても境内墓地は極めて少なく、多くは自 とらわれないおおらかなものがあります。したがって、 北海道の開教の歴史は浅く、人々の気風は古いものに

がら生きている姿は、「生」は「苦」なりという哲理が 長寿世界一をよろこぶ反面、老人が不安や孤独に耐えな 仏縁と受け取るところであります。高齢化社会を迎えて とき、三上人大遠忌を迎えることは、誠に意義のふかい 信仰の個人化と多様化をふまえて北海道の開教を考える こうした地域性に前述の過密過疎の進行、 核家族化 などあまり問題にならないのも特徴的です。

治体の共同墓地です。兄弟で宗派や菩提寺が異なること

質が問われる今日、「自行化他」こそ時代相応の開教条 今日ほど実感として受け取られる時代はないでしょ 宗教浮動人口の対策が課題であると同時に、 能家の資

件といっても過言ではありません。 輝く法灯

心に光を」に向かって……

(北海道第二教区・天徳寺)

金 光

研 究所員 (東北支部) 四 部 定 孝

平争乱の時、 受けられ、幼名を白竜丸と称した。 北 方するは当然の事であり、 は九州即ち筑後の国松野の郷に久寿二年(一一五五年) 娘である。 われる。しかし空也上人は青森までは足跡がない。 東北における浄土教の布教は空也上人が始祖であると 円に及んだのは金光上人によるものであろう。 H 父長安寺国平、 長安寺氏は平家の縁につながり、平家に味 又は当道及麿の子なりの説あるも、 当道氏は源義経の命を受け長 母平小路良子のあいだに生を 平小路良子は平実盛 当 上人 一時源 東

> 学び、応保二年養父当道国平と共に渡唐儒学を学ぶ。長 に仏学を学び、応保元年(七歳)高良山精覚に八宗論を る。 音様のさづかりと養子となし、 永暦元年(一一六〇年)六歳のとき石恒山専修院覧証 種々の説あるも何れが正しいか難解である。 現若丸となづけたのであ

当道氏夫妻に拾ろわれた。当道氏は子なきをもって、 証浄坊となのり乳乞に巡り、二月十八日石恒観音堂にて

観

て初陣、 寛二年(一一六四年)専修院にあづけらる。 無常を感じ出家せんと登嶺されるが、 の父親と知り、 仁安元年(一一六六年)現若丸(白竜丸)十二歳に 知らず実父国平を殺す。最後の国平の言葉に 又関重太夫により事の真相を知らされ、

実 L

安寺氏を討った。

重太夫は白竜丸を無事生育せんがため僧家に身を替え、

会っておられる。

関重太夫は金光上人の生長に及ぼした

路中熊谷蓮生坊に

長安寺国平は家臣関重太夫に乳飲児白竜丸をあづ

敗戦となった平小路良子は病床にあり

日

向高千穂に遁走した。

41 -

影響は大きいと思はれるが、その人柄については今は知られた。 原塔谷円輛に三帰五戒を受け十七歳剃髪、法名円証とな 東塔谷円輛に三帰五戒を受け十七歳剃髪、法名円証とな 東塔谷円輌に三帰五戒を受け十七歳剃髪、法名円証とな 東塔谷円輌に三帰五戒を受け十七歳剃髪、法名円証とな 東路谷円輌に三帰五戒を受け十七歳剃髪、法名円証とな

当道及麿もこの年出家している。 密灌頂を受けて、 石恒の金光坊の名はここよりうまれたものである。養父 二年(二十九歳)勅願所、 れている。法隆寺、 から『末法念仏独明抄』を考案され、生涯かけて執筆さ 精覚より破門され再び登嶺、 承安二年 (十八歳) 八宗一 法名を金光坊と改められ 唐招提寺、 石恒観音寺別当を宣せられた。 正覚院に入り座主明雲に秘 悟の大要を宣布し、 四天王寺等に歴学、 た。このころ 三井寺 寿

とき申し述べたいと思う。

『勅修御伝』によれば、

末尾に

「石恒の金光坊は上人

の耕地を耕作せしめる等、貧農救済につとめられた。四田畑拓法に励み民衆に働き乍ら説法し、また貧者にはそこの間、単に観音寺復興にのみ励んだのではなく、自ら年)三十九歳にしてその功により大僧都に補されている。 爾来観音寺の興隆につとめられ、建久四年(一一九三

十歳の 阿波の介と金光上人の関係については折があらばまたの い おり、 あったことになる。阿波の介と会ったのもこの頃である。 建久八年五日上旬といへば、上人の入室は二祖より前 から金光四十一歳宗祖六十四歳である。二祖聖光上人は ある。金光はただちに京に上り法然上人に弟子入りを願 願寺別当の地位も捨て、浄土門に入ることを決したので 楽房の辻説法を聞き感じるところあり、天台宗を脱し勅 浄土念仏の総てを学んだ。建久六年五月入門とある その訴訟のため鎌倉長谷の観音に留宿のとき、 時観音寺境界に争いごとあり、 鎌倉幕 府 に訴えて 安

称美の言を思ふに浄土の法門閬奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り称美の言を思ふに浄土の法門薗奥にいたれることを知り

至る。 衛門、 県栗原にいたる。 年(一二〇一年)四十七歳鎌倉近郷を布教し、更に宮城 牛の縁起は今日も云い伝えられている。 ち正治二年福島県会津まで至るもまた京に帰り、建仁元 づけ、宗祖より拝受した弥陀像を残し六道山往生寺と号 を招く、 と京に帰り、 定められ、 与左衛門生れ変った様に一字の寺を建立して上人 気の狂ったのを救はんと法然上人の教いを受けん 金光大いに喜び彼の願により剃髪法名然光とな 鎌倉まで下るもまた京にもどり、つぎの年即 宗祖御作の阿弥陀如来像を拝受して栗原に 建仁三年栗原に往生寺を建立し、真伏 強欲な百姓与左

即 この頃宗祖及聖光、 安楽、勢観より文通も度々あった。

建仁元年 正治二年 源空の 源空の書状を鎌倉で受く 書状を栗原で受く

建仁二年 聖光の書状を小牛田にて受く 安楽聖光の書状を栗原で受く

源空の書状を遠田八村で受く

源空勢観の書状を遠田にて受く

栗原の五郡を宣布した。 二〇四年) 往生寺を中心として上人の教線範囲 から翌年五月まで、 修験宗等よりの防害は相当きび 加美、 志田、王造、 は、 元久元年 遠田、

治元年

(一一九九年)

四十五歳にして東北の布教と

しかったようである。 ことこまやかに便へられ、 承元の法難の時には、安楽、 特に安楽房よりの便りは斬刑 勢観、 宗祖よりの便りに

御自作の御真像をいただいている。また宗祖赦免につい は旧当道家縁りの方々の力によるものであり、 とあり、 直前のものと思はれる。 また宗祖以下の流刑高札は、 宗祖の配所をたづねておられる。 鎌倉由比ヶ浜で見て 宗祖との 法然上人

おる 面

会

て善明を供して東陸奥に至った。 ても相当つくしておられるようである。 建永元年(一二〇六年)二月四日栗原から平泉、

んで 陸奥の布教を善明にまかして自身は西陸奥に名残をおし 国分寺派、真言宗大泉寺(現在浄土宗) にて布教、

東

惜別の心さながら東西に歩を分った。 救 露 はる」道 の身に我昔の罪は重くても は 弥陀 の本願

四月仙岩峠を羽州に越え平賀部を布教し、 すること三年。承元三年源空御自作の像を栗原に安置 難に善後策、その後承元二年鎌倉、 教して居たものゝ如く、ついで四国から京都と承元 状を平泉で受く、とあるから、この頃未だ平泉中心 承元元年 (一二〇七年) 十月源空、 栗原、平泉、 勢観、 さらに北上し 聖光等 再教化 に布 0 0 法 書 L

建歴元年(一二一一 年 五十七歳土崎に観音堂を建つ。

いる。

泉中尊寺に至っても行く方知れず、詮なく鎌倉に帰って

原に至るも、すでに出旅の後である。さらに北上して平

て土崎に至る。

り依って其の方に行くべからず」と。上人は「法のため を開祖とした修験宗の団結強く、土民と和人との崇拝 せんときにその人のいうには「津軽一円はむかし役小角 津軽泉ノ舘主か)と会して奥州 同じ年二月十六日、羽州土崎観音にて藤原左 津軽 (東日流)に 衛 門尉 越境 あ

> た便りがあり、 勢観房より宗祖の遺爪を送ったともあり、

からその役をかって出て報を金光上人にもたらすべく栗 また証空上人よりの便りもあった。 建歴二年正月二十五日宗祖入滅の時には、

阿波之介自

浦、 土崎、 十五日土崎を発し四月二十五日津軽に入っておられる。 建保元年(一二一三年)五十九歳津軽に入る。三月二 正中山、行丘、と路順をとられた。 五城目、 合川、 鷹巣、 田 代 失 路中人喰熊 楯峠、 鞍舘、 襲

われ無事津軽に越境したるもまた一

難、

先住民族荒

仏。 幸に津軽検非違使庁に難を免れたがまた難題が起こった。 毒矢に追はれるに及んで命からがら山中を合浦 長更光丸に会って浄土の法門を説くがまさに馬の耳に念 族があった。彼等は尊長更光丸を総長として西に津刈丸、 じているからこれを汚したものとしてその怒りに触れ 種族であり、 南に更光丸、 川の流れに洗顔するを見付られ、元来川を神霊と信 北に相内丸、 荒吐神を崇拝する故に荒吐族という。総酋 東に石化丸、四天王の如く荒 出

教は止めて帰って来いとの自からの老齢をうったえられ

と全く同じものが記されてい

る。

また宗祖より奥州の布

文通もあり、

浄土宗の安心についても現存の一枚起請文

その間宗祖及び源智上人よりの

奥州皆浄土の旅である。

ある」と。往生寺に戻り旅費を得て北方の旅に出られた。 は仏法の信心あるところなれば、我が念仏布教も無難で なればこそ吹く風雨雪は覚悟の前である。末法のところ

判官本田三郎義光に会って浄土の布教の本旨を述べたが、 巡脚赦免状がないのを吟味して五月十六日まで留置され

正中山に於ては阿弥陀如来像一軀を拾い修験道場応身 赦免状は熊と格闘中に失ったものと思はれる。

院にて、 法輪結果応身院の一坊を金光上人にゆだねたと

てい であった。この頃甲野七衛門(後出家して尋西)に会っ 記して、奥州皆浄土の布教であり、行くところ荒吐族の き争ったこともあった。また投獄される等難儀は続くの 迫害もまだ強いものであった。一尺太さの立木を引き抜 後行立一帯を布教東丘にて、六字の名号を行脚の杖に る

また北北 は続けられた。 健保三年馬捨盛にて吐 地頭甲野七衛門はその後金光上人の援護者となった。 畠朝臣親国より援護をうけられたが、 血 病のため 病 床に 臥 苦難の布教

阿波之介は帰路中尊寺にて入滅)。 健保四年阿波之介馬捨盛に訪ねられ宗祖の入寂を報

にて入寂。墓碑の建立は甲野七衛門 建保五年(一二一七年)六十三歳三月二十五日馬捨盛 (尋西)によるもの

なのか。

前に絶筆となっており、 独明抄』は一生涯通してのものであり、 また六尺三寸体長剛力も無双であった。 多く今は現存するものも少いが学識豊かな方と思はれる。 上人の布教は生涯かけて奥州皆浄土であり、 開山および縁故の寺院も数多く 建保五年入寂寸 著書『末代念仏 著書は数

越の良山上人「いわき」夏井如来寺開山され全土にゆき 遺跡も現存していると聞いている。 奥州における浄土教は、 金光上人なき後百二十年、

名

注

わたることになる。

後十五年、金光上人七十三歳になる。 嘉禄三年は、 後堀河天皇の御宇紀元一二二七年、 法然上人滅

福島教区・安養院

家庭における宗教教育について

研究所員

(関東支部 稲

村

でいる宗教及び宗教教育の立場からの報告が少ないのは 博 道

残念なことである。

との関係、特に宗教教育の周辺からアプローチしてみた 以下、それらの問題を考える前段階として教育と宗教 はじめに

をも含めて相当数の事件・問題が起きており、それによ が多い。「いじめ」「登校拒否」「校内暴力」「家庭内暴力」 り深く悩み苦しんでいる人々も多数に及ぶものと思われ コミ等を通じて次々に流されてくる。報道されないもの 「自殺」「殺人」等々誠に憂慮に耐えないニュースがマス 教育に関する様々な問題について耳にする機会

これらの問題等について分析検討する作業は、主に心

どまり、「生命の尊重」や「倫理・道徳」を領域に含ん 環境及び家庭環境における原因や要因が報告されるにと 理学や教育学の分野においてなされており、学校や社会 る。

教育における宗教について

盤より発生し、宗教的色彩が濃いという点をまず考えて 現在教育思想の潮流は主にヨ 1 P ッ 13 のキリスト

おかねばならないであろう。 は、一八二六年に出版した『人の教育』の中で教育の目 現在日本の幼児教育の礎となったフレ

ーベルに

おいて

的を次のように述べている。

— 46 **—**

しめ之によって純潔、神聖なる生活に達せしめねばなえば、人をして自分と、人間と、神と、自然とを知らぎ、神と一致さす様に彼を導かねばならぬ。委しくい教育は人をして善く己を知らしめ、且つ自然と和ら

的であると力説している。と述べ、「神との一致」へと導くことが教育の重要な目

らぬ。

は 本の教育に多大な影響を及ぼしたペスタロッ 演」において当時の学校教育を批判して次のように述べ として捉えている。ペスタロ 念的教育の場であるとし、 のである。その説は、 また明治・大正 キリスト教を主体とした教育論 ・昭和の戦前戦後の各時代に 宗教に支えられた家庭が唯 学校教育は二次的な教育 ッチは「レンツブルクの講 を展開 L チ 実践 k おける日 一の理 お この場 した いり

である。

得なかった。けだし、それは、学校陶冶が全人類の純個人の発達ということが、その目的に誤り入らざるを発達ということは決してその目的とならず、必然的にっぱら浮薄な世俗的意味に局限されたので、全人類の現代の学校陶冶が道徳的な内面的高さを持たず、も

は一般に欠如し、両者の力は発達しなかった。とを発見しなかったからであろう。真理と愛との両者粋に普遍的な発達において、統一的連関と構成的要素

テ あり、 とあり、 いるシュ 張し、愛に基づく家庭が教育の主たる場であり、 憂い、真理と愛の発達による全人格的教育の重要性を主 学校教育と同様に、 育を基本とした生活教育の重要性を説いて ッ 他にも客観的 ソーリや、 真に人間らしさを求める教育ではな 3 タイナーなどの教育思想も宗教的色彩が濃 ーロッパ封建当時の学校教育が今日の日 生活教育や障害児教育で最近注目されて な観察を通じて科学的方法を用い 表面的な技術主体 0 個 人出世 かったことを 宗教教 た 教育で 本の 七

技術及び教材が宗教的基盤から除外されて導入展 ととして、教育と宗教については次のことが言えよう。 られたケースが多く、その辺については後節で触れるこ しているにも関わらず、 教育に 前述のように、 お いては、 教育思想の根底にはキリ 人文科学知識の理 日本においては表面 解や習得による幸 ス 的 1 な理 教 開 から が計 存 在

福な文化的生活を送ることや、

人間性の完成を計るため

あり、緊密な結びつきにより一層、その機能が果せるのも共通していることを考えれば、両者が共に包含関係にの指導や援助することがその目的であり、宗教の目的と

二、日本における宗教教育の位置

ではないかと考えられる。

うな位置にあるのだろうか。 現在の日本における教育体系の中で宗教教育はどのよ

て宗教教育は、その一部分が「道徳」や「倫理的分野」とも、社の五科目が中心で、それ以外の科目や人格形成な理・社の五科目が中心で、それ以外の科目や人格形成な理・社の五科目が中心で、それ以外の科目や人格形成な理・社の五科目が中心で、それ以外の科目や人格形成ないある。

「日本史」に形骸化して取り入れられているにすぎない。「日本史」に形骸化して取り入れられているにすぎない。

国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教

永久に戦争を放棄し、国民の安全と生活をあげて世とある。また「宗教的情操教育に関する決議」を見ると、のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

な自覚と宗教的情操の陶冶が必要であるとしている。とし、決議においては平和な文化国家を築く上で宗教的び活動を禁止してはいるが、教育上尊重する必要があるとある。教育基本法では公立学校での特定宗教の教育及

しかしながら実際はどうであろうか。

宗教教団関係

解が困難なため実際には「腫れものにさわらない」よう宗教のための宗教教育」が禁止されており、その辺の理宗教のための宗教教育」が禁止されており、その辺の理おり、学校の教育活動の中に宗教的要素が盛り込まれて私立学校においては、その建学の精神が宗教に基づいて

右決議する。

当然、宗教心の涵養どころか、宗教に無知な状態が作り史上の遺産として取り扱われているのが実情であろう。な態度で宗教に対処しており、教科外の項目か単なる歴

な解釈の下で、 出されている状況である。 たのではないかと考えられる。 換えれば、 せず、その中で育った子供達や大人達の宗教離れ、 じても信じなくても自由である」という無神論的解釈が、 ることは自由である」という意味ではなく、 般的に行なわれた所に問題が考えられよう。 このような背景には、 の解釈が、本来の「どの宗教を信じても良い。 側面的に歴史上の文化遺産として扱う方法し 宗教に関する無知な状態が作り出されていっ 教師においては宗教を正面から捉えない 日本国憲法における「信教の自 「宗教は信 そのよう か認識 信じ

入されるような体制がとられることを強く希望する。く宗教を捉えることにより、徳育の分野として自然に導教育は自ら限界があるが、特定の宗教にこだわらず、広太のように、公教育における宗教教育、及び宗教情操

三、社会教育における宗教の位置

性が広く認識されている。社会教育における宗教の位置 はどうであろうか。 会教育の場が存在していたし、昨今のカル 社会教育と宗教との関係」について見ると、 形式の社会教育も広く行な であるに鑑み、 境を整えることが望ましい。 自覚を深め、 徴弱であり、また宗教団体の社会的教化活動も不十分 日本では古来より、 3 従来我が国の社会教育においては宗教的 且つその社会的活動を容易ならしめる環 前者の刷新を望むと共に、 教育刷新委員会により建 講や結社などのような地域 われ、「生涯教 (以下 略 チ 後者が反省 育 + 議 I され 設要素が 的 0 セ な社 重 ン タ 要

関においては公立学校と同様に扱われており、学術的、集会等に使用」することを禁じており、事実上、公的機については「特定の宗教のための儀式、行事、または、の文の後に補足事項が続き、公的機関における宗教教育の文の後に補足事項が続き、公的機関における宗教教育とあり、大いに社会教育における宗教的要素の必要と、とあり、大いに社会教育における宗教的要素の必要と、

芸術的部門での宗教の側面が導入されている程度である。

文化教室・老人会等々があり、 教育として宗教 会教育への参加の余地は十分に考えられる。すでに社会 的機関が主 ことにより家庭での宗教情操教育が展開されることが理 び付けることが出来、 じて宗教情操教育を行ない、 日曜学校・ボーイスカウト・塾・青年会・婦人会・講 ープやクラブ活動等も見受けられる。 して展開されているが、)教育を実践している例は多く、子供会 ひいては構成員が家庭に持 教理や教学等の布教 他にも趣味や これらの 宗教団体などの社 向好 組 ち込む いへの結 織 0 を

通 ル

動の中心として、 宗教教育の要素は比較的薄く、 で明らかでは の青年部などで活動が盛んである。 これらの具体的な活動状況については調べてい ないが、 序々に宗教感化していく方法が多いよ キリスト教のYMCAや新 趣味や興味ある対象を活 特色としては直接、 興宗教 ない 0

想である。

参加と、 社会教育としての宗教教育は、 参加 織 の意義を明確にし、 化を計り運営を行ない、より多くの 宗教教育や宗教情操教 宗教団体や施設が主体

> 育、 及び宗教活動を実践していくことが必要であろう。

本での社会教育の機関や施設、

機会等に関しては公

四 家庭 教育 にお ける宗教教 育

議と同じく「家庭教育と宗教との関係」の建議を見ると、 痛感する現在、 家庭における宗教教育、 宗教の位置はどうであろうか。 及び宗教情操 育 0 前節 必 要性 0 建

であろう。従って家庭における宗教的雰囲気は、 校および社会に於ける、その欠陥を補うことが出来る るから、家庭における宗教的感化さえ徹底すれば、 教育上、特に重要視されねばならない。 1 家庭は宗教的情操を涵養する基本的な場所であ

50 目ざし、 とあり、「家庭は宗教的情操を涵養する基本 を通じて序々に宗教理解を深め、 由」に基づき、宗教教育というよりむしろ宗教情操教 であると定義されており、 日 × の精神生活を高めていく努力が必要であろ 家庭 K 家族全員の人格完成 お い T は 的 な場 信 教 の自

を通じて育くまれる。 家庭教育のあり方として、 時 期に人格形成の礎が様 この時期 特に乳幼児期を重要視した の家庭の影響力は絶大で、 々な経 験や 動、

い

覚 • 係にあることを自覚し、 くまれる。 言語 成員がそれぞれの人権を認め、 思考・自立心等と共に宗教に関する基礎的要素が 基本的生活の方法・ それだけに母親を中心として、 自己完成に努め、 価値 相互に教育 観 ・善悪の判断 より良い 父親や家族構 ・被教育の関 美的 生活 感

を築いていくことが望ましい。

宗教であることを認識している人は少なく、 作り出されており、 校・社会に こそが、現在最も宗教を必要としていると思われる。 る母子・父子家庭の増化・生活の無目的化・家風の退潮 われるが、 教や宗教家が入り込む余地を、 いくことは益 られる。 の傾向として、 経済優先の感覚・家族間の接触時間 家庭教育の現在の状況はどうであろうか。 このような状況で、 お 是非共必要なことと考えられる。 いて宗教に関して無知な状態の人が、 々困難になってきている。 核家族化・家族構成員の減 現在の生活の中で欠けているものが 健全な家庭教育を推進して 見出すことは困 の減 このような状況 1 少等々が 最近の家庭 その中 離婚によ 難かと思 一に宗 あげ 学

識

るが、 晦日、 宗教意識 にすべく、 れる。 事としての初詣で、 神棚や仏壇への礼拝、 て序々に家庭の中に宗教が侵透することにより、 るように展開されることが第 いない傾向があり、表面的なもので終わっていると思わ の自覚が芽生えるような、 先祖崇拝としての、 これらの慣習や行事、 現在ではこれらの意義や目的が明確に理解され 通過儀礼としての節句、 の向上を図り、 宗教団体や宗教家は広報宣伝を行ない、 節分、 毎日曜日の教会で 彼岸や盆の墓参りや法事、 家庭内に宗教的要素が導 祭りお月見、 宗教情操の涵養が自然に行 儀礼等の意義や目的 一段階かと思われる。 七五三、成人式等々があ クリスマ の礼拝、 宗教意 入され ス・大 年中行 を明確 日 広く そし ロ々の

お わ b であろう。

格形成が促され、

調和のとれた家族及び社会が成立する

教認識の下で生活の中に宗教が確立し、 なわれてはじめて宗教心が定着し、

よって個

その

中

から正

L

い宗

以上、 宗教と教育との関係について考察したが、生命

れられる宗教行事、

年中行事、

通過儀礼を見直してみた

その一つの方法として、

家庭生活の中で容易に取

り入

題としていかにその交わりの部分を拡大していくかにあ は、より広い「交わり」の部分が理想であり、今後の課 が生命を導くという作業を共有する教育と宗教において ろう。長田新博士が、その著『宗教と教育』の中で、

という一つの方法があるだけである。 方法がない。もしありとすれば、それはただ目覚ます ない。したがって聖なるものは普通の意味では教える 聖なるものは、それ自身直接自己を表示することが

動を宗教的自覚に基づき、正しく行なうことが先決であ ろう。古来より「子は親の背を見て育つ」と言われるが、 教教育の実践にあたっては、宗教者自らがその生活や行 の実践を継続することにより、いつとはなしに幼児や児 と述べているように、宗教教育の本質は「薫習」又は 「薫化」にあり、親や教育者、宗教者が自らの正しい行 生徒及び周囲の者を涵育薫陶することであろう。宗

教育六法

日本人の宗教意識 現代青少年の宗教意識 増谷文雄編 NHK放送世論 日本宗教学会 調査所編

道徳教育における宗教的情操の指導

内山憲尚著

深川恒喜・千葉

博編著

仏教保育二十章

宗教と教育

長田

、群馬教区・長念寺)

参考文献

実に深い内容を持つ言葉であろう。

「ペスタロッチーの

「子どもの発見」 道徳・宗教教育の研究」 M・モンテッソーリ著、 坂東藤太郎著 鼓 常良訳

歌 か 5 0) 布 教

おられることと思います。六月増上寺様へ布教研究所集 お彼岸の準備にも取り掛かろうとしておられる上人方も かれましても、 す。今この会場に御聴聞頂いております各諸大徳方にお 六十一年八月のお盆月も終り、 (-)お施餓 鬼・棚経等々を勤修せられ、 ほっと一息という処で 早や が出来ぬものかと思って、和歌による布教、

研究所員 ないものか、また和歌から何とかして聴者に念仏の弘通 ます。和歌から何とかして聴者に判って頂くことが出 和歌が従であるか和歌が主になるかの違いだけだと思い が、どちらでも結構と思います。 テーマにする方がピシッと決っている様に感じられます 歌からの布教」と題するよりも、 (東海支部 宮 崎 唯 "和歌による布教"と 浅 布教する上に於て 所謂 良 和歌

からの布教」と題しました。

中研究会に行き、その席で期限六月末日迄に会場を仏教

程おてつぎ奉仕団の御奉仕に呼ばれて行っていた。 会館大ホールでの一席の説教には、 四 ・五年ほど前には月に二度三度は必ずといってよい 和歌を多くとも三つ

らの布教」ということで早速連絡致しました。尤も「和

とでも結構布教になるのではと思い、

テーマを「和歌か

にしようかと迷いつつも思案の揚句、そうだ次の様なこ ーマを報告する様にとの達示を受けて、そのテーマを何 大学で持たれる昭和六十一年度浄土宗教学布教大会のテ

その場その時により種々様々な考え方もあるけれど、語 記して自分のものにしておき、 思いますが、一言付け加えました。 は至極当然なことである。 め決めておきその和歌に近づく様に話を進めていくこと いる。趣味のある方は幾つでも和歌を諳じているものと じている和歌も種々あるが、今では一つか二つに押えて るのは芳くないとは以前布教師養成講座にて教わった。 は必ず朗詠してい た。 席の説教に三首以上和 讃題に合う様な和歌を予 和歌は数種類必ず暗 歌を混

睡眠蓋・掉挙悪作蓋・疑蓋の五つからなると記されてい 先ず五種とは何か、 りこんだ様な無知蒙昧、 く、五蓋とは心を覆う五種 ろうとされている五蓋というものがある。 生きとし生ける私達凡夫には、誰もが持 判り易くいうと、 漢訳によると、 つまりそれは①貪り、 即ち貪 五蓋には貪欲蓋 ④躁うつの状態、 の煩悩・五つの障害である。 (むさぼり)・瞋(いかり) ・瞋恚蓋 ⑤疑い 2怒り、 読んで字の如 っているであ 0 ③ 眠 五.

睡眠(心くらく身を重からしめる)・掉侮(心をざわざ

ざいます。

私は何処へ参ります時にも自動車で伺います。

私伊賀の国

様なものである。この三つを火にたとえて三火ともいう。 三毒といって、五蓋を代表する吾々人間を苦しめる火の でも、特に『仏説無量寿経』には染恚痴といって、 って善を生じる事の出来ないものである。この五 からなり、心を覆っていて善をなそうとしても邪魔に わさせる掉と心を悩ませる侮)・ (貪欲) と怒り(瞋恚)と愚さ(愚痴)の 三つの煩悩を 疑 へため らう の五 蓋 貪り の中

(04)

毒も南無阿弥陀仏とな 5 いに変じて三徳とな S れ

りたく、 ると仮定して、話を進めることに致します。 は思います。この会場の設定は各諸大徳方が檀信徒であ ずるものとする。 ても布教実演の様な感すら致しますけれど御聴聞 今申し上げた和歌に因んだ話を進めていき、 お願 い申し上げます。 最後に詠じる方がより効果があると私 (『釈教歌詠全集』第六巻中より抜粋) 何処か 最後に詠

瞋る気持、 多分他家さんが自分の家に無い物を得られたとした処が、 方は沢山おられると思う。その様な何の苦労もない人は 此の世の人生バラ色ですわ」という人ですね。この様 も一人前に自立して孫の顔も見ているし、年老いても、 ず誰もが一応にちょっぴりでも瞋りを憶えるものと思い た時、 と願う貪欲な気持、 という人もあれば、「いや何んとしてでも手に入れたい」 しは何もいらん。 皆様方の中には次の様な方もおられると思います。「わ ます。車にだけ限ったことではございません。ところで か、さもなくば時間に追われて居らない人でしょう。先 持は湧いてこぬわ」という方がおられたらその人は仏様 を憶えます。 ない空いた所を走って来て割込もうとする車にも腹立ち う様に自坊を出発しますが、

途中車の渋滞にでも出 教の時間は○○時からと聞き、その時間には無論間 他家は他家で我家は我家だ他家のまねは出来ませんわし 私は自分なりに瞋る気持を感じます。また車線で その瞋る気持を抑えることが出来ず、幾ら宥 皆様なら如何ですか?「いや一向に瞋る気 生活もそれなりに出来ているし、後継 是が求不得苦の苦しみで得られずに K

> 相当にあるものと思う。 慢するということは、その人にとっては精神的な苦痛 どの精神力がなければ、 さ」ときっとそう思われ言われるに違い も出来るよ、我慢さえしたならそんなこと位簡単なも は、「何だこんな簡単なことなら俺でも出来る、 は思います。が然し、誰もが思われるでしようそのこと う、また克服しようと頑張っても、 な方は、自分の性質に気が付いて、自分一人の力で直そ にブッブッノ〜と迷える気持で文句をいう様な方もひ っとしておられるのではないかと思います。多分その められても、 また道理を踏まえて説明説得されても、 可能に近づくことは出来ぬと私 克服するにはよっぽ ない。 そこで我 私にで

ところが次の様な気持が起ったことがありました。

お説

鼻から、 例え様の無い人でさえ南無阿弥陀仏/~と口から声に出 とえ学徳文武を兼備された方で有りましようとも、 してお念仏を称へる其の人には、身体の到る所、目 万宝が蔵に満つる人で有りましようとも、又そうでな いように浄土宗をお開きなさった法然上人のみ教は、た ところが有難いことですね。 П から、 耳からも、 穴から等々何処からともな 何の苦痛も感じなくて良 から、

く弥陀のお慈悲が浸透し、知らずくへの中に念仏を称へ

ts

出し 陀仏/~と称えて頂く時間が無ければ歩きながらでも、 疑を持って頂きながらも続けてみて下さい。その人なり 々と消えていく。それにつれて三徳と云う徳が自然と備ません。念仏を多少共続けることによってその三毒が段 宗のお念仏の有難い所以は。 テレビを見ながら、 の人柄がきっと変りますよ。 までも良い方向に変るものですよと仰っています。まあ って来ます。三徳といいますのは、 念仏申したから三毒が明日無くなるというものではあり れて自然に消えて無くなっていく様になりますよ。今日 誰もが持っているとされている三毒も、雪が湯水に溶さ たその代りに楽をお与え下さいます。ここですね、浄土 を阿弥陀様がお受け下さり悩み苦しみを受けとって頂 言います。口称念仏することによって自分の悩み苦しみ から何時迄と時間 台所仕事をしている時にでも、 て称えて下さい。 南無阿弥陀仏のお念仏を申す時は、 も決めず、 お茶吞みながらでも、 だから浄土宗の念仏を口称念仏と 口称念仏することによって 幾時でも何処ででも結構 阿弥陀様の御前で南無阿弥 男女の性別を問 仏の徳を三方面 必ず口 女性の方なら から声に わず何時 から

> 恩は忘れておらぬが相手方からその人を、蔑にする人も 判る様にならせて頂ける私達貪欲な人柄が消えて恩徳と 仏の願いの力を与えられ、 受けながら其の恩を感じない人(とは云うものの受けた ております。 み悩み煩い厭う精神作用、 いう徳に変りますよ。又怒ることにより自分自身が苦し って、一転して他に恩恵を施し、世の人を救をうとする いるけれど)然しその様な人でさえ念仏を申すことによ 人の持っている物迄欲しいと思っていた気持、又恩恵 示したもので、 ちなみにあれも欲しい、 (1) 恩徳、 (2)断 所謂煩悩は念仏を申す者誰 又恩を施して呉る人の気持が 徳 (3)智徳の三つ 是もほしい、果は 要するに からな

るその人には人徳が備り、

そのお念仏を称える人の

人柄

徳を得ることが出来ますよ。是で判って頂けたと思いまあを得ることが出来ますよ。要するに、愚痴が消去って智徳というが儘にそのものその人を見ることが出来る様になれる人が虚にそのものその人を見ることが出来る様になれる人が虚にそのものその人を見ることが出来る様になれる人が虚にそのものその人を見ることが出来る様になれる人が虚にそのものその人を見ることが出来る様になれる人がはなれますよ。要するに順に限らず煩悩を除き去ることが出来ますよ。要するに順に限らず煩悩を除き去ることが出来ますよ。要するに順に限らず煩悩を除き去ることが出来ますよ。要するに順

く思います。

(そこで和歌を詠じる)

三毒も南無阿弥陀仏となふれば

御聴聞頂きお感じ頂けたと思いますが、先の方で述べ

(伊賀教区・専念寺)

り入れる方が、効果的であろうかと私は思います。ました様に和歌を取り入れる場合、この様に演繹的に取

地獄 の白蓮華 極楽の白蓮華

研究所員 (東海支部 浅 野 義 光

みたいと思う。

蓮華は色々な仏典に出てくるが、今『無量寿経』 によ

優盋羅蓮 拘物頭華

ると、

· 睡蓮 赤

白

.....赤 青

黄

盋曇摩華 蓮華 赤

白

の説があるが、 には明確な色分けはなく、又、 これらが入りみだれて水上を覆うとある。『無量 分陀利華 密教の善無畏三 一蔵の 華の色彩についても種 『大日経

寿経

2 優盋羅華は赤・白・(桃)、 拘物頭華は赤・青・黄

(-)

方の蓮 (睡蓮を含む)は、 があると思うと自然と念仏が出てくるものである。 は本当に神秘的であり、その彼方に指方立相の西方浄土

神社・仏閣等の池によく

つは夕陽であり、もら一つは蓮の花である。

太陽が真赤になって西の海に沈んでいく瞬間というの

私がこの世で神秘的に思うものが二つばかりある。

みかける仏教を象徴する花である。

善導大師や法然上人がこれをどのように考えておられた 経典等の記述をみながら、その本質を理解し、さらには ここでは仏花の代表ともされる蓮の花の魅力について、

0

か、

また、『往生要集』に説く蓮の花との比較もして

疏 による

— 58

は中国 のようである。 ・日本の蓮華とは形が異なり楕円形の睡蓮のこと 分陀利華は白である。ただしこれら

は睡蓮である)という伝説もある。 そして泉の守り神になった末娘は睡蓮になった(ここで いて相談し、それぞれ外海、 水の女神が三人の娘たちに、 始である韋紐天のへその中より生じた蓮華中の梵天をも 代インドにおいて『マハーバーラタ』では、天地開闢 って万物創造の主としており、また、ギリシャ神話では これらの花は大変珍重され、 内海、 彼女たちの身のふり方につ 例えばお釈迦様以前 泉の守り神にした。 の古

楽荘厳に蓮華が用いられ、『無量寿経』には に出てくるのであり、 る。特に仏教では色々な喩え話としてしばしば仏典の中 の東西を問わず神秘的な存在であったことがうかがわれ これらのことからも蓮華・睡蓮というのは以前から洋 周知の通りとりわけ浄土教では極

衆宝 葉あり。 の蓮華は世界に周満せり。 その華の光明に無量種の色あり、 白 一色には白光あり、 一一の宝華に百千の 玄、黄、朱の光色も 青色には

またしかなり

とあり、 色彩が多種にわたっていることが説かれており、

また 『阿弥陀経』に

池 の中に蓮華あり、 大きさ車輪の如し。

赤色には赤光あり、 青色には青光あり。 白色には白光ありて微妙香潔な 黄色には黄光あり。

n

摩経』に、 れに汚されずに清浄無垢な華を咲かせるのであり、『維 とある白蓮華である。 この華は泥の中に生じてしかもそ

と説かれている。この中で今注目するのは「白色白光」

ず。 位に入る者は、終に後に復た仏法を生ずること能わ 乃ち此華を生ずるが如く、是の如く無為法を見て正 譬えば高原の陸地には蓮華を生ぜず、 煩悩の泥中に乃ち衆生の仏法を起すこと有るの 卑湿の淤泥に

提に喩えているのであり、 べきところに蓮が用い るということを示す、いわば大乗仏教の究極ともいえる とあるように、ここでは「煩悩」を泥に、「蓮華」 られて さらには「生死即涅槃」 であ

そしてさらに『無量寿経』には、

若し念仏する者は当に知るべし、此の人はこれ人中

の分陀利華なり。

導大師はこれを釈して『観経疏』散善義に、として、ここでは念仏者に喩えられているのである。善

分陀利と言うは人中の好蓮と名づけ、亦希有の華と名づけ、亦人中の上上人、人中の希有人、人中の妙好華と名づく。この華は相伝えて蔡華と名づく是れなり。と名づく。この華は相伝えて蔡華と名づけ、亦ん中の妙好華妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の妙好華

『選択集』において善導大師の『観経疏』を引用し、妙て称讃していられる。これを 受けて さらに法然上人はとあるように、念仏者を白蓮華である分陀利華にたとえ

好人等について釈された後、

ってその喩へとす。譬への意まさに知るべし。念仏はこれ即ち勝行なり。故に芬陀利を引いて、も

華が多く咲きここに会するものが名利に染まらないこと慧遠による念仏結社「白蓮社」の命名も、この寺に白蓮白蓮華に喩えられているのである。また、中国の盧山寺として、お念仏は全ての行の中で勝行であるから妙なる

を蓮華に喩えているようである。

 (\equiv)

次のように誘っている。 ところで一方、地獄にも白蓮華を見つけることができる。一見以外な気がするが、これは『往生要集』の中でがの焦熱地獄の中の分茶離迦という地獄である。ここは六の焦熱地獄の中の分茶離迦という地獄である。ここは六の焦熱地獄の中の分茶離迦という地獄である。ここはたの焦熱地獄の中の分茶離迦という地獄である。ここは、のように誘っている。

茶離迦の池あり、水ありて飲むべし、林に潤へる影汝、疾く速に来たれ、汝、疾く速に来れ、ここに分

あり。

しまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進んる。そこには飲む水はたくさんあるし、林には凉しい影る。そこには飲む水はたくさんあるし、林には凉しい影が大きって行くと、道に穴があり、中で火がさかんに懸えており、その穴の中に落ちて身体中が焼けただれて、大きっ、その穴の中に落ちて身体中が焼けただれているのが入事があり、中で火がさかんにしまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進んしまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進んしまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進んしまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進んしまう。あつくて喉の渇きが激しいので何とか前に進ん

(DY)

以上、

初め

に極楽の蓮華について、そして善導大師

とは似ているが全て違うのである。とは似ているが全て違うのである。とは似ているが全て「願心荘厳」であって、この世の実在思議な魅力のある蓮である。もちろん『阿弥陀経』に出する蓮華とは同じものではなく、それよりはるかに不可実鳥に非ず」といわれている様に、蓮華についても実在讃』の中で、これは鳥についてであるが、「極楽の鳥は讃』の中で、これは鳥についてであるが、「極楽の鳥はと説いていられる。従って例えば善導大師が『往生礼と説いているが全て違うのである。

荘厳」によるものではない。り、実在の華もしくはそれに近いものでしかなく「願心り、実在の華もしくはそれに近いものでしかなく「願心一方、『往生要集』に 説く 白蓮華は、場所が地獄であ

ところで、イタリアなどは女性に対して「あなたは僕

いない光栄であり、前述の法然上人のいわれる如く「譬なる本当の想いだとしたならば、自分が太陽に喩えられたその女性は身にあまる光栄であり、自然とその男性にたるの女性は身にあまる光栄であり、自然とその男性に好意を示していくはずである。同様に念仏者にとって分好意を示していくはずである。同様に念仏者にとって分好意を示していくはずである。同様に念仏者にとって分けるがあるが、単に女性をの心の太陽だ」という口説き文句があるが、単に女性を

念仏者というものはそれだけ尊い価値があるのであっ

の意まさに知るべし」である。

一十九句の荘厳功徳は願心を以って荘厳せり。

ことになろう。 で意味からもお念仏を申さずにはいられなくなるというで意味からもお念仏を申さずにはいられなくなるのであり、これがある。

(岐阜教区・本誓寺)

念するために

――くりかえしの効用―

研究所員(北陸支部) 山 本 雄 毅

のものが一つの連続している聴覚像とそれに相当するいの概念を持つことが出来ます。そもそも「考える作用そとになります。乙はそれを聞いて、聴覚像を形成し、そとになります。乙はそれを聞いて、聴覚像を形成し、そ 成しそれと同時にそれ(ネコという語)を音声にするこ成しそれと同時にそれ(ネコという語)を音声にするこのものが一つの連続している聴覚像とそれに相当するいのものが一つの連続している聴覚像とそれに相当するいの概念を持つことが出来ます。

は初心者と考えてよいと思います。)る幼児という語は一般に言う意味です。

す・聞くの作用に該当 しま す。(*ここで使用されてい能力を常態で伸ばす間に通例表わす思想伝達作用で、話

言語教育の上で

第一次伝達とは、幼児が組織的教育を受けないで言語

方を伝達する伝路を見ると図1のようになります。

言葉が一つの脳

(甲)から他の脳(乙)へ一つの考え (*印の所は筆者が入れた)

くつ れ 語 思い出せば、 非常に緊密で一つに連続したものであることは心理学 ような説明が成り立つわけです。 か を声に出して言うと想像することになります。 実験で確認されています。 0 かの概念とを連結させる作用である。」 ネコという語 必ず英語のCATか、 が聞こえると想像する、 例えば、 概念と聴覚像 日本語のネ ネコという動 か ある 5 コ 0 Li か 関 义 たと はそ 1 係 何 な から 0

きどうなるかが図2です。 無阿弥陀仏という概念を図1の伝略にあてはめ

0

概念を持つことが出来るわけです。

义 甲 2 0 0 お 可 概 概 念 甲 姿を脳 念 南無阿弥陀仏 (伝達者) 0 南 概念が正 聴覚像 無阿 0 中 阿弥陀仏のお姿 弥 K 像として持 しく伝わるの 陀 発声作用 仏 南無阿弥陀仏と発声 カン ら乙 聴覚作用 って Z 南無阿弥陀仏と聞く は、 0 (被伝達者 概 いい 念 る 乙がすでに 聴覚像 カン 阿弥陀仏のお姿 南 らです。 無阿 概 念 弥 南無阿弥陀仏 弥 陀

> てい ば、 が甲の概念の 音であって何の意味も持たないことになります。 が出来ないのです。 くだけでおわ ないということは、 乙は聴覚作用 知識を持っていれば、 り の段階で、 乙が聴覚像に阿弥陀仏のお姿を持 甲の概念を聴覚像によび起こすこと 乙にとって南無阿弥陀仏は単に 南無阿弥陀仏という音声を 乙は甲とおおよそ同 勿論乙 2

聞

は 識を持っていることです。 者にすすめる場合をみてみます。この場合の最良の条件 次 布教師と聴衆双方ともに阿弥陀仏について正し 布教の実際に おいて、念仏を称えることを もし聴衆にそうした知識 がな い知

いとすれば、法話の中で、

阿弥陀仏について聴衆が

L

元祖 ます。よく見らけることですが、念仏は本当に有難い、 仏申すことを受け入れる基盤が出来たということに あります。このような条件作りをしてはじめて聴衆が念 1, 理 0 羅 |様の教えは実に尊いなどと布教 解をもてるように抽象的なり具象的に教える必要が 列で表現 して、 何が有難い 思いをさせるの 師 自 自身の 感慨を形

5 話 記が終っ な 5 7 てしまう場合があります。 るか ら尊 い 0 カン 0 肝腎 なことが 有難い とか尊 出 15 ままに

乙が甲の

概念について何の知識も持

っていないとすれ

もあれ、こうした場合、聴衆は十分な説示が与えられな や概念によびおこすことが出来ません。従って念仏が口 いために、布教師が伝えようとする概念を正しく聴覚像 う気持は聴衆自身が感じ判断することだと思います。と

から出ないことになります。

(=) は、 次の言語学習の五習性による学習が大切だと言って パーマは前項の第一次伝達を活発自在にするために

すと

います。

1 耳による観察

2 口による再現 (聞いた音をまねて言う。)

口馴らし、一つのことを自然に言えるまで繰返し

練習する。

3

4 意味づけ(ある言葉を聞くとすぐその物を思い、 ある物を見るとすぐその言葉を思う。

5 類

てはそのいずれの段階も欠くことの出来ない役割を果し 法オーラル・メソッド又はオーラル・ワーク(口頭作業 を主にした教え方)の根幹をなすものです。 この五つの習性は、 パーマが提唱し広く普及した教授 学習におい

> として日本でも語学教育の成果を飛躍的にたかめました。 えし」を主とするオーラル・メソッドはアメリカを中心 (くり返し)を主要な作業としています。この「くりか ています。 特に第2と第3の過程では REPETITION

法により顕著な成果を目の当りにしました。

筆者もハワイ大学で日本語教育にたずさわった際この方

右の五つの習性を少し敷衍して念仏におきかえてみま

呼吸法なども併せて聞きとる。 1 南無阿弥陀仏を耳で正しく聞きとる。リズムとか

人に似せて自分の口でまねてみる。声の大小をもよく考 2、南無阿弥陀仏を聞いたら、 出来るだけ発声をした

繰返し称える。念仏を称えることを習慣づける。 3 南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と行住坐臥に繰返し

明瞭に発声する。

易に思いうかべることが出来るようになる。また阿弥陀 仏のお姿を拝すると自然に南無阿弥陀仏と称えられるよ 4 3の習慣づけが出来てくると阿弥陀仏のお姿を容

1から4までの体験を応用して、念仏を称えてい

うになる。

5

ると、次第に阿弥陀仏に対する考えや思慕が深まり一層

念仏にはげむようになる。

ます。 「くりかえすこと」によって高められていくのだと思い 学習だけに限りません。その意味あいは異っても、 ます。その技術の練磨や手順の習得の根幹となる作業は ーツ・文化・芸術・宗教等あらゆる分野にかかわってい 「くりかえす」ことによって良い結果が出るのは語学 スポ

不思議を次のように述べています。 柳宗悦はその著『南無阿弥陀仏』で「くりかえし」の

この繰返しで品物は浄土につれてゆかれる。この働きこ しは才能の差異を消滅させる。下手でも下手でなくなる。 限りない反復があることが分る。有難いことにこの繰返 れてくるのか。仕事を見てゐると、そこには心と手との ・凡夫たる工人達からどうして成仏してゐる品物が生

> 工人の働きにも『我』が残ってはならぬ。この 去らしむるものは、多念であり反復である。」 『我』を

中には、いくつも「くりかえしに」類似する意味を持つ 語句をみつけることが出来ます。 はおそらく使用していないと思います。しかし御法語 法然上人御自身は「くりかえし」や「反復」という語

し」や、「一念なほ生まる、いかにいはんや多念をや」 「一念十念なほむなしからずと信じて、 無間に修すべ

形はまさしく念仏の「くりかえし」を求めたものです。べし」などはその例です。これらの中の無間・多念・一 や、「信を一念にむまるととりて、行をば一形にはげむ しかも二者択一をゆるさず、念仏をくりかえすことを当

もう念仏を命終にいたるまでくりかえしくりかえし相続 ことは誤りだと思います。一念ごとに往生をあておきた を捨てるように思われるかもしれませんが、そう考える 「くりかえし」を強調すると、いかにも多をとって少

似たところがある。称名には『我』が入ってはなるまい。

の繰返しの動作と、念々の称名とは、似ないやうで大に

移ると云ってもよい。自分であって自分でなくなる。こ を離れ自己を越える。或は自己が、働きそのものに乗り そは念々の念仏と同じ不思議を生む。なぜなら之で自己

ているのです。

であり、十念となり、一瞬間・その一点に申す往生心の

多即一で、一念はその瞬間に多を内包し、多は常に一を 定まった念仏を連続して見れば多念であります。一即多

含んでいるのです。順彼仏願とは、念々に一心専念して、 瞬間たりとも至心を捨てないことであります。そうし

た凡夫の真実心のこもった念仏の一念ごとに阿弥陀仏が

必得往生をあておいてくださっているのであります。な

ぜなら順彼仏願故だからです。

参文考献

'THE ORAL METHOD N. Yuki Yamamoto. ELT P. 、英語教授法事典 市河三喜監修。開拓社

151∼158 Volume XXXII Number 2 JANUARY 1978 Ox

、南無阿弥陀仏 柳宗悦。大法輪閣

ford University Press

、浄土三部経概説 坪井俊映。隆文館 一、選択集講述 小沢勇貫 浄土宗務支所

一、法然上人のこゑ 椎尾弁匡。共生会

仏教思想入門

峰島旭雄+芹川博通。東洋文化出版

(富山教区・阿弥陀寺)

浄土宗における因果の問題

布教の立場から-

研究所員 (近畿支部 有 本

亮

啓

はじめに

想の綱格がわかるであろう。 られる。この因果の観念を追求することにより、 因 [果は仏教の中心観念であり、 仏教独自のものと考え 仏教思

因果の問題を学問的に研究するのは、一布教師の領分で 因に六因、縁に四縁、果に五果あるとされている。この 因果は因 (原因)と縁と果 (結果)によって論ぜられ

け取って頂きたい。 かということであるので、あくまで一布教師の戯事と受 今ここで述べたいのは、 布教上、因果をどう説くべき はない。

因果応報

果といわれるものであるが、正しくは善因楽果、 必ず好ましい果報があり、悪の業因には必ず好ましくな る因果応報説であろう。これは業の因果、すなわち我々 い果報があるとする説である。一般に善因善果、 の行為について因果関係を立てるもので、善の業因には 布教上、一番問題となるのは因果思想のうち、 悪因悪 いわゆ 悪因苦

な意味をもつものであるから、道徳的因果律とも呼ばれ 布教の上でも欠くべからざる問題であり、多分に道徳的 この因果応報説は、多くの仏教経典に説かれてお り 果というべきであろう。

さらに四業説というは、

善悪業の報

われる時期

を四

三 因果の矛盾とその解決

ではないかと思われる。 因果関係は不変なものといわれているが、現実には、 因果関係は不変なものといわれているが、現実には、

因を知らんと欲せば、現在の果をみよ、未来の果を知ら 法であり、四業説である。 で必ず苦果となると……、 者の前世に善因があった報いであり、現世の悪因は次世 なる生活が出来るという矛盾 を重ねた者が、世間の非難があるにもかかわらず、 とらえてゆけば、矛盾が解決するというのである。 を現世のみでとらえず、過去現在未来と三世にわたって んと欲せば、 そこでこの因果応報の矛盾に答えるのが、三世因果の 現在の因をみよ」といわれるように、 三世因果の法とは、 善業の者が苦しむのは (悪因楽果)、 それは 「過去の (善因 安楽 因果 悪業 この

果となるのであると……。

善世の悪因によるものにして、

次世には必ず楽

果の矛盾は理論上解決るすることが出来るのである。に分け、まず、善悪の行為と同時、または同一生間に、その果を受ける場合の業を「順我次受業」と称し、時期を決定しないで受果業」と名づけ、次々生あるいはそれ以後に受果するごと業」とも、次々生あるいはそれ以後に受果するごと、その果を受ける場合の業を「順現法受業」とし、その生

四 第二の問題点とその解決

道徳的意義あることと認められるが、一方、 が現在の業果をもたらすという点では、ややもすると宿 在の業因が未来の業果をもたらすという点では、未来に 現代人は、机上の論理だけでは納得することは出来ない できるが、これはあくまで、 命論的となり、 希望をもたせ人々に精進努力をうながす精進論となり、 のではないか。また三世因果、 り、このことを実証するのは、 三世因果の法や四業説により、因果の矛盾は一応解決 前世の悪因などというと、薄幸なる人々 理論上解決されたものであ 不可能である。 四業という考え方は、 過去の業因 おそらく

に対して、 ない。ここに因果の第二の問題点が生じてくるのである。 あきらめを押しつけ、差別問題にもなりかね

ぬと、提言したいのである。 そこで因果応報の真の解決は念仏信仰によらねばなら かの無量寿経に説かれ

の第十八願に、「もし我れ仏を得たらんに十方の衆生、 法蔵菩薩が衆生救済のため、四十八の誓願を建てたなか

なすべき善業を法蔵菩薩は、過去世において、衆生に代 に、もし生ぜずんば正覚を取らじ……」とあり、衆生の

至心に信楽して我が国に生ぜんと欲して、及至十念せん

徳を南無阿弥陀仏の名号の中に内包下された。されば衆 けて下された(代受苦)。そしてこの代修、代受苦の功 の悪業に因って、当然受くべき苦果を、衆生に代って受 って修して下された(代修)。また衆生がつくりし諸

悪因+念仏=楽果(往生

は楽果(往生)と成るのである。

生弥念すれば、

代修、代受苦の功徳により、一切の業因

である。以上のことから、布教上における因果問題の解 念仏縁により救済されたことにより、実証されているの 悲劇をもたらした、五逆罪を犯した阿闍世王が、やがて さらに、このことを観無量経において、 かの王舎城の

> いのである。 決は、念仏信仰を説くことによってなされると断言した

Ŧī.

浄土宗における因果の説き方

浄土宗において布教上、具体的に因果問題を説く場合、

元祖の伝記を中心とするのが最良であろう。

元祖法然上人九歳のとき、父君時国公殺害されたのは、

母死

果)例は数知れない。が法然上人の場合、苦行、苦学は 悪因により、世を嘆き、世をはかなみて身を滅ぼした(苦 続けども、四十三歳念仏の縁により、楽果と成りえたの

するもしかり。一般に両親の不幸なる死という一身上の 法然上人一身上の悪因といえる。また十五歳の時、

生救済の僧として一生涯、念仏生活の中、すべての苦難 を念仏縁により、楽果と受けとられ、八十歳極楽往生

である。すなわち、浄土宗の開祖、三昧発得の聖者、

楽果)を遂げられたのである。

業を重ねた罪悪生死の凡夫が、念仏により救済され、楽 縁により救われたこと、遊女が、盗賊が……それこそ悪 より往生を遂げたこと、東大寺焼打ちの平重衝が、念仏 また、元祖をめぐる人々をみても、敵定明が念仏縁に

果をえたこと、枚挙に遑がない。

生涯についても因果の問題を説くことが出来るであろうさらに、昭和六十二年三上人遠忌にあたり、三上人の

急死せし一身上の悪因が、念仏の縁をひき出し、やがて鎮西上人、三十二歳の時異母弟三明房が眼前において、生涯についても因果の問題を説くことが出来るであろう。

基盤を揺るぎなきものとされたこと。 法然上人との出会いの後、浄土宗二祖となられ、浄土の

井寺より石見多陀寺へ帰国、不断念仏の縁をえて(林隆元へ入り、念仏縁により、知恩院・知恩寺・黒谷光明寺第元へ入り、念仏縁により、知恩院・知恩寺・黒谷光明寺第二世として、元祖の意志をつぎ元祖の御恩に報いたこと。

けとれる心境に入れるのである。そして来世は必ず、極充実と喜びの生活をえられ、いかなる苦難をも楽果と受る悪因があろうとも、念仏縁によって、現世においては以上の如く、元祖をはじめ、念仏者はすべて、いかな

宗三祖と相成り、念仏興隆に貢献されたこと。碩述・浄土への道)やがて二祖との出会いがあり、

楽往生を遂ぐるのである。

べきが、浄土宗布教師の使命であろう。 る道はないのであると、因果の問題を鑑みつつ、布教するだはないのであると、因果の問題を鑑みつつ、布教するに、

六 おわりに

ぬということである。れば、一切の罪悪は赦されるという甘えを持ってはなられば、一切の罪悪は赦されるという甘えを持ってはなら最後に述べておきたいことは、念仏者は念仏さえ称え

然戒めねばならぬし、法律的悪に対しては、法的制裁が念仏教済は、宗教的罪悪の救済であり、道徳的悪は当

加えられるのは必然である。

は言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。
に言うまでもない。

とてもかくても此の身には、思いわずろう事ぞなき。生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へまいりなん、

大阪教区・大鏡寺

研究所員(近畿支部) 羽田恵三

をのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたとのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたは、およそ不可能なことと思われます。 したときの、何とも表現しがたい気持、感動というものしたときの、何とも表現しがたい気持、感動というものしたときの、何とも表現しがたい気持、感動というものしたときの、何とも表現しがたい気持、感動というものしたときのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたそのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたそのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたそのような門があるとすれば、その入口にたどり着いたそのような門があるとすれば、その入口にたどり着いた

うちにことの重大さを感じ、布教の困難さ、恐しさといどおり、調子の良い時もあったように思いますが、その

という感がいたすのであります。

はじめの頃には、まさに「盲、

ヘビにおじず」の譬え

ますが、そんな経験をさせて頂いて、その理由がわかる

「若い人が寺に来ない」と い うことをよく耳にいたし

ような気がいたします。

若い方々に、どのようにしてお念仏を受け取って頂く

御本尊様の在す本堂にての法話も、もちろん苦労もあれば困難さもありますが、最も苦しみを味あらのは、みれば困難さもありますが、最も苦しみを味あらのは、みたようなときには、もちろん当人の非力さ、話の稚拙さもございますが、最初から会場には拒否反応のようなものが感じられ、十分な実をあげることができず、後味の悪さに二・三日ショック状態が続くというようなことをたびく〜経験いたすのであります。

した。 かということが、 まず私の布教上の第一の課題でありま

ます。 二つずつの宗教をもっているということになるのであり 坊から、百歳を越したお年寄りまで含めまして、 とでありますが、 万人にのぼるということであります。これは不思議なこ によりますと、 文部省が出しております『宗教年鑑』(昭和59年度版) 日本の宗教人口はなんと二億二千七十八 昨日生まれた西も東もわからない 誰もが 赤ん

善悪は別といたしましても、そのいずれかの宗教と、何 ばならないようなものまで多く含まれております。正邪、 だてていてくれるとはどうしても思えない現状でありま ざ若者の前にお念仏の話をいたしますときに、 あるはずがないということがわかるのでありますが、い らかの関わりあいをもっているということであります。 つに沢山の宗教があります。 また日本は、 このことからいたしますと、若者だけが宗教と無縁で 宗教のデパートともいわれるくらい、じ なかには眉にッパしなけれ 耳をそば

> L 青いブレーザーの人が立ち並び、若い人達がわんさと押 すと、近所には自動車があふれ、 る立派な建物が建ちました。 かけるのであります。 今から五年程前、 自坊の近所に創価学会の池田 以来土曜日の夜ともなりま 電車 十の駅 か ら講堂まで、 講 堂な

には、 に及ぶ悩み苦しむ若き信者達が集らのであります。 に、現世の利益を求め奇跡を願って、全国各地より数万 含の星まつり」、あの巨大な火柱 また毎年二月十一日、京都北花山で行なわれます この様な姿も現実として存在しているのでありま に、 もえ盛る紅蓮の炎 一方

呵

ているのも事実であります。 ナーが設けられ、 ています。 現在、 日本は第三期宗教ブームを迎えているとい げんに書店へ出かけてみますと、 様々の宗教書が置かれ飛ぶように売れ 宗教書 われ

われ い宗教が輩出しております。 なます。 一期宗教ブームは、 その頃 に天理教、 幕末より明治維新にかけてとい 黒住教、 金光教などの新

二期は、 第二次世界大戦の前後とされており、 その

す。

す。

がいえるのであります。世の中がひっくり返える程の激動期であったということ世の中がひっくり返える程の激動期であったということでものは、古い時代から新しい時代へ、思想も価値観も、知の中がひっくり返える程の激動期であったということがいえるのであります。

そして第三期には、前二つ程の大きな社会変動はないそして第三期には、前二つ程の大きな社会変動はない心をとらえているのであります。そしてそれらの教団が、なぜか若者達ののであります。そしてそれらの教団が、なぜか若者達ののであります。そして第三期には、前二つ程の大きな社会変動はない心をとらえているのであります。

評論家の指摘するところによりますと、

会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や自ら教線の先頭に立って働いているということである。自ら教線の先頭に立って働いているということである。信者は教祖や会長の存在をとおして、その影響力のながで新しい自分というものを発見していくということである。とは、人間の在り方としての理想であり、その教祖や会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や会長は人間の在り方としての理想であり、その教祖や

覚えるのである。

て信者を引っぱっていかざるを得なくなっている。新宗教においては、体系化された教義や理論をとおしな魅力と言うことができる。それに対し、伝統教団や会長が直接自分達に接し指導してくれることは、大き

といえるだろう。
より強くひかれていくというのは、やむを得ない現象知的な理論体系よりも、生きた現実の指導者の体温に知的な理論体系よりも、生きた現実の指導者の体温に

性や母性の理想を求めている場合もめずらしくないの者に、家庭や社会では触れることができなくなった父者に、家庭や社会では触れることができなくなった父

である。

その新鮮なエネルギーに自らの未来を託す程の共感をがまだ発展途上にあるといえる。若い信者にとっては、織そのものが完成されていないことである。その教団第二には、新・新宗教教団は規模がまだ小さく、組

ず、新・新宗教が、現代の時代的ニーズを、もっとも生まれた宗教であることである。それはとりもなおさ生まれた宗教であることである。それはとりもなおさ

安持っている。
とを示している。現代特有の悩
と説に体現していることを示している。現代特有の悩
と説に体現していることができる性格をもっている。むろ
いートに応えることができる性格をもっている。むろ
なに対して新・新宗教はストレートに現代人の苦悩を
あっしかし、どこにポイントがおかれているかきり、その
はだ対して新・新宗教はストレートに現代人の苦悩を
表に対して新・新宗教はストレートに現代人の苦悩を
表に対して新・新宗教はストレートに現代人の苦悩を
表に対して新・新宗教はストレートに現代人の苦悩を
を持っている。現代特有の悩

教の世界にひかれるのは、決して不思議な現象ではな時代のあり方に敏感な青年達が、より強く新・新宗

室生忠著『若者はなぜ新・新宗教に走るのか

らの諸宗教と、いわゆる伝統教団の教えとを同格

いのである。

無碍弁)、八音(極好・柔軟・和適・尊慧・不女・不誤・ここにいま、釈尊ましまして四弁(義・法・辞・楽説すべき点多々あることを感じるのであります。

ほかに道はないと思うのであります。 ほかに道はないと思うのであります。 「一年を魅了し、悩みより解放されたことでありましょうが、釈尊去りましなはば如何に」、「ここに法然上人ましませば……」と頂き、世ば如何に」、「ここに法然上人ましませば……」と頂き、との精進と、正宣教法のエネルギーを燃し続けるよりくとの精進と、正宣教法のエネルギーを燃し続けるよりならば、深遠・不竭音)の御説法に会うことができますならば、深遠・不竭音)の御説法に会うことができますならば、深遠・不竭音)の御説法に会うことができますならば、深遠・不竭音)の御説法に会うことができますならば、

念仏布教の上におきましても、「捨此往彼蓮華化生」の往生は自明の理でありますが、今日只今に悩み苦しむお者達には、現当両益のなかには、特に現益に力点を置され、自然のうちに阿弥陀仏の諸徳を頂き、不離仏・値され、自然のうちに阿弥陀仏の諸徳を頂き、不離仏・値され、自然のうちに阿弥陀仏の諸徳を頂き、不離仏・値され、い河を、お念仏申しながら阿弥陀仏と共に越えさせて頂き、渡らさせて頂く喜こびを体得し、明るく、正しく、仲良く生きぬかせて頂くことを伝えることこそ、こく、仲良く生きぬかせて頂くことを伝えることこそ、こく、仲良く生きぬかせて頂くことを伝えることこそ、こく、仲良く生きぬかせて頂くことを伝えることこそ、ことの課題解決の道であると信ずるのであります。

(京都教区・大善寺)

布教の原理

研究所員(中四国支部) 山 上 光 俊

ずにはおれない。 数の増減についても統計に表わされていないが、浄土宗 何人いるのかわからないが、 教団の基盤がかなり低下しつつある現状に危機感を覚え ないが、廃寺になっていく寺院もあるに違いない。信徒 の道場として充分機能しない状態にある。統計数字には 正住職寺院で他に兼務せず、 が八〇・九%、 によると、総寺院数七、一一三カ寺の内で、 あろうか。 心も浄土宗信者であると断言できる人が一体何人いるで 今年度の浄土宗寺院統計(昭和六十一年四月一日現在 他宗教団の浄土宗信徒への布教活動 兼務一五・一%、その他二・五%とある。 また檀信徒の信仰内容について、身も 約二〇%の寺院が念仏教化 住職のみで勤めている人が 正住職寺院 も激しく、

> 世、 させることはできない。 惜身命の激しい信仰を持たなければ、 ばならないのではないか。 いくためには、まず布教師自身が信仰の炎を燃え上がら 興宗教に取られ、死体や位牌はお寺へといったことにな ら墓地のあるお寺へ、という人もいる。つまり、 人もいるほどである。 っているのではないだろうか。こういう危機を克服して 至誠心を熾盛心として熱烈な布教をしていかなけれ 生きている間は新興宗教、 何よりもまず布教師自身が不 信者や聴衆を感動 心 死 は新 んだ

熱心であり、

浄土宗の籍に在りながらそちらへ入信する

すぐにでも放免しよう」と言ってくれたが、バンヤンは いたある裁判官が、「もし君が説教さえしなければ、今 の崇高な人格が慕われていた。バンヤンに好意を抱いて

私は今日放免されれば、明日村へ帰って説教します」

と答えたという。

が布教の原理である。これは宗教や時代が異っても不変 自ら信ずる宗教を人に伝えずにはおれないということ (『天路歴程』ジョン・バンヤン著)

である。わが宗祖は

念仏の行を修すべし。この事の外、 くべし。自らの往生の為には諸の俗塵を離れて専ら 浄土宗の学者は先ずこの旨を知るべし。 為には、身・命・財を捨てても偏えに浄土の法を説 全く他の営みな

や弟子達の死罪・配流等という法難に遭われても、念仏 と、布教の心構えを述べておられる。あの延暦寺の弾圧 人七十三歳)、また土佐配流(建永二年上人七十五歳 、一二〇四年 上人七十二歳)、 興福寺の弾圧(元二〇五年上元久元年十月上人七十二歳)、 興福寺の弾圧(元久二年上

停止の勅にもかかわらず、

われたとい死刑に行わるとも、このこといわずばあ

るべからず

の情熱は燃え立つばかりであった。

とおっしゃって、身・命・財を捨てても、という布教へ

どのようなものであったろうか。宗祖が亡くなられた年 (建暦二年)の十二月二十四日、源智上人は阿弥陀仏造 このような死を賭しても布教せんとされた心は、一体

立の願文を書かれた。その中に

先師はただ化物をもって心となし

利生を以って先となせばなり

有縁の人の

確に表われている。その心は、 とあり、宗祖の衆生救済に徹しておられたイメージが明

(『十六門記』)

仏教は、法蔵菩薩の平等の慈悲に催された誓願である。 ていた。全仏教を背景として選択された南無阿弥陀仏の つまり、四十八願は、一言でいえば平等の慈悲の具現で

を救済するから、慈悲の最も徹底した平等化の結晶であ

と詠まれたように、自内証が平等の慈悲心に満ちあふれ ある。四十八願中の第十八願は、最易にして最多の人々 あみだ仏に そむる心のいろにいでば 秋のこずえのたぐいならまし

れば自分の命を捨ててもよいとまで覚悟され、すでにそ 仏と申すその心に、 のすべての願が成就されたという。だから、 るといえる。 しかも、 阿弥陀仏の平等の慈悲が息づき流れ その誓願は法蔵菩薩が成就しなけ 南無阿弥陀

込んでくるのである。

る際の心得として次のように忠告しておられる。 もわかりやすいのは書簡集であるが、その中で、 心で貫かれている。例えば、布教される行状について最 悲心に他ならない。宗祖の布教姿勢は、この平等の慈悲 し、悩める人々を救済せずにはおれないという平等の慈 り生死に悩む人々をひとりでも多く救わずにはおれ ったのである。布教の原理とは、念仏を自ら信じ、 したがって、宗祖は自行の念仏を励まれ自内証が深 布教す 実践 なか

気持を同じくして念仏する人を、例え卑しい身分 念仏信仰のない人と論争したり、 十分念仏を勧めるように。 人にも力を貸し念仏に心をかけられない人にも、 の人でも、父母や師と同じに考えよ。財に乏しい いる人々に向って執念深く論議してはいけない。 別の修行をして

不信の人をも、過去の父母兄弟親類であるとお思

い になって、慈悲をおこして念仏して……

了恵道光『黒谷上人語燈録』 親鸞書写 『西方指南抄』 (高田専修寺蔵)

る。この平等の慈悲を布教の原理とせよ、ということで このように、 (同体大悲) 布教する場合には怨親平等に思いやりの をもって実践すべきことを諭しておられ

ある。 念仏の興行は洛陽にして年久し。辺鄙におもむきて 宗祖御自身も流罪になられた時

田夫野人をすすめんこと季来の本意なり。 (『四十八巻伝』)

Ł

不幸な出来事に対しても怨む気持を抱かれなかった

対して懇切丁寧に答えておられる。 ことは、 また、宗祖は書簡集の中で様々な念仏に対する疑問 宗祖の平等の慈悲心のあらわれであるといえる。 何とか選択本願念仏

を信じて貰おうと、ある時は

たとい本願に遭遇したとしても、

もしも信じない

ならば、出合わないものと同じことである。 念仏を非難する者は、 地獄に堕ちてもものすごく

長い間苦しみを受けること甚だしいものがある。

78

疑えば仏が嘘偽りだったことになる。

はよっよ、。いって妨げることがあっても一念も疑う心があっていって妨げることがあっても一念も疑う心があって

信じてはならない。生するための正しい方法ではないと教えられても、生するための正しい方法ではないと教えられても、たとい千人の仏がこの世に出現して念仏は全く往

おられる。と、念仏信仰には「信」が不可欠であることを強調して

開して説明しておられる。宗祖は、三心のうちで一つで既する事柄である。つまり、往生できる念仏と往生できるが念仏についてである。こういった質問の背景には、たい念仏についてである。こういった質問の背景には、他の信仰に走ったりしたことが予想される。いずれにし他の信仰に走ったりしたことが予想される。いずれにしても、自分が念仏をしていて、この念仏で本当に教われても、自分が念仏をしていて、この念仏で本当に教われても、自分が念仏をしていて、この念仏で本当に教われても、自分が念仏をしていて、この念仏で本当に教われてあったのであろう。宗祖は、三心のうちで一つで関して説明しておられる。宗祖は、三心のうちで一つで関する事柄である。宗祖は、三心のうちで一つで関する事柄である。宗祖は、三心のうちで一つで関する事柄である。宗祖は、三心のうちで一つで

願に乗ずることは信心の深きに依るべし」とか、更に、「一つの願心である」とか、「深く信ずること」とか、「本おられるが、それでも理解できない人々にわかり易く、

を払拭するがごとく最も簡潔にして決定的な説明をされ『一枚起請文』に到っては、一切の三心論に対する疑問願に乗ずることは信心の深きに依るべし」とか、更に、

三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿弥ている。すなわち、

陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候也

題であり、昔も今も人々の最も知りたい問題であるから、往生できるか否かということは、信仰確立に不可欠の問際に最も力点を置かれた教理であることがわかる。念仏と断じておられる。やはりこの三心論は、宗祖が布教の

しめること(自信教人信)を平等の慈悲をもって熱烈にれた三心論に主体的に取り組み、自ら信じ、人を信じせらない。そこで、現代に生きる我々は宗祖が最も力説さ現代においても、三心論を布教伝道の柱としなければな

宗祖の金言を実践していく他はない。私自身もある転機るのは難しいのであるが、ただ一向に念仏すべしという実際に念仏してみると、なかなか自内証=信仰確立す

展開すべきだと考える。

も欠けると往生できないという善導大師の説を説明して

心 この 弥陀仏のみ国へ生まれたいと意欲し、その他の欲望を 然の道理)、また、宗祖の三昧体験からすでに阿弥陀仏 仏の救済の原理が、大自然の法則と同じであること(自 によって、阿弥陀仏を真の親としてひたすら本気で(至 ることができると思う。宗祖はこのようなご心境を、 阿弥陀仏にお会いしたいという欣慕の情が湧いてくる。 切放擲する。そうして念仏していると、真実の親である の実在が実証されていることを知的に理解し、 した。これを、知・情・意の面から考察すると、 念仏していけば、 国に生まれたい 情が次第に強くなってくれば、 至誠心) お慕いし (欲生我国=廻向発願心) という気持で 急速に信仰が深まっていくことを体験 (信楽=深心)、あなたの清きみ 自然に念仏を相続 信じ、 阿弥陀

にあるように、 と詠まれていることからも理解できる。『一枚起請文』

われはただ 仏にいつかあおい

草

心のつまに

かけぬ日ぞなき

| The control of th

定して、南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちに-------(意)&------こもり候

芽が出るまで忍耐強く精進するほか道 情である。念仏する心の形から 内容である欣慕の情 が「信」と「意欲」である。念仏する心の内容は欣慕 即ち意欲することである。念仏する心の形を決定するの まり信じることと、意的には「往生するぞと思う」こと、 に念仏す」るほかない。少しでもその情の芽が出ると、 の情の発露の前提条件として、知的には「疑いなく」つ と、三心論の結論を述べておられる。阿弥陀仏への欣 る喜びが実感できるようになり、一人でも多くの人に念 自然と口に念仏が出るようになる。 本当に生かされてい から ない。 唯 一向 0

Sp.

仏を相続しているといったお便りを頂くことがある。こ 誓約運動を通して、 の上ない喜びである。 不思議である。私は数年前から睡時十念運動・毎日十念 るのだろうか。 信者 蓮托生とはこの喜びを表わして の方から入信した喜びや毎日念

仏する喜びを伝えさせて頂こうという気持が起こるから

るように思われる。 現代にあっては、 現代人は文化や宗教の中味を切に求 文化も宗教もますます形骸化して

宗祖の布教姿勢そのものであると考えるからである。現代人に生きた信仰を伝道しなければならない。故に我々は布教の原点である「自行化他唯縡念仏」を実践して、ならない。結局布教は自分を語るしかないのである。それは、自ら念仏し、平等の慈悲を原理として布教されたれは、自ら念仏し、平等の慈悲を原理として布教されたれば、自ら念仏し、平等の慈悲を原理として布教されたれば、自ら念仏し、平等の慈悲を原理として布教さればめているに違いない。このような状況にあって、我々はめているに違いない。このような状況にあって、我々はめているに違いない。

(石見教区・向西寺)他人を利することもまた楽しい

自ら生きることは楽しい

時機相応の念仏

研究所員(九州支部) 金 子 貫 司

ち、凡愚・認悪の時であるという意識から、「生盲凡夫」ないう意識となって、その無仏という深淵の突破、仏」という意識となって、その無仏という深淵の突破、生践的切り換えが無量寿仏と直結し、浄土教へと走らせましがする信仰に内含される隔絶感から、「鬼今の無な」という意識となって、その無仏という深淵の突破、集鷺大師の場合、世代的系列においてつながる釈迦と

て説かれたのである。の救済、「応病与薬・機教相応」の仏道成就の教,えとし

経疏』)の教え、善導大師に傾倒されたわが法然上人は、の要門に逢えり」(『観経疏』玄義分)「二種深信」(『観流転して、今釈尊仏の末法の遺跡たる弥陀の本誓願極楽満事実師における「我等愚癡の身、曠劫よりこのかた

選ばず、時機相応して、順次に生死を離るべき要法は、番より、「源空が如き頑魯の類は、さらにその器ものにない。これすなわち、世くだり、人おろかにして機数そかける故なり。このほか有智無智を論ぜず、持戒破戒をむける故なり。このほか有智無智を論ぜず、持戒破戒をむける故なり。このほか有智無智を論ぜず、持戒破戒をむける故なり。このほか有智無智を論ぜず、持戒破戒をむける故なり。このほか有智無智を論せず、持戒破戒を避け、いるのない、苦海沈倫の具体的現実存在の内永遠に救いようのない、苦海沈倫の具体的現実存在の内永遠に救いようのない、苦海沈倫の具体的現実存在の内

道綽禅師は、「若し教時機に乖けば修し難し入り難し」されている。
されている。
とを示されている。
と根本的立脚点が時機相応ということを示されている。

道綽禅師は、「若し教時機に乖けば修し難し入り難し」道綽禅師は、「若し教時機に乖けば修し難し入り難し」がらず、智無きが故に」(『安楽集』巻上)と。 いらず、智無きが故に」(『安楽集』巻上)と。 からず、智無きが故に」(『安楽集』巻上)と。

自身がいかに誠意と責任をもって答えるかにあるのであ開かれるのである。時機そのものの換びかけ、われわれ越して存在するのではなく、救済は歴史そのものに切りが問われてくるのである。真実の救済は時代、歴史を超が問われてくるのである。真実の救済は時代、歴史を超にといるとき、課題は自ら荷負うこのように歴史が問題となるとき、課題は自ら荷負う

る。

るや」(『選択集』第一章段)との問いに、「当今末法、た今に至るまでなお自ら生死に輪廻して、火宅を出でざを引用して、「一切衆生みな仏性あり。遠劫よりこのか

理はまったく消滅してしまい、たゞ釈尊の説いた仏教と

証果を得る者のない時代である。

末法に入ると、

仏の真

法然上人は『選択集』の劈頭に道綽禅師の『安楽集』

に、500円は、は己身の名、ことして、石井では、この時思想を形成し、仏教の歴史観の上で重要な意味をもった法は正法・像法に対することばで、正・像・末の三

似ているけれども、 るように、「像」は似る、象がなる。 時、 れる時代である。 は、『雑阿含経』三十二に「如来の正法滅せんと欲する ・行・証の三法がそろっている時代のことである。 証果を得ることのできる時代のことをいう。 われる時代、即ち、釈尊の教法によって修行するものが ている。正法とは釈尊の説いた正しい仏法が世におこな 相似の像法、 即ち、 世間に出で已りて正法則ち滅す」とあ 実質的にはちがう教法が世に行なわ 教·行 の意味であるから、 の二法はあるけれども、 つまり、 形然相 は

塔の建立が盛んな造塔寺堅固、⑤たがいに自説に固執し 開く者が多い解脱堅固、 汚濁と荒廃の激しい社会の様相をあげて、仏法が衰退す てあい争う闘諍堅固、 ③仏教を熱心に聞き学ぶ者の多い多聞堅固、(4)寺院や堂 衰をあらわしている。 釈尊滅後の時代を五種の五百年ごとに区切って仏教の盛 る憂慮を示している。また月蔵分一二分布閻浮提品には、 いう名前だけ残り、 の時代に至っては白法 の正像末三時思想が熟してくるのは、 『大集月蔵経』日蔵分三九悪業品や護持品には、 修行も証果も無くなってしまうので すなわち、 の五つの堅固説をあげ、 (仏性) ②禅定を保つ者が多い禅定堅固 隠滅すといわれている。 1)智慧を得てさとりを 中 国隋代であ 闘諍堅固

弘明集』第十、『続高僧伝』第八等にもさらに、「同六年 北周、長安に於て仏道二教を廃し、経像を毀ち、 百余万を還俗せしめたり」と記されてあり、 『続高僧伝』第二十三等によると「建徳三年五月十七日、 をより切実なものとしたのである。『歴代三宝紀』第三、 五七四年に実行された北周武帝の廃仏毀釈は末法意識 また、『広 沙門二

> ている。 に北斎を亡し、 焚毀され、 僧老三百余万は悉く還俗せしめたり」と述べ 破仏をその都、 鄴にて断行、 仏像経

とを明言している。 りて後の第四の五百年に当れり」と今時が末法であるこ 種堅固説を引き、「計るに今時の衆生は即 道綽は 『大集月蔵経』に曰くとして分布閻浮提品 ち、 仏世を去 0 Ŧi.

人々は末法到来の実感を深くし末法の自覚によって三階 教や浄土教の新しい信仰が生まれたのである。

このように仏教が破壊される現状を目のあたりにして、

とは実に意義深いといわなければならない にみずからの信仰の典拠の第一に求めら 法」の声しきりする当代にあって道綽禅師の『安楽集』 の中で数多くの引用教論がある中、 法然上人は伝教大師の 『末法燈明記』 劈頭に引用されたこ が主唱する「末 れ、『選択集』

る。

信行の三階教、

道綽、

善導の系列における浄土教が

末法思想によって生れた。

頭によって骨肉相食み、 ある「当今末法現是五濁悪世」の語句を自己の相遇した 地獄の相を呈していたの 法然上人の時代は、 保元、 略奪、 で 平治の大乱、 ある。 飢饉、 『安楽集』 殺戮の世で、まさ 源平二代の抬 の上 一巻に

K

行を起し道を修せんに、 罪悪意識となって、「わが末法の時の中に億々の衆生、 破仏の経験によって、 根底において問われ、すべての価値体系は崩落するので (『選択集』第一章段) と、我れ自身の現実存在の根拠が 消化され、 いまだ一人も得るものあらず」 現実の恐懼と危機意識、

る、 的・観念的な仏教の枠組からは当然外されてしまって に堪えたる修行やある」(『聖光上人伝説の詞』)と伝統 の三学のほかに、わが心に相応する法門ありや。 ここにわが如きはすでに戒定慧の三学の器にあらず。 悲しきかな、 「末法 (代) の衆生」 悲しきかな。 の救いのために血涙を流され い かがせん、いかがせん。 わが身

としての自己に外ならない。 存在、凡夫、そのまゝ法然上人の内的葛藤の内なる実存 学を修すべきこと)からはずれてしまっている。 も努力しても、「すでに……あらず」と、伝統的規範(三 格外の

たのである。

末代の衆生とは、「三学の器」でありたいと努力して

しみ聖教に向い」(『聖光上人伝説の詞』)て、当今末法

しかるあいだ、なげきなげき経蔵に入り、

悲しみ悲

仏の光はわが身に投ぜられるのである。

億人あれば一 を遂ぐる」(『念仏往生要義抄』) 億人が救われる万機普益の今日的課題が根 道はと、すなわ ち 時に「十人は十人ながら、

百人は百人ながら、

みな往

としての先験的世界に呼応し、それまでの日本仏教の観 行なりき」(『十六門記』)と、問いの背後にある超 め置かる」をやと、高声に称えて感悦髄に徹り、 如き下機の行法は、 意を得たり、歓喜のあまり聞く人なかりしかども、 本において問いかけられているのである。 そして、「一心専念弥陀名号の文に至りて、 阿弥陀仏の法蔵因位の昔、 かね 善導 落淚千 予が の元 越

あり、 という謙虚な自覚より出発しなければならな 落涙千行、法然浄土教は開顕されたのである。 得られた。 表面的な繁栄の表皮を引剝がしこの絶望慟哭の底から念 している。 現代は法然上人の時代からすでに八百年の時間が経過 永遠は末法である。 身心脱落、 しかし「末法万年」、すなわち末法 眼の鱗剝げ落ちて、 人間は常に末法的存在である 感悦髄に徹 は 現代 永遠で

性

念的性格を超克し、選択本願の念仏によって一大回心を

する驚嘆のみがある。人間至上主義は現代人の心であり、 た神秘や不思議はなく、 科学、技術、経済的生産力である。ここに人間を超越し 崇する対象は、限りなき進歩し繁栄を約束してくれる、 現代人が絶対視し、恩恵を与えてくれるものとして尊 人間がもつ自分自身の偉力に対

現代人は本質的に無神論者であるといえる。

界はますます緊張を強める歴史的事実、これらは皆、 教的精神を失った人間至上主義の独善的文明がひき起し つつある当然の現象である。 ら、少しも世界不安が消えず平和主義を掲げながら、 したことも否定できない。二度の世界大戦を経験しなが 現代文明は燦然たる自由の華を開いたかのように見え しかし反面、 現代文明が根源的 な類 落の時期に突入 世

から 人間 台詞があった。宗教も例外でなく平和と愛を説きながら、 ばないほどに人間は戦いや愚行を繰り返すのだ」という 逆に戦いと憎しみの原因となっていることも少くない。 京法的存在であることを打ち忘れて、依然として生の 現代人は科学による生産性の向上、進歩のうえにこの 黒沢明監督の映画『乱』の中で、「神ほとけの力も及 の末法的存在の現実を蔽い 隠している。 現時 の人間

> ている。 中からあくどい刺戟を求めて生の豊饒のみをあさり歩い

現今、確かに寺塔を建て、仏像の造立は盛んである。

また、 て宗教回帰の現象と呼ばれているのである。しかし人間 いわゆる心の時代の到来を告げる記事も少くない。 ームなどの語がこのところジャーナリズムに登場する。 オ カル トブーム、 神秘ブー 4 密教ブーム、禅ブ

た名字の比丘のみがある。 を蔽うものがある。心は全く仏法からも戒行からも離れ している。現実的な繁栄とはうらはらに人心の荒廃は目 人間不信、 無感動、 暴力とかが伝染病のように 道綽禅師は月並な常識に反 流行 0.

らになり弱肉強食獣のような生活があらわれ、断絶、 社会の要である愛しあい信じあう心は失なわれ、

ばらば

をかえって人間 に、徒らな文明、文化の隆盛、 の標識とした。このアイロニカルな見識に見られるよう 五百年に当れり」(『安楽集』巻上)と造塔寺堅固を末法・・・・ の頽落と断じて憚らぬのが、宗教的、 美しい理想や言説の盛行

法の自覚の特色をなすのである。

選択本願の念仏とは、繁栄と平和の中にあって、いま、

は、この選択本願の念仏を、今こそ、時機相応のグローこからひらけてくる直生復活の喜びの声でもある。我々声であり、虚構の自我崩壊の声である。だからこそ、そ私が埋没している世俗化、日常化の現実の世界の崩壊の

塚本善隆『支那仏教史研究』 《参考文献》 《参考文献》

(長崎教区・聖徳寺)

藤本浄彦『法然における浄土教的存在論の一考察』

高山岩男『現代の不安と宗教』林霊法『法然浄土教と現代の諸問題』

布教の実践と地域史

研究所員(九州支部) 村島邦

俊

民一般の関心もまたそこにあると思われる。

えるということをテーマとする。
に限り、その実践にあたって、その地方の歴史事情を考方の寺院、つまり自坊を中心とした布教教化活動の場合方法や形態、色んな場が考えられるが、今回の場合は地方法や形態、色んな場が考えられるが、今回の場合は地方法や形態、色んな場が考えられるが、今回の場合は地

口を見出そうと思うのである。檀信徒をはじめ、地域住いことは当然であるが、ここで敢えてこの様なテーマにいことは当然であるが、ここで敢えてこの様なテーマについて考えることにしたのは、われわれが住職をしている寺院とその地域の歴史的な歩みの中で、現在までに残る寺院とその地域の歴史的な歩みの中で、現在までに残る寺院とその地域の歴史的な歩みの中で、現在までに残る寺院とその地域の歴史的な歩るのである。檀信徒をはじめ、地域住世を関立といる。

自分たちの信仰の中心である檀那寺について、その創度がある。と言ったんではどうも人々の信仰の心を培うには困難をと言ったんではどうも人々の信仰の心を培うにはどられる。との寺は今始ったばかりのホヤホヤのお寺でございます。この寺は今始ったばかりのホヤホヤのお寺でございます。と言ったんではどうも人々の信仰の心を培うには困難をと言ったんではどうも人々の信仰の心を培うには困難をとわめる。

地方史の研究も盛んである。 K 地域 されている。 要よりもむしろ、 れを汲む人達がいかに苦労してそこに今のお寺が じる訳では決してない。 される場合はほとんど希れである。 部門の占める紙数のウエイトは大きい。 纂にあたって、 出版されている場合が多い。このような綜合的な史誌編 村などの公的 版ブームと共に歴史書の出 本山において勤修されてい 地方寺院ではその宗祖上人の法要はなさらない。 かということをよく考えなければならない。 れなければならない。 村に寺院が建立されるに至った、そのいきさつが ウェ 事 代の書籍出版業界に イト 情をも含めて、その寺院が出 おかれている結果に外ならないと思われ つまり、 機関の手によって、その成果はまとめられ 文化史面、 開 Ш かといって教義宣布の本流 年中行事の中で開山忌を重要視し、 上人の法要が毎年、 お念仏の教えの流れ おいては、 る。 特に中世 版ブームも続いている。 これらはほとんど県・ 地方の寺院では宗祖 史以前 来 つまり、 依然として仏教 た背後のいきさつ 更にこれらの研 盛大に K 或る他宗の 地方のその の中で、そ お い 、て宗教 それ を軽 重視さ お 出 就中、 市 書出 来た る。 勤 0 法 は ん 3 町

> ころ史学を専攻したせいと、 られる機会もまた多い。 究執筆に のような仕事 あたっては、 に携わってきた。 その 筆者もこの例にも 地 私自身の関心も手伝ってこ 方の 寺院 住 職 れず、 の関与を求 学生 0

方の寺院は都に位置する大本山の出張所として建立

るも 理由でない限り木仏寺号を許可されなかってとも伝えら 再興するという名目のもとに建立され、 立の場合においても、 事情のもとにできたものか、 に関する縁起 を得るために不可欠なものとして、 ある縁起が地方寺院を中心とする教化活動と人々の と誇りを持つのである。またこのような古い伝統と由 ともに我々が生きてきたことに、 んでいる村の寺院や神社が何年くらい昔に、 人々の歴 のの第 史的関心や興味の中で大きく浮きあがって来 は地名の由 ・由緒・由来などがあげられる。 すでに廃寺となっ 来に始まって、 古い伝統ある寺院の歴 わが 前 述のように新寺 ル 神社·寺院 またそのような 1 た寺を移 ツのよろ どのような 自分の住 こび 史と 信 仰

) 北部九州では平安時代の有名な入唐僧である弘法大師) 寺が開かれるに至ったかということになると、私ども地方寺院の開山、つまりいかなるきっかけによってそ

0

0

れる。

ものが その足跡を伝えるものが数多く伝えられてい 後にしばらくの間そこに滞ったという由 言わず敢えて入唐 空海と伝 (教大師 0 特に弘法大師 両 師を日 最 僧 澄 と言 の開 本に 創 2 た の場合は様 おける天台・真言宗 によると伝えるも 0 は この 々 な霊 両 一来を開創とする 師 験をも る。 0 から から 入 0 唐 開 大半 って 0 祖

前 2 を

0

藩記録、 江 ら実際に現在の形態に近い寺院としての姿になったのは 州に多く見受けられるのは地域柄でもあろう。 宗の寺院として中興されたとされるものが、 浄土宗で 中には仏教 など巻物 ばなら りと共にある宗教とその .戸初期以降のものがほとんどと考えられる。 これらの史実を確証するには、 0 方と伝えても、 様な由 た 書 さらに は二祖鎮西上人の行跡と重なり、 の地方伝播流布 面 「緒により発祥の霊場が、 のみに依存することなく、 い は本山関係などにもその存在を求め くら往昔は それだけ 信仰を示すものもまた多い。 の過程を物語り、 の大寺が他 七堂伽藍を具 寺に残し伝える縁起書 中世 例 汇 存在 これより浄土 尼 備 特に 至っ 時代の移 ば L 村記 これらの 然しなが 0 てわ 北 記 寺 なけ 領 録 部 何 n 九 から

なけ

n

ば確証は困難である。

さらに現存する色々な事物

豆腐などを供える。

また、

商家や会社

- 劇場

料亭など

われる。 れば人々の 教教化の材料として、 る。 などあげれば限りないほど寺 研 これら豊富 究が必要であろう。 またこれらの 信 仰を伴っ な史料 た関 材料の中に を研究し、 お話の糸口にでもなすことが 堂宇 ·L はより一 0 • 周辺に散在するも 仏 は無形 その意味するも 像 • 層 石 のも 深まるものと思 墳 のも少くな 墓 0 のであ 寺跡 を布 で

四年 人々 る 稲 田 荷信仰がどこにでも見受けられる。 舎では稲倉魂神や保食神を五穀神、 の信仰心を考えるのに随分興味深いものが (七一一)二月七日初午の É 帰化人奉公伊侶具 京都伏見に和 農業神として祭 ある。 が

就中民間信仰は念仏や仏教から聊か遠ざかるものあるが、

い

民俗・習俗としての冠

婚葬祭や年中

行事

•

方言など。

之、 きた。 仰厚く、 町 祭ったのを初めとするこの信仰は、 も重要な現世利益である五穀豊饒を祈願してきた。 た農業の守護神としての稲 方でも 農地を守るとい 稲 荷神 漁村でも生業の漁業繁盛の神として尊信され 商 X 0 の使い 間 で福を保障する商売繁 として狐をまつるが、 狐の好物である赤飯 成 りの神 で、 日本人の生業であ 農民 盛 狐 の神とし P は野 の生活 油 揚げ 鼠 また を捕 て信 K 5

信仰 ち異境から漁業神として伝承されてきたが、 須神は海の神として古くより広く信仰され、 神・荒神等々。その中 の守護神、 日 本神話 の対象にある。例へば山 屋敷神として現代まで祭り続けられてい の神々のような固有の名を持たない神が民間 の一つに恵比須信仰がある。 の神・田 の神・竜神 竜宮すな 中世以降に 塞 恵比 る。

たのである。

中馬の守護神でもある。 散を祈ってきた。貴船さんは田の神信仰で、水利を与えて信仰し、各集落ごとに小祠を祀り、五穀豊饒・疫病退で信仰し、各集落ごとに小祠を祀り、五穀豊饒・疫病退 なった。

は港町でに市の神として商売繁盛の現世利益を祈る神と

た民間 わり、 る「塞の神・道の神・旅の神」であった。 ともに稲作 れた境の塞の神である。 を祭る庚申信仰がある。 た。さらに中国道教より生じた庚申の儀式が日本に伝 また古来よりの民間信仰 信仰は本尊を青面金剛とし、 境の神とし の豊饒と幸福を願う「作の神 て猿田彦を祭り「 外来の疫病・邪鬼・災厄を退け 道祖 の一つに猿田彦神 神 は地域や道路の境に祭ら 庚申待 古くは密教僧や修験 5 幸の神」とな 農業の普及と (道祖神 をしてき

き「座」をつくり、堂塔を建て蜿蜒と祭り続けられていて広く流布され、全国的に都市農漁村各地に「講」を開者たち、近世には御殿医、町医、神道の学者たちによっ

々の生活の中での信仰の心がにじみ出ている。願いをこめて祈り、秋には感謝の意をもってまつり、日遠い昔から、四季折々の生活の中で素朴ながらも春にはとは縁遠いようにも思われるが、そこにはわが日本人がとは縁遠いような信仰の形態はわれわれの目指す念仏のそれこのような信仰の形態はわれわれの目指す念仏のそれ

額から、村中、触・郡中の世話役こぞっての大絵馬まで事成長や武運長久を祈る武者絵、本山参拝を終えて同行様々な願いや感謝の心を物語るものが多い。わが子の無馬の絵がそれ以外に多様化したものであるが、そこにも馬の絵がそれ以外に多様化したものであるが、そこにもいる。もともとは神に神馬を奉納することから変化し、いる。もともとは神に神馬を奉納することから変化し、

活動をすすめるにあたり、その地方の地域性また歴史的要するに地方の寺院を中心にその住職として布教教化

実に多種多様である。

K

一絵

馬」がある。絵馬は神社だけでなく寺院にも掲げられて

最後にもう一つ、人々の信仰の心を感ずるもの

あであり、またその様なことを実際に行っている筆者は易であり、またその様なことを実際に行っている筆者は大いに助かっているということである。あくまでも過去た人たちの信仰(心)を見習いながら、昔から「一所懸た人たちの信仰(心)を見習いながら、昔から「一所懸た人たちの信仰(心)を見習いながら、昔から「一所懸た人たちの信仰(心)を見習いながら、費から「一所懸た人たちの信仰(心)を見習いながら、現代のわれわれの生き方を学ばねばなのため、大変役立つ材料や方法を豊富に見出すことが容のため、大変役立つ材料や方法を豊富に見出すことが容のため、大変役立つ材料や方法を豊富に見出すことが容

事情を学び理解することによって、その中から教化活動

(福岡教区・光明寺)

布 教 と 視 線

研究所主事 大 室 照

道

的コミュ

ニケーションについて理解を深めたうえで、教

と思う。 あるが、ここでは視線をとりあげてみて考察してみたい 教壇布教、 法話等をするときに注意すべきことは種

がある。たとえば朝、「おはよう」と挨拶を交すが、そ 段には、 と人と話すときに、非言語的なコミュニケーションの手 ションには、言葉を使う言語的なものと、 のとき相手の顔を見ていうのと見ないのとでは大きな違 ケーションの意志の伝達に関する比重は大変に重いもの い非言語的なものがあるからである。私などはともする なぜ視線を重視するかというと、人間のコミュニケー 無関心になりがちだが、この非言語的コミュニ 言葉を使わな

いがある。

本論における視線をはじめとして、このような非言語

壇布教、 生まれるのではないだろうか。 法話等をしていただければ、より大きな効果が

をいう。本論においてはこの二つとも考察するものであ 向をいうのに対して、「まなざし」は主として目の表情 この二つをまず定義しよう。「視線」が主として目の方 るがやや視線の方について重く論じてみたい。 「視線」と同じような言葉に「まなざし」があるが、

浄土宗教学大系を見てみると

まず布教関係の書物ではどう扱われているだろうか、

置)を定め徐ろに講話の進行と同時に視線の掃射を行 講師は先ず定位置に直立して聴衆に対して全体を一 その注視の定位置 (聴衆の後方五分の四の位

ない聴衆全体を傾聴せしむべく準備すべし、此れ聴衆

これにはどのような意味があるのであろうか。と、書かれている。ここで「視線を掃射」するというが、を把握する第一の要件なりキュ゙

「視線を送る」、「みつめる」ことには大きく異った二つの意味がある。「慈愛」と「威嚇」である。「慈愛」とないまなざしである。このような母親、あるいは父親との「目と目の結びつき」は乳児の性格形成におは父親との「目と目の結びつき」は乳児の性格形成におは父親との「目と目の結びつき」は乳児の性格形成において重要であるとされている。

に反射させながら話すという。

な視線を「威嚇」とみることができよう。れの側の攻撃性闘争性を駆り立てるのである。このようれがあることがあるという。人間がサルの目を見るとサいで下さい、向かって行くことがあります」という立てよう。野生のサルの餌付け場に行くと「サルの目を見なよう。野生のサルの餌付け場に行くと「サルの目を見なよう。野生のサルの餌付け場に行くと「サルの目を見ないで下さい。

っているようである。

男女が別々に反対の壁に面して、食事をし、ことばを壁リカ・カメルーンのフルベ族などは、円形の家のなかで、つむける。視線をあわせては話さないのである。西アフまたアフリカ人も、おしなべて目上の人の前では顔をうまたアフリカ人も、おしなべて目上の人の前では顔をうらことに決したい。会話の際、日本人はあまり相手を見つめない。

階級の白人は黒人のそうした態度を卑屈なうしろめたさは不作法で、挑戦的と思われるらしいのだ。しかし中産けようとする。彼らのあいだでは、目をつきあわせるのろうが、アメリカの黒人も会話の席で視線があうのをさこのようなアフリカ文化の伝統をうけついでいるのだ

あるといえそうだ。し、目をふさせるのはアフロ・アメリカン文化の作法でし、目をふさせるのはアフロ・アメリカン文化の作法でのときからしつけられる。こうしてみると、視線をそらに、プェルトリコ人も目上の人を見つめないよう、子供のあらわれだと受けとる傾向がある。アメリカでは同様のあらわれだと受けとる傾向がある。アメリカでは同様

圏といえるだろう。イタリア人などはよく相手を見つめ、これに対してヨーロッパは会話の相手を見つめる文化

手をあまり見つめないようにするというのが、礼儀となその使い方には注意が必要である。それで我が国では相

このように視線には全く異った二つの意味があるので、

肩 もらすまいとする場合には、 から 見つめ合ったまま話すのは愛情の表現にほかならない。 だ。)アメリカ人にとっては、アラブ人のようにじっと 脇の中空にただよわせる。(もちろん、きょろきょろと 首を相手の方へねじ曲げて世間話をしていたそうだ。 て坐っている母と娘が、 相 よいのだろうか。 あまりよそ見するのは気のないしるしで、たいへん失礼 (とくに話し手は)視線を相手の顔からたびたびはずし、 目にもどす。これに対してアメリカ人は会話の途中、 か顔のほかのどこかをちらと見るぐらいで、すぐにまた 目を見つめている。 人は、ほとんど会話の続いている間中、たがいに相手の 手の顔を見ないで話すことはあまりないようだ。 ャ人も相手の顔を見て話すほうだ。バスでとなりあっ の幅でそれぞれ囲んだ四角形のなかを見ていればよろ このように国によって視線の使い方が異っていること この点でさらに徹底しているのがアラブ人だ。 という言葉がある。 我が国 我が国には古来「目通り・乳通り・肩 視線を相手からはずすときは、 では 日本人から見ると不自然なほど つまり相手の話を一 会話の間どこへ視線を置けば 相手の目の高さ、 乳の高さ、 言も聴き アラブ ギリ 口許

しいということである。

れると、相手から目をそらせているようにうつるもののんだ範囲内、とのことである。ちなみに、これよりはずら一寸(約三、三センチ)」の幅をそれぞれ四角形にむすは広がるようである「額の通り、おへその通り、肩幅かは広がるようである「額の通り、おへその通り、肩幅か

ようである。

よ に意識せざるをえないので、二人の間には ら自由であることは不可能である。 互いに向き合っていると、実際問題として相手の視線 題がきわめて重要な意味をもっている。 かい合って坐る位置関係である。この場合には視線の問 えてみよう。これには大別して三つの型がある。 つぎに、二人が坐って話をしあう場合の位置関係を考 第一は「対面」の位置どりである。これは、二人が向 避けるにせよ、いずれにしても相手の視線をお互 視線を合わ わたしたち なにが せるにせ L は か お

この場合は、相手の視線を直接に意識する必要がない.九○度の角度で隣り合わせに坐わる位置関係である。第二は「直角」の位置どりである。これは、二人がほ

ぼ

緊張感が生ずることはまぬがれがたいであろう。

できるからである。
も、避けるにしても、ともに自然らしく振る舞うことがも、避けるにしても、ともに自然らしく振る舞うことがんリラックスできるようである。視線を合わせるにしてので、二人の間は親密の関係をたもちながらも、いちば

カウンセリングする場合などでも、この「直角」の位

に並んで座る場合である。第三は「平行」の位置どりである。これは、二人が横置どりをすることが多いようである。

張感を欠きすぎるというきらいがないでもない。ックスすることができる。しかしその反面、ときには緊わすことはありえない。そのかぎりでは、お互いにリラこの場合には、意図的に横を向かぬかぎり、視線を合

めて引用しよう。 してきた井上忠司の『まなざしの人間関係』からあらた 講義室内の視線の方向についての文を、今までも参考に してきたが、実際の教壇布教において応用できると思える めて引用しよう。

ある。

乗りものの座席、会社や工場内の机の配置、会議室、もいくつかの興味ぶかい問題が考えられる。たとえば、空間内における視線の方向についていえば、ほかに

し考えてみることにしよう。 ここでは、大学の講義室という空間を例にとって、少教室、講義室、講演会場の座席の位置どり等々……。

講義室には、教官(教員)のための教壇と教卓があ

なおしてみると、重要な意味あいがこめられているこの構図も、視線の方向という観点からあらためて問いて対面」の位置どりにあるわけである。この当たり前に対面」の位置どりにあるわけである。この当たり前の構図も、視線の方向という観点からあらためて問いなおしてみると、重要な意味あいがこめられていることがある。そして、両者り、学生たちのための机と椅子がある。そして、両者り、学生たちのための机と椅子がある。そして、両者

そ、講義室内にはある種の緊張感が支配しているのでらを見、学生たちが教官のほうを見つめているからことたんに自分の内部で、なにがしかの緊張感が生じはとがわかる。わたしたちは他者の視線を意識すると、とがわかる

彼が講義室の天井や窓の外ばかり見やりながら講義をほうを見ないとすればどうであろうか。あるいはまた、かり視線をおとしていて、講義中に一度も学生たちのこれがもしも、教官が教卓の上の自分のノートにば

しつづけているとすればどうであろうか……生

な意味があり、一般には視線が合うとある種の緊張感をな意味があり、一般には視線が合うとある種の緊張感をコントロールするのである。そして視線には、先にのをコントロールするのである。そして視線には、先にのなたように「慈愛」の意味もあり、笑顔やほほえみを交べたように「慈愛」の意味もあり、笑顔やほほえみを交べたように「慈愛」の意味もあり、笑顔やほほえみを交べたように「慈愛」の意味もあり、笑顔やほほえみを交がたように「慈愛」の意味もあり、実顔やほほえみを交がたように「慈愛」の意味を意識する必要はないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある程度の気くばりはしていないが、話をするときにはある。

ž

きたいと思う。

一、中野隆元、浄土宗教学大系七、四一三頁

(東京教区・光取寺)

福井康之、まなざしの心理学、創元社野村雅一、ボディランゲージを読む、平凡社

院とコン ピ ユ 1

この発表の目的

込みが非常に多く、個人的に相談を受けたり、 この場を借りて基本的な問題に触れてみたい。 よく耳する。そこで今回の教学布教大会関係にどう関連 し生かせるか、また、寺務にどう生かせるかを中心に、 最近寺院にワードプロ セッサやコンピュータ等の売 経験談を n

りパーソナルコンピュータ ※尚 人的に使用される比較的安価なコンピュータである。 ここで言うコンピ ュータとはことわりの無 (通称パソコン) と呼ばれる い 限

学術分野 におけるコンピュー -タ利 用

しいものがある。 近年学術分野におけるコンピュ 当浄土宗教学布教大会関連の分野にお ータ利用の成果は、

E°

ユ

1

タに興味を持つ者の同好会的な私的シンポ

る事が満場一

設立の提案が行なわれ、各大学にも委員会支部を設置す

致で採択された。このシンポジウム

は ジウム

コン

まえつつ、一元化の方向を目指 いて、各大学のそれぞれのコンピュ

į

1

E

ユ

1

タ委員

会

1 コ

タ利用の実態を踏

でこそあったが、聴講希望者は予想外に多く、

最初用意

究 員 市 III 隆 士

リッ 典研究 いて、 今年度の印度学仏教学大会のシンポジウムにおいても経 所において、コンピュータ利用の説明会が催され、 本の研究』が掲載された。 に立正大学の塚本啓祥氏の『コンピュータによる梵本写 ٢ 研 最近では『中外日報』昭和六十一年六月三十日号 ・パーリー文献) (漢訳経典ではなくローマナイズされたサン のデーターベ 昨年は大正大学綜合仏教研究 1 スの共有化

また

スク

であろう。 成果のデーターベース化による新たな展開を求める動き 成果。これらは哲学研究に、例えば索引の作成等、研究

された教室に入り切れず、会場を大教室に移動し行なわ

コンピュータとワードプロセッサ

業をすることのできるコンピ 異機種間 問題で校正の負担が大幅に軽くなるからである。 稿はプリントアウトした原稿とメディア 1 業界においては各機種のデータが読み込め印刷までの の機種が登場している。このような編集現場では将 い 1 現場では、提出される論文にワードプロセッサ(以下ワ る。 スク)を提出することになると考えられる。 プロと略す)を利用される方が年を追りごとに増えて プ、リコー、 最近、教学院研究所や布教研究所の 現在、 どうしのデー ワープロは日本電気、 カシオ等、 タ互換性はほとんどないが、 実に様々な企業から何十 ュータが導入されつつある。 富士通、 関係論文集の編集 (フロッピ 東芝、シャ 誤植等の 現在、 印刷 来原 -種類 1 作 デ

外字登録等異機種間に生じる問題

仏教経典関係のデータの読み込み、データベース化に

六進コードでは四A二九というように、固 教の「仏」の字はJISの区点コードでは四二○九、 数値にしてデータのやり取りを行なっている。 やワープロは、その文字を一六進数 題 められている。漢字はJISによって第一水準、 お は いて将来障害が起き、統一を計らなければならない問 仏教経典特有の難字 の問題である。 (0~F) 有の番 コ ン 0 E 例えば仏 第二水 地が決 几 桁 1 0

に登録したが、将来この登録番地の統一化が問題になる一〜七七七Eの外字登録番地のうち取りあえず七六二一ので外字作成に頼るしかない。このワープロでは七六二

準、

と決められている。

相当の難字でもここまでに納

るはずだが

『阿弥陀経』にある阿閦の「閦」の字は無い

コンピュータとワープロの違い

はずである。

たない。 タでもワープ タ ンピュ 今の話しはワープロ専用機である、そしてコンピュ ソフト コンピュ 1 A 0 無ければ只のハコ」という川柳 口 の機能 機械のみを持ってても、 1 タに理解できる言語で仕事を指示す を持つことができる。 なん 7 0 があるが、 役にも立 ンピュ

ワー から から セ こなせる仕事の量・データ通信・データベースへ \$ さ辞書機能では、 とコンピュータによるワープロを比較すると字体 もワー つにワープロソフトがあり、これによりコンピュ りの仕事を果たすことが出来る。そのソフト るデータを読み込み(これをソフトウェアー ス・市場 あるだろう。 はかられ安価になっているコンピュータの方が使いで か それを実行することにより初めてコンピ なりのバラッキがある) プロの機能を持つことができる。 ソフトにはバージョ の規模からも考えて、 しかも、 ワープロ専用機 今迄の経験ではコン 1 が アッ コス (値段の設定によって 般に勝っ プを安価 トパ ワー フ れているが、 Ľ オ プ 0 (新旧定価 以下ソフ 口 種 ュ ユ 1 のアク :の大き 専 ータで 1 1 7 類 - タの ンス タな 用 機

通信ができるものが無難である。 1 通信機能に優れているMS-フト タの ソフト 出 の選択はベストセラーのもの 今年度の印度学仏教学大会のシンポジウ し入れ 社の開発した汎用OS) を行ってい る。 DOS コ ンピュ の採用を呼び からMS 7 メリ 1 A 0 力 ワー ムでは、 D か 0 OS O け、 7 、イク プ P デ

の差額)で受けられる場合が多い。

寺院と業者のトラブル

から (オフィス・オートメーショ 立っている。最近コンピュータやワープロのようなO 取り上げられるように近頃悪質業者によるトラブル タ の初期の価格は五〇〇万円程だった。ところが現在ポ も高性能化がはかられている。 りもコストパフォーマンスがはかられ年々安価に、 ブル型のワープロが安売りの店で一万円台で売られ 幸い良心的な業者だった。 の発表に先立ち二、三の業者とコンタクト ン) 機 しかし雑誌の法律相談 例えば五年前、 器 は 他の電気製品よ ワー を取 しか から った プ 口 目

その製品のメー るという例が起きている。 若しくは割引と称して実は高 種 有るにも拘らず、一 現実のトラブルでは現在、 1, るのが現状である。 新製品の出る予定 わば安売りの対象になる製品) カーに売り出しの年 年前製造の打ち切られた高価格 簡単には比較の対象にならないが、 (現行機種でも発表があれば値が 業者がセールスに来たならば、 より性能の良い安価な製品 い買いものを押し付けられ 月日、 を当時の定価 新製品 かどら の機

特にポータブル型ワー

プロに関しては毎月のよ

うに新製品が出回りその値段は生鮮食料品並といわれて る。)を問い合わせるぐらいの注意は必要である。

寺院とコンピュータ

するソフトもあまり変わらない。 宛名書き等の仕事であり、これらのデータ整理しインブ ある。今まで手作業で行っていた、 ットする手間は寺院専用ソフトも簡易プログラムで設計 は、現在手作業で行われる範囲の仕事に過ぎないわけで できるといわれている。 業で行われる事務の仕事はコンピュータにさせることが に使え、どのように活かせるかが問題になる。現在手作 寺院でコンピュータを導入するとき、どのような仕事 逆にコンピュ 年回の案内、 ータに出来る仕事 住所の

現在市販されている寺院用ソフトにできる仕事

事には主に次の仕事があげられる。 現在市販されている寺院用ソフトに登録されている仕

いる。 各ソフトハウスによって、これらの内容に登録されて これらの名称は、 会社によって多少呼び名が異なって

経理システム	護持会費	中陰表	法要計画	墓地納骨管理	過去帳	檀信徒名簿	ソフト名
			0	0	0	0	A
		0	0	0	0	0	В
	0		0	0	0	0	С
0	0		0			0	D

ぶべきである。 にデータの件数等にも注意し、各寺院にあったものを選 いる仕事、 されていない仕事がある。各項目に、また主

宗教法人には収入に収益事業と非収益事業があり、 効果が期待できる。 は計算上の数値の写し違いが起きえないので、 一定の仕事手順の決まっている経理等の仕事について しかし、 経理システムについては、 かなりの

院用ソフトを使用するには、これらの問題を踏まえ、売 がある。これらのことを考慮すると、 取り上げられているように、各税務署の見解にも、 市販されている寺

支出に法人支出、個人支出がある。

宗報の法律相談にも

択するべきである。 の規模、 事をしたいかを導入する前に整理するべきである。 過去帳をコピーして外部で入力というような愚挙をおか データ入力指導は人格的にも十分信用のおける業者を選 原本になる。身元調査という重要な事柄にもふれるので、 力には、寺宝であり法要の重要な役割をはたす過去帳が る業者を選択するべきである。そして、寺院のデータ入 ータ入力、データの保存・複写方法を充分指導してくれ また寺院でコンピュータを導入するには、どのような仕 のめんどうを見てくれる業者を選ぶことが必要である。 りっぱなしではなく、 仕事の量を考慮し、導入に踏み切ったならばデ 寺の宝であり、 後々までプログラムの修正、 信仰の対象でもある 追 加

言である。高橋師の言うように家族構成、生年月日、勤その中に、檀信徒登録制へという章がある。現在帳の提然上人のおしえを生かす教化』という書物が出版された。てはどうであろうか。宗から一昨年、高橋良和師著『法が、実際布教の現場で使える生きている人の管理についが、実際布教の現場で使える生きている人の管理についが、実際布教の現場で使える生きている人の管理につい

す業者は外すべきである。

を踏まえるか否かが、選択のポイントになろう。子供会、各種サークル活動等の組織化、案内にと、コン子供会、を種サークル活動等の組織化、案内にと、コン務先、趣味等の項目があれば、寺を中心とした老人会、

使用OSについて

を、一六ビット機のコンピュータに移すことが出来なくし事をこなせ、処理速度の速い一六ビット機のコンピュータが主流になっている現在、せっかくたまったデータルすが主流になっている現在、せっかくたまったデータル 大は四、五年前に八ビット機のコンピュータを寺院用友人は四、五年前に八ビット機のコンピュータを寺院用友人は四、五年前に八ビット機のコンピュータを寺院用友人は四、五年のあるで割める。小生のある使用OSについては主流のものを勧める。小生のある

寺院ソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいからである。ムファイル形式がシーケンシャルファイル若しくはランダファイル形式がシーケンシャルファイル若しくはランダンァイル形式がシーケンシャルファイル若しくはランダンァイル形式がシーケンシャルファイル若しくはランダムファイルが望ましい。MS-DOS上で動くによりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりソフトの値段の傾向は、より使いやすいもの、優によりがある。

中心である。れれているもの程高い傾向にあり、二〇万円~六〇万円が

終わりに

ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するならば、亨受できる便利さだけではなく、ロを導入するなりには、

(神奈川教区・西念寺

その問題点も考慮するべきである。

脳死・臓器移植と生命選択の時代

研究員 佐藤雅彦

結論は出ている。

結帰一行三昧である。しかし、結論に至るまでのプロ

るのは、論者のみではないはずだ。微力ながら、かかる今、まさに求められている時機であることを実感してい現代における生命問題に対して宗教の側からの回答がセスが、どうしても不鮮明なのである

脳死の問題を避けて論ずることのできる腎臓移植に、臓見出さんと検討し続けてきた。昨年発表の拙稿にては、

問題に対して自身に納得のいく回答の、せめて糸口でも

リズムの中で、コンセンサスも造り得ない不鮮明なまま、義の的とはされないものの、医療者、宗教者、ジャーナ間に、社会問題の中で脳死の問題は、ひと頃のような論器移植の問題を絞り込んで愚考を試みた。それから一年

時を待っている感がある。

出し、若干の私見を挾み、生命問題の一端に対し、問題しての脳死・臓器移植問題へ取り組まんとする題材を抽しての脳で・臓器移植問題へ取り組まんとする題材を抽

 $\left(\cdot \right)$

意識を整理しようとするものである。

概略を説明する紙枚の余白はない。(2)この拙稿中に、「脳死・臓器移植とは何か」といった

器を摘出せんが為に、脳死の状態をもって人間の死とし携わる人々(日本移植学会等)によって、より新鮮な臓るべきである点を、見落してはならない。移植の現場にしかし、本来、脳死と臓器移植は、相別々に論じられ

同の生存することの規準を問う存 は、死生観か)の問題があり、臓 会主催の脳死シンポジウムなに、死とするのかという臨終観 東洋大学教授、金岡秀友ない脳死については、人間は、心臓 答えの出ることを認められ

井正雄の各先生の論旨に目を向けてみる。の問題に対して発言している、中野東禅、金岡秀友、藤の問題に対して発言している、中野東禅、金岡秀友、藤

といえよう。

研究の中心課題とされ発言されている。機関の指導者として、殊に現代の生命問題に対しては、機関の指導者として、殊に現代の生命問題に対しては、

なり、患者や家族が、純粋に、エゴでない意志で判断をして答えうる宗教の立場は、「精神のあり方」が問題とり、宗教的自我がどのような段階にあるかにより、様々り、宗教的自我がどのような段階にあるかにより、様々り、宗教的自我がどのような段階にあるかにより、様々り、宗教の自我がどのような段階にあるかにより、様々り、宗教の主体的立場が、患者や家族が、純粋に、エゴでない意志で判断をして答える。

答えの出ることを認められている。 (3)下したなら、全て、それは答えとなりうると、

多様性

0

積極的に発言している一人でもある。会主催の脳死シンポジウム等に、仏教者として参加し、東洋大学教授、金岡秀友先生は、東京大学PRC委員

いては、果して、自分は、供養を受けるのに価する

大正大学教授、藤井正雄先生は、いうまでもなく著名な正大正大学教授、藤井正雄先生は、いうまでもなく著名

は、 指摘されている。 師と仏教者という生命を尊重するという立場で同じグラ ると述べられ、 と宗教の関係というより、 てしまっ いう相乗作用によって、 植には何ら問題はない、 そのものに執着すべきではなく、 蘊は離散する運命にあるので、 ンドに立つ者が、協力し、一大啓蒙運動をする必要性を、 長年の 五蘊 た。 歴史の上で、 脳死にともなう臓器移植の問題 仮和 国民的コンセンサスを得るために 合である我々の身体は、 日本人に無意識の死生観を作 仏教の民俗化と民俗 と論じた。 文化の 仮りの存在体である身体 仏教の教義上、 面から、 しかし、 時期早尚であ 死によって 日本の仏 は、 の仏教 臓器移 は、医 日本人 化

理主義 受けるべきであると、 とを指摘し、 日 般 定が正確になされているのならば、 本印度学仏教学会の理事長、平川彰先生は、近代合 かのも が、 代の生命問 生と死とを分ける思想をつくってしまったこ 0 仏教は、 は出ないだろう。 題 述べられた。また、 あくまでも生死一如であり、脳 だい かく回答するというような仏 何故なら、 我々は、 仏教内部にし 玉城康四郎 それ

教

ところに永遠の生命が生まれる。

永遠の生命を誕

自分とい

う個 人的

な自

我我執をすっ 一度、

カン

りなくした

一の意

たということ、それが永遠の生命ということの本当

ても、 は極めて難しく時間 の問題に対してコンセンサスを得ようと思っても、それ から後期と、 初期仏教あり、部派仏教あり、大乗仏教にも初期 多種多様 のかかることであると述べられた。 な立場をもっているからで、

藤井先生は、

仏教の基本的思想である縁起から身体観

人の医学者と浄土門主・藤井実応貌下が、生命問題につ 葉大教授)奈倉道隆 より刊行された『生と死の最前線』には、 Sの会(Death・Education・Seminar,臨死問題研究会) (大阪府立大教授・宗侶) 水口公信 とい

過日、

浄土宗内若手僧侶達により発会されたD・E

れた、つまり自我を離れた、 の命というのは、そういうことではなく、 はそれで人生の尊さとして大切であるが、 れを大切にして、子孫に伝えていかねばならない、それ 述べ、「先祖から伝えられた肉体、生命であるから、 ればならないことを生死不二、色心不二の言葉をあげて を窺い知ることができる。貌下も、生と死は一つでなけ いて対談され、そこから、 若干、この問題について考え 天地宇宙の大生命 人間の命 しかし、本当 を離

体にとらわれていてはいけない。」というのが臓器移植 体というのは、 生させれば、 に対する基本的な考えであることを述べられている。 肉体は滅しても、生きつづけるわけで、 文字通りの抜け殻で、抜け殻としての 死

肉

り見出すことができない。 総じては仏教界全体のものとされるほど、 が強いことを知り得るだろう。 間に発表されたものばかりで、 以上、 取り挙げた諸 説 は、 何れも、 しかし、 いかに、 この一年半ほどの 時代からの要請 これらの発表が、 他には、

題 ければならないのは、 で、宗教的理想いかにあるべきか、論じなければならな み込んだものがないことだ。 観念論にとどまっていて、 れてはいない。また、今一つ欠落していることは、 解が中心で、脳死に関 そして残念ながら、 般が、 視点の 価値 医療というステージの上で実践されている現 はある。それと並行して、 内容的には、 脳死と臓器移植のみならず生命問 しては、 現場の状況、 無論、 あまり明確には、 観念論は観念論 臓器移植に対する見 実践論にまで踏 我々が学ば ふれ の場 ts

> 状を把握し、 実践論としうるのかという点である。 現代の生命問題に対する観念論 を いかに

に、生命を生かす点において、 着した処までいかずとも、 はれる。輸血に対しての献血が、これだけ社会の中で定 移植については、 する日本人の文化的なものがあるだろう。 なく、移植は肉体を傷つける点に、 らないのか。 しかして、何故今日、 起論をして、 こと臓器移植に限っていえば、多方、 輸血は液体、 肯定的な回答が得られつつあると思われる。 コンセンサ 輪血の問題は、 臓器は個体といった概念では 近未来の人工臓器普及ととも ンスは次第に変容すると思 コンセンサ 藤井正雄先生も指摘 議論にされるに至 五蘊仮和合の スも高まるだ しかし、

ろう。

論として位置づけられよう。 布教を考えるとき、現代における生命問題は、 きく枠を作りすぎているような気がする。 ナリズムにしても、「脳死論」という型で、 脳 死 の問題について、 仏教者のみならず、 また、 脳死、 きめ 臓器移植は、 あまりに大 一つの各 般ジャ の細 カン

ても、 生命問題の中の一項目として把えられよう。 死に臨む側と状況別に、分けて論ずる説が必要とされよ 的に脳死を把える側、 全体像としての「脳死論」を論ずるのには、 脳死患者を看取る側、 主観的に脳 脳死につ 客観

てきた一般的思考が相合されよう。 客観的に脳死を扱う場合、 これは、 これまで論じられ

く姿、

で佳しとすべきであろう。現在、ただ今、自分の死にゆ

50

たくないのが、尋常人だろう。たとえ、 をくり返し、肌にも温熱のある人間を、 生命維持装置という機械の力とはいえ、 脳死をもって、その人の死亡と決断できうるだろうか。 また、 脳死患者を家族や身内のものとして看取る場合、 未だ心臓は鼓動 脳死を宣告する 死亡とは、 認め

体死で 脳死を臨死者の死にゆく課程での部分死として把え、全 をもって判定してほしい」と言い残した場合は別にして、 明瞭なる意識のあった時に、「自分の死の決定は、 ある心臓死まで、静看するのが、思いやりであろ 脳

医師との間に信頼関係があったとしても、その本人が、

学ぼうというのでは

ts

人の生死観は変遷していくやもしれないが、 悟しながら生きなければならない。無論、 認識上で、生を考える者は必ず、 人の人がいれば、 百様の死に際があるのだから、 元気な内から、 年々歳 それはそれ 仏教 人、各 死を覚 0

題が、社会での関心事であるから、 が必要であろう。 くり返すようだが各論にすぎない。そして、今、 現代における生命問題を考える時、脳死と臓器移植 脳死・臓器移植についての判断を持ち続けること 流行、 風潮の如く、 この問 は

だ。選択とは、自己の機根を静視する内省から生じるこ 性を極め、「有力時」より、自身の生命についての選択 とを想い起こす時、現代、また近未来へ生命問題も多様 法然上人の浄土の教えは 予め判断しながら、生命を全うしなければならない 「選択」の上に立脚するもの

註(1) 2 「臓器提供の宗教的意義」・布教研究所報第三 生命問題に対する文献は、布教資料第一集『現代にお

時代がきていると思われる。

く仏教では、いつ、

誰が脳死に出会うとは判らない。百

自分自身が

主観的に脳死に向

か う場合、

生死

一如を説

(3) 「死の受容と存在論と宗教的自我の確立」一九八六・一ける生と死』(布教研究所編・一九八七年配布)に詳細

(4)「供養される心――臓器を受ける側の倫理と論理――」(4)「供養される心――臓器を受ける側の倫理と論理――」録

――」一九八五・九月二十六日「医療と宗教を考える会」(5)「仏教と日本人と死生観――臓器移植とのかかわり方録

(7) 『生と死の最前線』(文化書院刊) 百三十五頁参照

(6) 平川・玉城両先生ともに、仏教思想学会・一九八六・

十月十八日の発表に依る。

争上宗纹昭和六十一年度

浄土宗教学布教大会意見発表

上人のご事蹟をあおいで

布教師はこれでいいのか

発 表 者〉

教 学 院 代 表 短期大学教授上 野 学 園 松

濤

弘

道

布教師会北海道支部代表 東 北支部代表 青 北海道第二教区 森 教

石

区

鈴

木

Ш

昭

三

寬 俍

信 孝

雄

会

11

近

畿支部代表

奈

良

教

区

西

岡

"

東

海支部代表

伊

賀

教

区

角

出

誠

堂

11

合司 者〉

布 教 師 会 北 陸

潟 教 区 風

支 部

新

間 文

て、 布教師がこれからどうしたらいいのかということについ か、これから考えていくというお話しがございましたが、 いいのか」と、良くないからこれからどうしたらいいの ただいまご紹介になりましたように、「布教師はこれで 意見として発表させていただきたいと思っております。 教学院を代表する人物かどうかは判りません。 見発表をさせていただくわけでございますが、 今回は教学院を代表してということで、これから意 お話しを申し上げるよりも、 私自身がどうしたらよ 私自身、 私個人の

松濤

ただいまご紹

介にあずかりました松濤でございま

話しをさせていただいております。 は浄土宗アワーではございませんけれども、 お聞きになってるかもしれませんが、NHKのFM放送 書を発表させていただき、また関東地方の皆さんは多分 と同時に皆さんご存じかもしれませんが、いくつかの著 お かつ上野学園短期大学の方で教職に就いております。 私自身栃木県の近竜寺という寺で住職をしており、な 毎週第一月曜日に十分間ほど時間を頂戴して、 般的なお これ

申し上げたいと思います。

いのか、これで良いのかということについて、お話しを

ました。その時にフルナの譬えも申されまして、 でございましたが、 教に参ります時、――その時はまだまだ二十数歳の小僧 確か昭和三十五年頃だったと思いますが、 り、これからやるべきことをたくさん山積しております。 さんのお智恵を拝借してご指導いただかなければならな ました椎尾弁匡先生から、 い私でございますが、私なりにいろいろ考えることがあ 職をするということは、まだまだ新米でございます。皆 留守にしておりました。ですから日本に戻って寺院の住 の方に四年ほど留学しておりまして、日本を十 の方へ開教師として赴任しており、 ナは、 私は日本で寺の住職をする前に、 お釈迦様のお弟子で、 ――当時の増上寺のご法主でござい いろいろなご忠告をいただき 外国に布教するに またアメリカの 約七年間、 アメリカへ布 一年 アメリ あたっ ほど

うエピソードでございます。その時私は何と答えたか、</br> 外伝道にいってもよろしいとお釈迦様から言われたとい ていろいろな困難があるけれども、 でもやるだけの勇気があるのかどうかと、もしそれだけ どんなことがあっても、 また覚悟があるのならば、それならば海 殴られても、 石にしがみつい 或いは

叩かれても、

ル

の勇気があり、



松濤弘道上人

記憶にさだかではございませんが、いずれにしても海外

、ます。

の方面に渡っているといった方がいいのかもしれません。 がございまして、 多かったというのが実感でございます。 或いは教えを広めたものよりも、むしろ学んできた方が 功するどころか失敗だらけといいますか、私の教えた、 に行って参りました。今それを振り返ってみますと、成 かしそれを機縁として、またいろいろと考えること 私が現在やっておりますことは、三つ

> くて、 しをして下さいました。いかに伝道布教ということが難 家にお手伝いに来ていた尼さんだったと、そういうお話 先生がおられました。この方は非常に仏教にも造詣が深 しいことか。私は嫌というほど感じ取ったしだいでござ ることができたと。それは誰だったかというと、 宗者を見なかったと。七年目にやっと一人の改宗者をみ アメリカの宣教師が初めて中国へ宣教に出向いた時に、 こういうお話しをして下さいました。それというのは、 しまなかった先生でございます。ある時この先生が私に 授でありました、 丁度私がアメリカにおりました時に、私の大学の主任教 一年経っても、 一緒に座禅をしたり、 三年経っても、 宗教学のヒューストン・スミスという 仏教界の活動にも協力を惜 四年経っても、

P 同じようなことが言えるのではないかと思いますけれど くんですね。 ある時私は、今までの――今とは申しませんけれども、 これは開教ではなくて追教なんだと、人を追ってい 海外における開教事業についても、これは国内でも 広めるのではなく、 人がすでに得たものを

アフター・ケアーと申しますか、それが精一杯であると

どもいたしており、或いは一般の布教もさせていただい ておりますけれども、はたしてどのくらいの効果があっ ります。他の方はどうか知りません。 認識が足りないと思います。 とは、立ち遅れといいますか、 といいますか、別にその華やかな面を追ってほしいとい たものなのか、私自身にもよく分かりません。 教えを伝えているのかどうか、非常に反省させられてお おりますが、 を這うようにしてですね、いろいろな方に私は出会って らわけではございません。 さっておられると思いますけれども、 にこの浄土宗のご関係の皆様方は、いろいろと努力をな 態はどうなのか。国内においても、 はたして私自身がこういう人々に これは第一線に立って、 海外に 今刑 何かパッとしない 務所の教誨 おいても、 しかし 特

何に では人民政 はいいませんけれども、下火になっております。 生懸命やるつもりでおります。 難しかったかということに少し触れましたが、 キリスト教の中国における開教 府の下で宗教的な活動が、 私が非常に残念に思いますこ 現状の把握といいますか ある程度、 • 宣 教の歴史が如 対して、 しか 弾圧と 現在 地 15

> く』という小説を出 子さんが、 あります。 それ以外の国々へ参りますと、 例えば、先年亡くなられた小説家の有吉佐 朝日新聞社から『女ふたりニュー しておられます。この小 宗教活動が非常に盛んで 説 ギニヤに行 がは、 有

いうのが実感でございました。今私達が置

かれている状

動をするということだけではなく、自分自身が医者 てやってきて布教に従事していると。それも単に宗教活 1 ギニャの原住民がいるようなところにも、 それを記録したものなんです。 教の宣教師が、 自分で飛行機を買って、 山奥の、 1, それを操 単身でキリス わゆるニ の資

りで行った探検記といいますか、冒険旅行といいますか、 れも普通の人が旅行に行かないようなところへ、女ふた 佐和子さんがお友達と一緒にニューギニヤの奥地

キリスト教の関係者であります。 んでいる方々、そういら人達への救援活動は、 カなどでも、 有吉佐和子さんがはっきりと書いておられます。 いろいろな難民、 あるいはまた飢餓に苦し 殆んどが アフリ

格を持って、病人への医療奉仕をしているということを、

どうか。 海外にまでいろいろな物を融資して、円高 体私達仏教界の人達はそういうことをしているの 日 本 は非常に経済的に恵まれて、 お ・ドル安の時 金が 余って

体を、私はあまり聞いておりません。非常に残念なこと ころが既成宗団でそういうことを積極的に進めていると まり数多くありません。その数多くない団体のなかで、 或いは布教活動を熱心にやっている団体というのは、 りません。ましてや宗教関係で、そのような救援活動 に進出しているという話しを、私は寡聞にして聞いてお が、奉仕活動といいますか、そういうようなことで海外 代でございます。それにもかかわらずということです。 おやりになっている方を私は知っております。ところが ころは、 か、天理教、生長の家、或いは立正佼成会などです。と 一つのまとまった組織体として活動をしているという団 番顕著なのは新興宗教であります。創価学会であると かに経済界では高い利息でお金は貸すかもしれません 私は寡聞にして聞いておりません。個人的には あ

> ずさせられるわけでございます。 そういうものに区区していやしまいかという反省を絶え らか。

> ただ自分達の身の回りの生活、

> 或いは寺院の護持、 れだけの熱意といいますか、そういう気迫があるのかど ざるを得ないと思います。 いう点で、私達既成宗団は非常にたち遅れていると言わ うことにかかっているのではないかと思うのです。 体的な面でも、いかにそういうサービスができるかとい 神的な面だけではなくて、経済的な面、 或いは個々人でも果たしてそ 或いはもっと具

くちばしでもう中の準備が整いましたと卵の内側 います。卵から雛が孵る時に、赤ちゃんである卵の雛が、 摂するという意味の禅語に その第七則に、鳥の親鳥が、孵化前の卵と一緒に機微に つきますと、それを咄嗟に親鳥が卵の外側から感じとっ 「啐啄同時」というのがござ からつ

を破ってやりませんと、赤ちゃんの雛鳥は死産をする。 側から一生懸命に叩こうとする、ところが親鳥がその殻 をするんだそうです。その時間がずれますと、 同時に行われた時に初めて、赤ちゃんである雛鳥が安産 て、その殻を割ってあげるんだそうであります。 雛鳥が内 それが

そしてまたそれに迎合することなく、そういう人達を引

安心立命を与える。そこに布教の究極の

極めて、そしてこの人心をつかむというか、その機微、

私達の布教活動というのは、

現状というものをよく見

目的があるのではないかと思います。それはもちろん精

禅の書物に

ないわけであります。つまり親鳥と雛鳥の嘴と嘴が、卵 てしまいますと雛鳥は早産をする。これはどちらもいけ また親鳥が早まって、 の外側と内側とから同時に殼を破ってこそ立派に卵が割 卵の中が整わないのに、 殻を破

2

れて雛鳥が誕生するわけですが、これを布教に譬えます 能化である私達が、いかに一般衆生の方々の受容と

実績が上がるのではないかと考えるわけであります。 できているかどうか、この両方があいまってこそ布教 いいますか、ニーズといいますか、そういうものを把 2 握 0

ころがどうもそのズレというものが、いくら私達が一生

その実績が上がらな 般大衆の人は、 非常にいろいろな問題を抱えている。

織の面でも、

或いはその他の面でもですね。この現状

懸命やっていても、

糠に釘といったような感じでですね、

社会においてもですね。 あるのかということが、 が本当に信ずるに足る宗教であり、信条であり、 家庭においても、職場においても、或いはもっと大きな ろいろな価値観が錯綜し多様化しております。一体どれ 絶対的にこれがすべてであると主張する宗教は、 よく判らないでいる。今はどの 日本の地域社会においても、 思想で

殆んど有りえない。かつてはありました。それぞれの宗

が絶対的なものであり、他の宗教は邪教であり、それら 教者が、 宗教協力というようなことも今始まっております。 ものではなく、 べての宗教に限界があり、そしてそれは決して絶対的な 期がございましたが、現在は協調の時代であり、またす を排撃しなければならない。そういうことを主張した時 自分達の属する宗教が世界で一番よくて、それ 有限的なものであるというようなことで、

果たして私達がそういうニーズに応じられる体勢ができ ているのかどうか、それは教学の面でも、或いはまた組

フィットしたものであるのか、選択の時代にあたって、 そういう時代にあって、一体どれが正しくて、

自分に

ければいけませんし、また資料にしましても、 るのかどうかと。もっともっといろいろな教えを頂かな 自身のことを省みましても、果たして実績が上がってい よく見てみますと、非常に貧弱と言わざるを得ない。私 或いは人

思います。にもかかわらずそらいら物がなかなか得られ 材の面にしましても、 う少しこれが組織的にできないものだろうかと。 で孤軍奮闘といいますか、やらざるを得ないと。 本当に必要な物が沢山あるように

ない

です。 ます。それでは一体生活に不安はないのかと言いますと、 おりますが、依然として伝統的なしきたりを守っており どうかというふうな運動が、アメリカあたりで行われ ですね。最近はいくらか既婚の神父を認めた方がいいか 仕なんです。また神父さんや修道女さんたちは独身なん ですから私有財産は殆んどないわけなんです。すべて奉 しまうんです。そしてそこから俸給をいただくんです。 きないんですね。これは一旦教団の方へ全部差し上げて 得た収入というものを全く使用しておりません。使用で うに違うのかと言いますと、カトリックを例にあげます 或いはプロ 私の友人にもカトリックの神父さんが沢山おりますし、 と、神父さんたち、或いは修道女さんたちは、自分達の きかたが非常に違うということであります。どういうふ えさせられることは、仏教教団内の寺院の生活者と、 ます。そういう方々に日々接触いたしまして、 応老後の生活は保証されていて、不安はないわけなん もちろん贅沢はできませんが、食べるのには困ら テスタント、 或いは修道女の方も沢山おられ 非常に 生

なっているのではないかと思うわけでございます。なっているのではないかと思うわけでございます。その恵まれていると考えざるを得ないわけであります。その恵まれていると考えざるを得ないわけであります。その恵まれていると考えざるを得ないわけであります。その恵まれていると考えざるを得ないわけであります。その恵まれていると考えざるを得ないわけであります。それだけの覚悟があるかどうか、ということを考えました時に、私籍でして現在の既成宗団の寺院生活者の私達に、それはたして現在の既成宗団の寺院生活者の私達に、それはたして現在の既成宗団の寺院生活者の私達に、それはたしているのではないかと思うわけでございます。

その点で参考になりますのがカトリックでございます。

個性にあったといいますか、三つの異なった面でそれぞ同性にあったといいますが、「三上人のご事蹟をあおいで」とされたというようなご事蹟があると。そしてまた源智上されたというようなご事蹟があると。そしてまた源智上されたというようなご事蹟があると。そしてまた源智上されたというようなご事蹟があると。そしてまた源智上されたというようなご事蹟があると。そしてまた源智上されたというようなご書話があると。それに関連して一言申させいうとして寺院の護持に力を尽くされたと。それぞれの中心として寺院の護持に力を尽くされたと。それぞれの中心として寺院の護持に力を尽くされたと。それぞれの中心として寺院の護持に力を尽くされたと。それぞれの世代あったといいますが、三つの異なった面でそれぞ

ないわけです。

れ三上人が力を尽くされたというわけです。

それを一身に受けて――これは荷が重すぎるかもしれま きましては、いくつかの著書がございますので、それを し訳ございませんですけれども、 いるしだいでございます。本当に意を尽くせませんで申 まして、充実した寺院の護持発展ができるようにやって いうことだけではなくして、もう少し内部を改革いたし はり自分の寺をまず護るということですが、ただ護ると そういうものを自分も伸ばしていきたいという考えも持 俗学の方面で少しづついろいろな資料を集めております。 の探究といいますか、これは私の専門であります宗教民 ます。それから良忠上人のご事蹟に対しましては、 宗の教えというものを広めたいという考えを持っており は放送を通じて、私の生きかたということを通して浄土 して、幅広く一般の方々に、これは文章を通じて、或い 聖光上人につきましては、布教という在りかたに対しま せんし、また欲張りかもしれませんが、そういう面で、 は学問の探究ということ、そして寺院の護持ということ この三つの生きかた、一つには布教ということ、 っております。それから寺院の護持につきましては そしてこれは欲張った話かもしれませんが、 これ以外の私の話につ 私なりに 一つに 学問 B

静聴ありがとうございました。通してお読みいただければ幸いでございます。どうもご

石山 方の北海道の開教の状況について、ここでお聞きとり願 す。開教のことについてお話しがございましたが、 話し下さいまして、誠に感激をしておるものでござい おりましたことを、 ますことをお許しいただきたいと思います。 分が反省したような身近な面で、 という題でございますが、私は「これでいいのか」と自 不徳な田舎者でございます。「布教師はこれでいいのか」 申します。誠に申し訳ないのですが、私はいたって浅学 ただいまご紹介いただきました、北海道の石 ただいま松濤先生が高邁な表現でお お話しさせていただき 私が思って 私 山と

かされるのでございます。私の住んでいる所は、北海道でおりますが、初めて行った所の気候・風土の違いに驚大きな違いがございます。私は、北海道に生まれて住んす。そして地域によりまして、気候・風土もそれなりにたよりも、或いは東北六県よりもまだ広い所でございまれ海道という所は、ご承知の通り、九州・四国を併せ

いたいと思います。

きょうれんにと励んだのでございます。 てその開拓の業に疲れきったなか、北辺警備のため軍事 道を人々は切り開き進んでいったのでございます。そし となく、文字通り血涙振り絞るといいますか、いばらの め滴り落ちる汗を拭いつつ、極寒零下の寒さに屈するこ 裏日本の人が、移住をして来ております。 々 備という両面をもって、主に九州から愛知県にいたる方 います。屯田兵として、未開の地の開拓と北辺の地の警 歴史がまだ浅そうございまして、開拓以来九十年でござ ゆる大陸性気候の典型的な土地でございます。私の所は ス三〇度以上にわたる、極めて寒暖の差が激しい、 近い所でございます。気温はマイナス三〇度から、 のいわゆるド真中でございまして、 が、初めて入植いたしました。その後、 大雪山 大地開墾のた 東北、 麓 此の旭川 或いは プラ 市に

入り温度が下がってまいりますと、布団から抜け出て、たお坊さんの姿は、正に三上人の勇猛精進の面影を写すたお坊さんの姿は、正に三上人の勇猛精進の面影を写すたお坊さんの姿は、正に三上人の勇猛精進の面影を写すたお坊さんの姿は、正に三上人の勇猛精進の面影を写すたお方との人々にお念仏のみ教えを説き、法の燈を現じ続け

の為にと、僧侶一人のみならず、開教僧の家族合わせてり、或いは青年子女の教育に心を注いで、文化向上発展回ったり、道路・灌漑湖などの整備に東奔西走してみた霜が降りるから用心をしなさいと、鐘を叩いて知らせて

貢献したのでございます。

内陸地帯は本宗寺院が少のうございます。よその

お坊

郁として今に香っております。一方、北海道の人口、函でもございました。今にしてその開教僧の尊い香りは馥さんの力を借りることができません。一人の孤独な闘い

館にまいりますと、二百年・三百年以上に及ぶ歴史を持

にまいりますと、比較的本宗寺院が多ございます。それのでございます。この道南地方〔函館〕或いは海岸地域広大な所のために、内陸まで到達することは難しかったお寺を建てて布教を始めたのでございますが、あまりにった古刹がございます。増上寺は北辺開教のため、港にった古刹がございます。増上寺は北辺開教のため、港に

から移住してきた方が多いためでございます。また多くいます。それは、農村地帯に親鸞上人の越中・富山方面います。それは、農村地帯に親鸞上人の越中・富山方面漁業関係の仕事に従事して、定着したためでございます。

は、いわゆる金光上人の津軽地帯の人々が海を渡って、

達の教化力の大きかったかを物語るのでございます。今り大きなウエイトを占めているのでございます。り大きなウエイトを占めているのでございます。とのことは、浄土宗宗勢状況と照らし合わせると、今とのことは、浄土宗宗勢状況と照らし合わせると、今とのないのででは、出身地の別がかなて、土地の禅寺に帰属するためでございます。このよう

宗寺院が多ございます。それは数多くの分派をのり越えの市町村にありましては、一、二を争う大坊は、まず禅



石山昭三上人

るお念仏の教化はいき届いていないのでございます。そき人の追善供養に終始している私を見出し、現実に生きで自分を振り返ってみますと、先祖のお守役的存在、亡地に、いろいろな新興宗教が伸びてきております。翻っ地に、いろいろな新興宗教が伸びてきております。翻っや目をみはるばかりに、新興宗教がつぎからつぎへと教や目をみはるばかりに、新興宗教がつぎからつぎへと教

年回供養・お通夜のお説教でさえ、なおざりにしている人がたまたま見られるのでございます。北海道は通夜説表ということが、必ず行われておりますけれども、海をまたこの佛教大学の開かれた四条センターなどの関係機またこの佛教大学の開かれた四条センターなどの関係機またこの佛教大学の開かれた四条センターなどの関係機またことは、誠に有り難いことでございますけれども、まざまだ新興宗教と比べて、道ほど遠しでございます。まだまだ新興宗教と比べて、道ほど遠しでございます。れておりましょうか。若人にとってどれだけ魅力がありれておりましょうか。若人にとってどれだけ魅力がありましょうか。

手が回らないからとなおざりになっているのであります。れのみか、寺の法座は少なく、例えば盆の棚行さえも、

話も頂 喜んでおるのでございます。 す。今年七月、私の街の近隣四町の民生委員の方が、沖 ず教化者としての自覚に目覚めることが大事でございま ばれておりますが、三上人のご遠忌を機縁として、我 がっているのでございます。 あったのでございます。月並なことでございますけれど にお坊さんがいたのでご回向してもらい、感激の坩堝で 施設に仏を発見し、なお本堂にお参りして、 で本山参りから帰ってきたような、手を合わせて本当に て、皆さんがお話しされるのを聞いておりますと、 を私がご推薦いたしました。その研修旅行から帰ってき 繩へ研修旅行に出 下照 お話しだけが布教ではないと思います。 戴し、 続いて島内戦跡巡りでは、民生委員のなか 開 教の場は、 かけました。 この内地にもごろごろところ 諸般いきとどいた袋忠奄 宗侶は皆布教師であると叫 視察固所として、袋忠奄 有り難 まる

喜んだのでございます。

ますと、 輪番でご奉仕をしております。 特別養護老人ホ 近な話しで恐縮でありますけれども、昨年私の街に ·精神講話、 衰弱したお年寄りでもあるので、 ームができました。月に一度、 或いは現在の歌などでは理解できない。 施設の側のお話 落語 仏教 しにより 漫才・ 会が

> ございます。そして若い一人の指導員が私に言いますの ですね。こう言ってくれましたんで、我が意を得たりと には、お念仏は誰でも称えることができるから有り難い い。お坊さんのお話しが一番いいんだ。こういうことで に浸ったところで、有り難いお話しを手短に だ、これが一番喜ばれている。そして手を合わせて法悦 お坊さんのお経にお会いして、 すぐ飽きてしまう。今お蔭様で一番喜ばれていることは、 お参りしていることなん お願いした

仏となって顕れ給うたことでございます。また高祖大師 高祖大師にして初めて見られるお念仏の御声が、 れた聖光上人の教化姿勢を案じます時、三昧発得の聖 興隆に邁進された事を拝し、しきりに高祖大師に傾けら 元祖大師に八年間直参した聖光上人の、 尊 い正法護 みな化

あります。 に帰依する群衆の多かった事が、 かくや有るらん、 らしい奇麗なお声であったことでありましょう。極楽は える教化姿勢に現れていることを尊く注目するもの もとより身口意清浄にして、五種正行は布教 あら有り難や、合掌法悦に浸り、 聖光上人の芸術的とも

の礼讃、

いろいろなお経、その透徹された、そして素晴

11

の要態であることを、改めて学ばせていただくものであ

は、 私は丁度寺の二代目、三代目に相当するわけでございま 基礎盤石の重きに確立された、その良忠上人を思う時、 ます。そして幾多の俊秀をお育てになり、三祖として、 1 して、まことにその任重きことに恐れ戦く心境でござい の山奥からここまで出てまいりますのに、寺からマイカ まさに超人的ご所業でありました。今日私、 器の水を一瓶に移すがごとく相承された良忠上人 新幹線·飛行機、 瞬く間に京都へ到着するのであり 北海道

見る時、 ございます。その名声を慕って門戸を叩き、 報恩顕彰に第二代としてご一生を全うされたのでござい くる感が深こうございます。隠遁を好み自行を基とされ 表現で言えば、主人と使用人というような間柄に移って りが許されるのであります。しかし自分を今振り返って 血 た源智上人は、元祖に常随給仕すること十八年、 の滲む修行をして、功成り、名遂げたその道の達人で 師匠と弟子というよりも、 親と子、成いは悪い 漸く弟子入 祖師

この通りごつごつとして可愛い手ではありません。

しこの手は本当に有り難いのです。

今日の私を造ってく

しか

れたのです。支えてくれたのです。合掌して本当に満ち

ります。布教師は、 統の上にあぐらを組み、金襴を装って方丈の奥深く、 された聖者のごとき錯覚にお陥りがちでございます。 ことが見い出されるのでございます。あたかも写瓶相承 らを尊しとし、無我を説く立場にありながら、 ます。このお姿を拝し、自分を振り返って見ますと、自 のみであります。 い褥に坐し、法蔵にあっては高座にあり、安住の居であ こちらへまいります時、私は一人のお婆さんに 私はこれでいいのか。ただ懺悔する 我の強 お会い

ります。この方とお話ししておりますと、仏縁あって浄 してその方はとても人の面倒見のいい、心温 こられたような苦労人には見えないのでございます。そ してきました。その方は若々しくて人生の辛酸をなめて かい方であ

ます。

般社会に

おける、

例えば芸事のお師匠さんは、

多年

足りた美しい顔を見せてくれました。

引き替え多くの私共は、なんと怠け者であるかと、改め引き替え多くの私共は、なんと怠け者であるかと、改めれらのように、生きた教化に勇猛精進しておられる布教れらのように、生きた教化に勇猛精進しておられる布教者は、全国各地に現在しておられると思います。現実にこれらのように、生きた教化に勇猛精進しておられる布教者は、全国各地に現在しておられると思います。

て反省をするのであります。

母が拝めば子も拝む、拝む姿の美しさ、こういう標語のようなことをお願いするものでございます。まことこのようなことをお願いするものでございます。まことこのようなことをお願いするものでございます。まことこのようなことをお願いするものでございます。まことに具体性に欠けた拙い話しをご静聴いただきまして、誠に有り難うございました。

鈴木 ただいまご紹介にあずかりました鈴木寛俍でございます。本来この発表は、同じ青森教区の金光上人の研います。本来この発表は、同じ青森教区の金光上人の研究では第一人者と言われておりましたが、よんどころない理由で出席ができなくなりましたので、替わりに言って喋由で出席ができなくなりましたので、替わりに言って喋由で出席ができなくなりました。 突然の変更で、しっていということでまいりました鈴木寛俍でござかも金光上人に関しては全くの門外漢でございます。一

いうことで恥をも省みず登壇したということですので、方に、むしろご研究していただきたいと思います。そうさらに若干の参考の文献も拾って書いてみたのですが、さらに若干の参考の文献も拾って書いてみたのですが、

けれども、まず金光上人のご出生からお話し申し上げたその部会に参加しておられた方々は、だぶると思います教大学の高橋良和先生もご発表していただきましたので、まず金光上人のことについてでございますが、昨日佛

お許しいただきたいと思います。

藤上人の『殉教の聖者金光上人』と、開 米 智鎧 上人 の思うように任せません。ただこの年表に書いたのは、佐生懸命に年表などを作ってみたりしたのですが、やはり

これは実は、 間にお生まれになって、幼名を白竜丸と申しております。 長安寺国平安値お母さんは平小路良子、このおふたりの 丸であったので、 の一月一日というふうにいわれております。 いと思います。金光上人の誕生は久寿二年(一一五五) へ渡る船を管理しておりまして、その船の名前が、 父の長安寺が遣唐船というのですか、 この幼名を付けたのではないかとの説 お父さんが 白竜 中国

が 月の十五日のようです。また父の長安寺国平も、 て亡くなるというふうに記事に出ております。これが三 も、この敗戦にショックを受けたのでしょうか、 まいます。その時に、産後の肥立ちの悪化しておりまし 方が有利になりまして、実父の長安寺側が大敗をしてし なったわけでございます。この た母良子が、六十日の病床についていたわけですけれど う城主と筑後川を挾んで対峙しておりまして、戦争に らその場を逃れて、 金光上人が生まれた頃ですが、 日向の高千穂まで逃げ延びてまい 闘いは少数の方の当路 隣国の城主当路及麿と 命から 自決し

この白竜丸はどうなったかといいますと、

その時、

家

しようと立ち寄りましたなら、 丁度石垣の観音寺の近くを通りましたので、ここで一泊 と乳をもらいながら、彷徨うわけでございます。ある日、 抱えて育てていくのは大変でございます。あっちこっち 太刀と書いてありますが 臣の関重太夫という人に、この白竜丸と、 わけです。この関重太夫も男ですので、小さな乳吞子を ――とを預けて、そして逃げた 丁度その時、 脇差し――陣 敵の当路及

の根方にそっと寝かして、当路の首を取ろうということ 度その日が満願の日だったのです。関重太夫にしてみる 妻には子供がなかったので、子供ほしさに願をかけて丁 は何のためにお参りしていたのかといいますと、この夫 これは有り難いチャンスだというので、 白竜丸を松

麿が、夫妻でこの観音寺へお参りしていたのです。これ

とで、刀の柄に手をかけた時に、折悪く急に雨が降り出 で忍び込んでいく。警護の人達の気がつかないうちにだ ために関重太夫は当路を討つこともできないで、ただ木 しまい、 た白竜丸が、 したわけであります。そのために松の根に寝かしてお んだんと近づいてまいりまして、さぁいよいよというこ あたりが騒然となってしまったわけです。その 雨のためにびっくりして大声で泣きだして

鈴木寛俍上人

がくしき因縁でございます。後に本当の父である長安寺だ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。これだ生まれて三ヶ月ほどの可愛い子供でございます。とし、名前を現着力ということになってしまっ立のなかに隠れて様子を見るということになってしまっ立のなかに隠れて様子を見るということになってしまっ

が、

昨日の高橋先生のご研究では、

安楽房はどうも鎌倉

決を待っている間に、安楽房にあったとなっておりますそして鎌倉へまいります。そして鎌倉で直訴してその判

というご発表もお聞きしておりますので、その辺は皆さへいった覚えがないので、恐らく別な安楽であったろう

みたいと思います。というような経緯もあったようでありますが、それにつというような経緯もあったようでありますが、それにつというような経緯もあったようでありますが、それにつというような経緯もあったようでありますが、それにつ

その時にこの現若丸が、

自分の実際の父を陣太刀で殺す

が勢力を盛り返して、また当路と戦争をするわけですが、

建久六年(一一九五)のころに、三月まで長谷に宿し、 連弁に誘われて浄土大要を安楽に聞き、五月源空に入門 す。それから建久七年のころに、秩父の禅門道弁の案内 により、安楽房の教化を受く。或いは石川禅門道弁に誘 われて、浄土の元祖法然上人の教化を受く。また弟子金 光房と書して、宗祖に呈す。というふうに出ております。 実は金光上人はその後で、石垣山観音寺の住職として寺 にを経営するわけですが、土地の争いの問題が出来て、

年説でございますが、宗祖と弟子の契約をなすったとい 系譜』等々もございますので、一応私としては建久七年 りませんが、『決答授手印疑問鈔』の上とか『浄土伝燈総 うふうに出ておりますので、どちらが正しいのかよく判 んのご判断にお任せしたいと思います。それから建久九

四十二歳の時というふうに考えたいと思います。

うのです。石井教道先生は承元元年説をとりたいという この頃に上人方が全国に散らばったんではないかとも思 睨まれたのでは、もう抵抗のしようもないので、恐らく この頃の幕府というと、源頼朝が亡くなって北条氏にな 想像ですが、浄土宗大年表によると、正治二年に幕府が の説が最も信憑に足るかということですが、これも私の 歳の時という説、 う説、それからそのつぎの正治二年(一二○○)四十六 ふうにも発表されております。

これも確かに大事なこと って間もなくだと思うのですが、何分にもこの幕府から 念仏宗を禁止しているというふうに出ているわけです。 になりますが、正治元年(一一九九)四十五歳の時とい それから続いて金光上人が奥州に下向するということ また建仁元年説もあるわけですが、ど

だと思います。

金光上人が奥州に下向してから、方々で寺院を創建し

によって問うべきや。」それに対して、「上人答えて曰く、 るの時奉りて曰く、ご往生の後、浄土の法門の不審、 の上に、「昔、鎮西法師、世に語りて曰く、上人世にあ までに、なるべく年月を多く取りたいという考え方を持 っているわけです。というのは、『決答授手印疑問鈔』 金光上人が法然門下に入って、そして奥州へ下向する

聖光房、金光房、ことごとく余の所存を知る。彼等遠国

の能化となる。汝らのためにやすからず。京には聖覚法

然上人が真から金光上人のことをご理解していただける みると、金光上人の人柄はまた別といたしましても、法 印もまた我が義を知る。云々」と言っているところから ためには、二年や三年ではいけないような気がするわけ

後ろの方が短くなってしまいまして、金光上人が奥州を ち着ければという気もするのですが、そうなると今度は 説よりは、むしろ石井教道先生の承元元年説あたりに落 ということに少し不安を感じてくるわけでございます。 くまなく巡錫して歩いて、いろんな寺院を創建している かと自分では考えているわけです。従いまして正治二年 です。なるべく長い年月を経過したほうが本当じゃない

の広隆寺、 外に繩をくっつけたぐらいのものなのかも知れませんけ 造ったとかいっているようなものもあるような気がする ておりますが、 ております。それらの詳しいことについては、後の研究 丘一庵というふうに、 の摂取院、 の僧堂とあります。秋田県土崎に金光寺、 一字と、 土崎観音堂、それから行岳の極楽寺、 宮城県栗原の往生寺、 それから青森県に入って、行丘の西光院、 立派なものも沢山あるわけです。 それからまた、 法輪丘の西光寺、 盛岡の大泉寺、 これ はただ後世、金光上人が開基だとか、 今読み上げたのが一八ヶ寺になっ 草庵といって、恐らく三本柱で 水沢の真城寺、 飯詰の大泉寺、 岩手県遠野の善明寺、 会津若松の光 山本郡に仏刹 土崎浜に一字 西明寺阿弥陀 それから行 藤崎 花巻

けなかったと。そして旧暦の三月――現在ですと四月にの能代から深浦へ出ようとしましたら、風波が荒れて行まなく踏破しているようであります。そのなかに秋田県秋田県へまいりまして、そして津軽へと、一円ずっとくかったのですが、福島県、それから宮城県、岩手県からかったのですが、福島県、それから宮城県、岩手県からかったのですが、福島県、それから宮城県、岩手県からかったと。

を待ちたいと思います。

教化に奔走したわけでございます。 教化に奔走したわけでございます。 教化に奔走したわけでございます。それを乗り越えて奥州一円の いまして、今の四月になっても踏破できないところも いまして、今の四月になっても踏破できないところも いまして、その当時は陸路を歩くことができなくて、 になるわけですが――津軽へ出ようとしたら、雪が深くて

の教えは、思うようにならず、一代(しんつう)す、云なかなか金光の説法に応ぜず」とか、また同帳に「金光『寛永聞き取り帳』には、「荒吐神を崇拝する地の民は、

特に金光上人の津軽における活動についてみますと、

宿を借りたり、或いは法論を闘わせたりしているのが、

測しております。 う基礎があったからこそ、

法論できたのではないかと推 よく本に出てくるのです。 これも恐らく同じ修験宗とい

族というのは、非常に大きな力をもっておりまして、そ うなかに出ておるわけですが、いずれにしてもこの荒吐 して金光上人に対して、最初から終わりまで邪魔をする されてしまっております。それが『津軽外三郡史』とい われております。これは日本の歴史のなかから全く抹消 れが京都まで攻め上って朝廷を脅かし、そして歴代天皇 して、後でいうあんとう一族の元になるわけですが、そ がいたようでございます。この種族が非常に力をもちま できたのが、荒吐族という、まことに強靱で獰猛な種 心として、中央から逃れていった大和民族、それに中国 津軽の方に最初から住んでいた種族、それに長髄彦を中になった。 のなかに一人とか二人とか存在したなどということも言 から渡来してきた種族、この四つの種族が一緒になって でございます。これは、 ただここで大きな問題は、 あそべ族、つぼけ族といって、 荒吐族というのがいるわけ 族

> ります。 て、やっと一命をとりとめるというようなことも出てお ので追いかけられる。それで検非違使のところまで逃げ のと荒吐族ではみているので、神聖な水を汚したという を洗ったというのですが、そうすると川

の水は神聖なも

うのですから、 ても、今までの修験宗を浄土宗に転向させたという記事 名前が逆になっているようでございますが、 ととなり、九品山三宝院と名称を改める。これはどうも 直ちに再び正中山に登り法論を戦わす。ついに梵場寺住 なお入獄したのは建保元年五月から同二年四月までとい るというようなことを経験しているようでございます。 ても、この荒吐族との闘争で何回も牢獄に閉じ込められ これらは物語かもしれませんが、 法蓮坊軈ては正中山梵場寺をして浄土に導入するこ 約一年間入っております。そして出獄後 いずれにいたしまし いずれにし

あほう歌を作りて上人を嘲る。」それから「上人の流血 法す、しかるに世人はこれを軽笑し、一人も信ずる者無 だというふうに私は拝見しているわけです。 し。」それから古文書には、「この年 さらに『金剛坊文書』のなかには、「吐血 (建保四年) 村民 しながら説

たのでは、金光上人が熊と戦って疲れた時に川の水で顔

わけです。そして毒矢を吹きかける。

本のなかに出てい

布教、 木の洞穴に住居したり、野宿を重ねたり、或いは湖に生 える水草を乾燥させたものを、 の夜を過ごすというような生活を続けておられたようで なみおかにおいて続けられる。」ということで、 これを寝具として寒い冬

外れた身体、 りほかはないと思います。 さらに優れた精神力があったからこそ、遠い未開の陸奥 ざいます。弁慶のような人だったんだろうと思いますが、 とがいえると思います。六尺三寸四十貫という、 の地に念仏信仰を弘通できたものと、驚嘆、 めに一生を捧げた、まさに殉教の聖者金光上人というこ もできないほどの艱難困苦を乗り越えて、念仏弘通のた これを克服して信者をつかみ、 こういうことで、いわば最悪の環境にありながらも、 頭脳も素晴らしく、怪力もあったそうでご 寺院を建立する等、 賞賛するよ 人並み 想像

がございますので、これは亡くなる四十日前 それを開米智鎧先生が、 したいと思います。 ののようでございますので、それを拝読しながら結論と 後に金光上人の書いた漢文の詩だと思うのですが、 分かりやすい日本文に直した詩 K 書 い たも

> 人間 死は眠りの友と云ふ、 の生涯には限りあるも

生ある限り、 今の我が体は、 生度し、 死を招くが如し、

眠りを誘い、

眼の見える限り、 世間を見度し、

歩める限り、 手の動く限り、 巡脚致し度し 書を記し度し、

出来得る限り、 世人を救い度し、

そして遂には、往生極楽に入寂し、

退き三界の仏閣に、 再び人間として、生れ来るを 永眠したきは、

我が今の心境なり。

建保五年二月十五日 寒風日

ておりますことを、また考えていかなければならないと 寄せていただいております、 いのかー」という問いかけに対しまして、 の度の「三上人のご事蹟をあおいで―布教師はこれでい ご紹介をいただきました、 角出誠堂でございます。 三重県の伊賀教区か 私なりに考え 5

角出

判を受けたいと思っております。 思っていることを若干申し上げさせていただいて、ご批

共は寺院のなかでは、一宗侶であり、一住職ではありま 忘れてはならない 孫育てに十分意を払っているだろうか。こういう視点も 族の中心であるわけです。 時に、もう一つはやはり一寺院の寺庭の中心であり、 う問題でございます。さらに宗侶であり住職であると同 どらいら後継者養成をしていくのか、してきたのかとい い かということを振り返って見なければならないのではな 職である私共が、先代、先徳の意志をどう継いできたの き以前に、まず、私共浄土宗の宗侶が、宗侶であり、住 思うんです。そういうことで私は、布教師としてあるべ 機相応に教化活動をしたのか、こういう点じゃないかと ば、いかに元祖様の意志を、どう受け継いで、さらに時 様であるという側面であります。これは言い換えるなら 面が一つあると思っております。それは何かと申します か、さらに私共の後を継ぐ後継者を養成していくのに この度の三上人のご遠忌は、今までのご遠忌と違う側 第二祖上人様であり、第三祖上人様であり、第二代 のではないだろうか。 自分の家の子育てを、 さらに大きく私 或いは 寺

> 今どう歩んでいるのか、さらに自分達の時代、 の者に残し得る物を、今実践をしているのか、 ルな考え方からするとそうだと思うのですが しても、地域社会人として、一日本人として、さらにも っと大きく言えば、まさに一地球人として――グローバ どうなの つぎの代 -私共が

か。

ことを、まずご提言申し上げたいのでございます。 とが、問い直されなければならないのではないかという 時間

人として、一家庭人としてどうあるべきなのかというこ

まず布教師である以前に、一人間として、一地域社会

代に即応して考えなければならないのではないかという 教師としてどうあるべきなのかということが、今日の 上で、浄土宗の布教師として、どう宗義を伝え、 点でございます。それでは、そうではありますが、その お念仏の信仰の喜びをどう伝道していくのか、まさに の関係もございますので、私が特に言いたいのはつぎの 或い 時 は

げさせていただきます。

て実践を ことで、

ございます。 く開けまして、そして私の顔をじっと見ましてそれから ます。そうしましたら、実は半月ぶりに目をパッと大き かな日でございました。 お孫さん、或いは曾孫さんもおいでになりまして、賑や 歳の息子さん夫婦が坐っておいでになる。隣の間に 壇の真横にお爺さんは寝ておいでになる。両脇に五十五 めをさせていただいて、そして後ろを向きますと、お仏 ておいでになった。たまたま私が、八月の十三日にお勤 に来ていただいて、一日に一度の治療を受けながら、寝 いますので、病院へも入院なさらずに自宅でお医者さん 舎のことでございますし、八十九歳のお爺さんでもござ 言って、寝られたわけでございますが、そこのお家は田 で実は息を引き取られたという場面に出くわしたわけで ておいでになります八十九歳のお爺さんが、 家に寄せていただきました。そしたら、 関西はお盆の最中でございますが、お盆の棚行にあるお お勤めをさせていただいて、 その八十九歳のお爺さんに語りかけたのでござい 実は七月の末頃から、 お勤めの後に、 容体が悪くなったと 私がお仏壇の前 私の 横に寝 目 には、 1の前

せんですね。――隣で控えていた孫娘さんが、お茶碗にけでございます。端においでになりました五十五歳の息分の息子のお嫁さん――お爺さんにとっては孫嫁さんけでございます。端においでになりました五十五歳の息静かに目を閉じられる。口も同時に呼吸しなくなったわ

まず一つは、実は今年の八月の十三日でございます。

待っておりましたが、当然もう間にあいませんですね。間がかかるけれども、そのうちに参りますという連絡でどのお医者さんはおられないですね。ですからすこし時とのお医者さんに連絡をしなさい。お医者さんに連絡をしたけ お爺さんの唇に含ませてあげる。そしてお婆さんに、おお爺さんの唇に含ませてあげる。そしてお婆さんに、おお爺さんの唇に含ませてあげる。そしてお婆さんに、お

て来られる。そして一人ひとり替わるがわる末期の水を

お水と、そして脱脂綿をそのなかに含ませてすっと持

しそれは一回だけの息でございまして、また静かに唇を大脳の命令で息を吹き返すように見えるんですね。しかますけれども、心臓が止まりましても、暫くするとまたかでも、臨終の場面に出くわされた方はご存じだと思いッーと息を吹き返されたわけであります。皆さん方のなッーと息を吹き返されたわけであります。皆さん方のな

息がやがて切れていきまして、暫くしましたら、

またフ

閉じられます。

た時に、ご臨終だとは言わないのだそうです。実は大脳終の場面での僧侶の在りかたというものが、深く問われが、駆け出しのお医者さんの場合は、一回目の息が切れているという気がしたわけでございます。暫くしますと、それが最後でございました。これは後で聞いたことですそれが最後でございました。これは後で聞いたことですれが、駆け出しのお医者さんの場合は、一回目の息が切れが、駆け出しのお医者さんの場合は、一回目の息が切れば、取け出しのお医者さんの場合は、一回目の息が切れているというという。 本は傍らで静かにお念仏をお唱えしながら、まさに臨れは傍らで静かにお念仏をお唱えしながら、まさに臨れば傍らで静かにお念仏をお唱えしながら、まさに臨れば傍らで静かにお念仏をお唱えしながら、まさに臨れば傍らで静かにお念仏をお唱えしながら、まさに臨れば傍らで静かにお念仏をお唱える。



角出誠堂上人

に出

な場面に出くわしまして、恐らく私は終生そういう場

くわすことがないだろうと思っております。

まそこのお家は、隣の部屋でお爺さんを寝かさないで、

そういうことも後で知ったわけでございます。ら、ご臨終でございますと静かに言うのだそうですが、出るんだそうです。その二回目の息が出終わりましてかの命令を受けまして、心臓が止まりました後もまた息が

八月の十三日に、そういらような極めてドラマティック いるということを改めて感じたわけでございます。 う臨終に臨んだ場面に出くわした時にですね、問われて 内に本当に成っているのかどうかということが、そうい 関わります信仰の確立が、 布教師である以前に、まず自分の信仰が、 だぞという自分の信心が、本当に確立していないと、 孫さん達に語りかけていく時に、本当にお爺さんが亡く そしてその側におられます息子さん達ご夫妻、或いはお そういう場面に出くわしまして、お爺さんに語りかけ、 かなか言えないということでございます。浄土宗の宗侶、 なっていくわけでございますから、本当に極楽に行くん 実は私が、このような話しを申し上げておりますのは、 お浄土の信心が、自分の心の 特に "死" 実は K な

況もありました。 仏間で寝かせなければならないような、お家の構造の状

信をもってやれる、 仕事ではないとして通り、神父と牧師は、神学論争に忙 死そのものを忘れがちじゃないか、死というものは、 るのかどうかということが、改めて問われなければなら 教師はこれでいいのか」と問われた時に、三祖様の臨終 という提言を示されていたわけであります。改めて「布 考えて通り過ぎているというところがないだろう 祓いをして通る、僧侶は、まだ死んでいないから自分の 載せておられました。そのなかで、「目先に走りがちで、 に百万遍の知恩寺のご法主が、"死"についての意見を の行儀もございますけれども、まさに臨終の行儀が、自 しくて見過ごし、学者や教師は、未だ沢山でないからと ある本から引用されまして、「神主は、死を不吉だとお ましたので、ご紹介申し上げたいと思います。それ でございました。最後の文章が、極めて私共の心を撃ち うに受けて、説法しないのか。」という**奮起を促す**文章 めて厳粛なる事実なんだ。それを真正面からどういうふ 八月の十七日でございましたでしょうか、『中日新聞』 そういう信仰が本当に確立されてい か。 は 極

し上げたわけでございます。ないのではないかということを、一つ考えておるので申

二つ目の点は、布教師として教化活動を、様々な形でなさると思います。まさに教化は三業の説法であると思いますけれども、しかしそのなかで、お話しによる説法というものが、ちゃんと有効な働きをしているということは、誰しも否定することができないと思うのでありまする、お話しを感動をもって伝えていく、お話しを上手にするのかということが、これは布教師ならずとも、いろんな産業界、職業におきましても、とても大事なこととして、言われているわけでございます。それは言い換えるならば、お話しを上手になさる人が少なくなってきたという、そういう一つの背景があるのじゃないかと思います。

おきましても、本来扇子一本でもって、話芸のいきをつんじゃないか。例えば一つの例を上げますと、落語家にを使用した、総合的、立体的な説法の仕方もあっていいく日の社会のなかで、いろんな、例えば視聴覚機器など

す。 かそうとしないですね。それぞれ具体的な説法の在りか うのでありますが、

自分の得意のネタをなかなか人に明 浄土宗の布教師ならずとも、すべて布教師はそうだと思 と研究しあう機会があっていいのではないか。特に私は すが、そういうようなことをもっとオープンにいろいろ 四国の村中上人が、視聴覚機材を使った布教の在りかた この教学布教大会のなかで、 も布教の立場もそうあっていいんじゃないかと、今回の いろんなことをミッ 今は例えば、演台の横で簡単なお芝居をしてみせたり、 ていると思います。 みながら、落語の説法を極めて立体的になさる努力をし 音と、そして目に映るいろいろな情景をそのなかで仕組 話しでございました。その落語家だって最近は、光と、 くしたところが中心だと言われているのが、落語家のお りが努力をしている。 たが、なかなか交流できないで、それぞれまず一人ひと 実践を通してご提示なさっておられたようでありま かつては浪曲師はここで唸るだけだったけれども、 或いは浪曲師だってそうだと思いま クスさせながらなさっている。私ど それも非常に重要なことだと思う 例えば第五部会のなかで、

終に際しまして、ほとんど意識がなくなって食べること先程申しました、臨終に際しました老人の方でさえ、臨とても大事にされなければならないと思っております。といっても口称念仏、お念仏を称えるというところが、

のではないかというふうに考えております。

もできない、注射一本で一週間あまりを過ごしている老

、これに、これでのが、まませんにのでから存在ででであっますが、お念仏がなかなか口につな声に出して言えるからこそ、お念仏がまさに死に際しかなと私は思っているのです。まさに口称念仏、お念仏かなと私は思っているのです。まさに口称念仏、お念仏のであらこそ、語りかけに対して答えてくれたんじゃない人でさえ、耳だけは聞こえている。耳だけは聞こえてい

のお念仏を称えた記録をお作りになってはどうですかといます。それで私は実は、あることを思いつきまして、います。それで私は実は、あることを思いつきまして、います。それで私は実は、あることを思いつきまして、相談してやって下さいと申しました。
それは、信仰の一生の証として、一定の期間、百万遍相談してやって下さいと申しました。

のでありますが、

もっと組織的な取り組みもあっていい

いうことを提言申し上げたんです。今どき忙しい時に、

程かかるでしょう。少し早口に言えば二十分ぐらいで言 うしてできるのかといいますと、普通の早さで約三十分 を造ったわけでございます。そして二千遍のお念仏はど て、いろいろとお金で買えるものはあるけれども、 れぞれに応じてなさって下さい、ということを申しまし らいでいけるかもわかりませんが、そこのところは、そ えると思います。特急でお念仏を申しますと、十五分ぐ 全部で五百の○を作りまして、その五百の○で五重の塔 えましたら、一つの○を墨で塗りつぶすということで、 おりますが、○を二千作りまして、二千遍のお念仏を称 した。どういうことかと申しますと、ここに持ってきて 大変なことだと思うのでありますが、あえて申し上げま 百万遍のお念仏を一定の期間続けて称えるということは、 っぺん亡くなるまでに百万遍のお念仏を称えて下さいよ の証として何か残してあげるものはないだろうかと、 信仰

称えた証として、表具を施して家の宝として残しておけしてはどうしているかといいますと、百万遍のお念仏を方が完成をしてくれたわけです。完成してくれた方に対

ております。

と申し上げたわけでございます。

そうしましたら、一年半かかりまして、現在十一人の

ぼつぼつ増えてきております。もちろんお念仏はただ数十一人の方がそれに応じてくれました。殆どが年老いた、六十代から九十代までのお爺さんやお婆さんでありますが、大変特急でなさった方は、三ヶ月ぐらいでやってくが、大変特急でなさった方は、三ヶ月ぐらいでやってくが、大変特急でなさった方は、三ヶ月ぐらいでやってくれました。三月間殆んどテレビも見ず、夕御飯を食べるのももどかしく、一日大体三時間ぐらいやったということです。それを三月間発けました。あるお家のお婆さんとです。それを三月間続けました。あるお家のお婆さんとです。それを三月間続けました。殆どが年老いた、おみで助けてもらってやった。そういうことを聞きまして、おるように、また別の完成しましたものを造りまして、おおいばつ増えてきております。もちろんお念仏はただ数につぼつ増えてきております。

れを通しまして教化が間接的になされていることを感じわけです。たいへんなことなんですよ。ご家族の方もそ百日かかりますからね、計算からしますと一年半かかるあるわけです。一日二千遍をお称えいたしましても、五けであります。たとえ一遍のお念仏であっても往生できるわおります。たとえ一遍のお念仏であっても往生できるわ

私は今回の「三上人のご事蹟をあおいで―布教師はこ

を称えればいいということではないことはよく分かって

げたわけでございます。どうも失礼を致しました。してこれでいいとは思っていないけれども、精一杯それでれの場で努力をしていくことが、三上人のご遠忌に応ぞれの場で努力をしていくことが、三上人のご遠忌に応ぶれの場で努力をしているいというふうに考えておりますし、決したけました。

n

でいいのか―」ということで、意見を述べろと言われ

ず知らずにてこそあれ。」(『勅修御伝』巻二一)です。 もあるものかな、 ずの人をみるに、 西 念仏者の尊く目出たき、さすがに多くあるを、 心、よくよく謹むべきことなり。 ければ、我が身のよきままに、我はゆゆしき念仏者にて 念仏を行じて、げにげにしき念仏者になりぬれば、よろ ということでございます。それは法然上人のご法語の を読ませていただきまして、それが私のだいたいの結論 「たいちまんしん」という所でございまして、「まことに 岡 山の奥、 始めに 『勅修御伝』のなかでの、法然様のご法語 林のなかに籠もり居て、人にも知られぬ みな我が心には劣りて、浅敷しくわろ 誰々にも勝れたりとおもうなり。 世もひろく、人も多け 我が聞 この

> それからもう一つ、この「三上人のご事蹟をあお しい念仏行者が、地域のなかでお寺を護り、また本当に ないだけであって、 専一されている方が、多々あるのではないか。私が知ら ありますが、各寺院がそれぞれ戦線恐々として、護持 いろな社会情勢なり、新興宗教とか、いろいろな問題 いうと、これでいいことはございません。しかし、 いと思うのでございますが、布教師はこれでいい ということは、 る教師即布教師であるということの確認を受けました。 ので、実は私、教学局の方へ葉書を書きまして、 ないか。そういうことを私はまずお尋ねのなかに申した 血を吐くような思いで念仏をお伝えなさっておるのでは 実はこのテーマを頂きまして、発表せよということな 寺檀関係の是非は別にしまして――いわゆる教化 誠に私も人の後についてあお 浄土宗一宗のなかで、もっと素晴ら いでいきた いでし のかと ろ

などをなされますと、五~六人の信者さんが来られます教化活動はされておらなかったということでして、法談修御伝』によりますと、源智様は、世間的にはさしたる例えば源智様の評価が実はそうでございまして、『勅

のでございます。

方であったという。つまり、評価が逆転したわけです。なぞ名を集められたという、非常な報恩行、念仏弘通の仏交名を集められたという、非常な報恩行、念仏弘通のば交名を集められたという、非常な報恩行、念仏弘通の仏交名を集められたという、非常な報恩行、念仏弘通の仏交名を集められたという、非常な消極的な方であったという評価。ところが実は、非常に消極的な方であったというまうに、と、魔縁が来るということで止められたというように、

います。

特に私の場合は、

自分の父が、私を念仏に引き入れ

なりは違いますが、

お寺を護っております。それから、

をされましたが、私も私の父が臨終行儀を眼のあたりに

先程、私の先輩である角出上人が、臨終行儀の話

まず私が言いたいことは、たまたま私達も、大なり小

以後、 思いで建てられたか。そしてそれが連綿として、二代、 に寺院住職としての喜びの日暮らしをしているかという これからお寺を護るつぎの ことで、本堂の屋根替えをしたわけでございます。それ いますが、ちょうど二年前に、大きな法要を営むという かと思うのでございます。私の寺のことを申すのでござ ことが、まず一番お互いに問い返してみるべきではない いますが 私の寺の開 毎日、 ――師弟を養育しております。そのなかで本当 毎朝、毎夕ですね、 山上人は、この七間半の本堂をどういう ――一番近いのは師弟でござ 本堂の棟をあおぎまし

たんだなぁということが、痛切に感じられたわけでござ達に念仏を広めていけという思いが、本堂の建物になっ念仏の行を通じて、少なくとも、縁をいただく信者さん元祖法然上人様の「只一向に念仏すべし」という、その

のですか、ある寺へ弟子に入って、弟子生活の経験の後、その私の父は、百姓の長男であって、食い減らしという理屈抜きに信じたいと私は力説しているのでございます。見せてくれましたので、本当に往生浄土ということは、

今の寺を継ぎました。その後私が生まれました。

私はラ

歳で住職になったのです。終行儀でございました。そしてそれ以後ですね、二十六おりました。それがガツンと頭を撃たれたのは、父の臨学に学びまして、さしたることもせずに他の仕事もしてゴラでございましたので、ただのほほんとして、佛教大ゴラでございましたのです。

私の父なりが、どういう思いで寺を護り、――いわゆるそういうなかで、開山上人なり、歴代上人なり、また

人を始め、

歴代上人の思い、それは何かというと、実に

中

- 興と伝わりまして、

私に伝わってきた。開山上

私の口から出てまいります。そういうことがすべて寺院私の口から出てまいります。そういうことがすべて寺院を上人様の、「只一向に念仏すべし」という想いが、二然上人様の、「只一向に念仏すべし」という想いが、二然上人様の、「只一向に念仏すべし」という想いが、二独、三祖ならびに源智上人によってですね、伝えられては、三祖ならびに源智上人によってですね、伝えられては、三祖ならびに源智上人によってですね、伝えられた念仏が、今やっとれの口から出てまいります。そういうことがすべて寺院私の口から出てまいります。そういうことがすべて寺院



西岡信孝上人

いるんです。私のこれは甘さでございましょうが。いるんです。私のこれは甘さでございましょうが。なります。只一向に念仏すべし、もうこれは決まってまいります。只一向に念仏すべし、もうこれは決まってまいります。只一向に念仏すべし、もうこれは決まってまいります。只一向に念仏すべし、もうこれは決まってまいります。只一向に念仏すべし、もうこれは決まってまいります。只一向に念仏すべし、もうとれは決まっております。只一向に念仏すべし、もうとれはいけません。いけませんがしかしまた、どうとればいけません。いけませんがしかしまた、とさいましょうが。

分の寺に縁がある檀家さんにですね、念仏の真価という 分の寺に縁がある檀家さんにですね、念仏の真価という 分の寺に縁がある檀家さんにですね、念仏の真価という とは、例えば六十一年五月の『浄土宗報』に、一般浄土 き寺院との出会いという、いわゆる念仏信者をつくると いうことは、例えば千本北大路の街頭に立ちまして、念 仏を勧めるということも大事です。しかしまず一番、自 仏を勧めるということも大事です。しかしまず一番、自

的に、代々お寺の檀家であるから、お葬式の時は、 兄弟がおりまして、親族は帰っておりましたが、どうする 家名簿からも削除いたしましたし、一切の付き合いをこ りました。私の代になってからも、そういう信心に走っ が、檀家さんのある方が、三十年来別の信仰をされてお おるかということ、そして私は寺院住職のプロであると 供達に伝えていく。そのためには、本当に念仏を喜んで で、念仏を喜び、そしてその姿を時代を背負っていく子 機縁を深めることです。そのためにはやはり寺院のなか ほしいということでするのであれば、私は退かせていた の信仰は別であって、儀式、 いう連絡をいただきまして、枕経に行きました。息子や ちらの方から放棄したのです。それが昨年父が死んだと た人は一切認めないという主義でございましたので、檀 でございます。そうすると父の話しの悪口になるのです に受け取られるかもしれませんが。私の先代の父の時代 いう、そういう意識化というものが大事だと思うのです。 ことですか、もしくは殆んど念仏をしない方にも、念仏の これは自分の信心を変えて逆に棚上げしてというふう 私を住職として呼んだのか、それは一種の儀礼 形態だけは従来どうりして 普段

> ひとつは、あなた自身が本当にこれで今生の別れでいい 浄土へ行かれるのである。それでいいのか。そしてもう ご本願の念仏そのもののお力によって、お父さんは極楽 が、念仏の行であります。別に私の力によって、 極楽浄土へ、このお父さんを往生させていただく尊い行 は、私は念仏を申すと。念仏というのは、 来い、お葬式に来いというのなら来ます。ただしその時 ないのです。私が、枕経も唱え、もしも明日、 だきますと、そういう形だけの檀家さんの付き合いでは のか、信じようが、信じまいが、それは勝手ではあるが、 んを極楽浄土へ送るわけではございません。阿弥陀様の 阿弥陀如来の お通夜に お父さ

こで会うという、そういう喜びがあって、日々日暮らし

その翌日、

こでまた滾々と念仏の信心を持ってもらわなくては困る

ら、葬式に行かないし、お通夜も行かないといいました。 くのかどうかと。そういうことの合点が分からなかった た父と再会することを、楽しみとして日暮らしをしてい のなかで、念仏を行じてそしてその念仏によって送られ をしておるが、あなたはどうかと。あなたの今後の信心

二組みの夫婦がそろって参りましたので、そ

そういうことで、ある程度狂信的といいますか、プロこっちへ帰ってきたかなぁと思うのでございます。っておるのですが、私の見ている範囲内では、まぁまぁということをお話しをしました。それから半年以上にな

大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。そういう方が、この佛教大学の大事だろうと思います。

々と、そして本当にプロ意識を出して護っておられる和奥の、海辺の所で、こういう所へ聴聞されなくても、黙私は三上人の事蹟を偲びつつ、お寺を、それこそ山の

終ということの尊さということ、そしてその死に際とい

い死ぬであろうと、そしてその死に対する、いわゆる臨

いうことの徹底が、

今時忘れられておりまして、

皆お互

外に沢山おられます。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

にお返事をいただいたわけです。

をういうことで、三上人のご事蹟はいろいろとござい をして力説してですね、これだけはバックできないとい うことです。特に現代世相に、迎合という言葉を使用す ると酷でございますが、時機相応ということで、法はや ると酷でございますが、時機相応ということで、法はや ると酷でございますが、時機相応ということで、法はや るとが、二本立てといたしまして、ひとつは無常感で あり、ひとつは罪悪感であります。それで無常であると あり、ひとつは罪悪感であります。それで無常であると

身をもって説くべきだと思います。おると思うのでございますが、そういうことをもっと自うことは、即、生活をどうするのかということになって

現実に私の口から念仏が出てくるという道筋を喜ぶとい なかの生死罪悪と無常のなかに、 のなかでお互い共々が、罪悪でありながらしかも、お互 が、私達も実は大きな檻のなかに入っておるのです。そ 教誨の仕事ではございません。外に檻は造っております 奈良の少年刑務所の方へ教誨の仕事で行って、皆さん方 ろと考えられますが、法は一切曲げないで、念仏信仰の ますが、時機相応というのは、 私達は本当に力説していく時であろうと思うのでござい なば浄土へということです。そういうものを徹底して、 から実は御仏の救いが、現実に私を包み、そしてまた死 した、頭を下げて下げて上がらないというような、そこ いうことは、我が自らの罪悪というものを、もっと徹底 あの少年達の善心を信じて、そしてその善心を信じると いが許されて生かされているのです。そういうなかで、 は悪人であって、私は外から来て善人であるというのは、 そしてやはり罪悪感についてですが、実は私は昨日、 確かに手段的にはいろい 居ながらにあって、今

したが、ご静聴ありがとうございました。と思うのでございます。誠につまらない話しでございまうのが、実は三上人の事蹟を偲ぶという一面であろうか



司会 風間文雄上人

輪読会報告

末代念仏授手印

口語訳

訳出にあたっての底本は浄土宗全書所収本である。

一、略符号 一、本書は本来、章わけをしていないが、便宜的に六章にわけ、各章ごとに注をつけた。 大正……大正新修大蔵経

『観経』……『観無量寿経』 (例)浄全四·三五五下……浄土宗全書第四巻三五五頁下段

浄全……浄土宗全書

(例)大正四七·四三九a……大正新修大蔵経第四七巻四三九頁上段

『観経疏』……『観無量寿経疏』

大乗仏教をつきつめれば浄土門であり、

諸の行でも往生はするが、 (阿弥陀仏の)み名を称えることが(往生のためには最も)勝れている。

浄土に往生して、(阿弥陀仏の)尊体を見たてまつらん。私はすべての行を閣いて、(阿弥陀)仏のみ名を(称えることを)選び、

末代念仏授手印

序

おもいみれば、九品

作者 弁 阿

の後であり、今では覚を開いて自在となった阿弥陀仏が、広く衆生を救済するための船である。これはすなわち(法蔵 念仏を数多くとなえることが基本である。念仏とは、昔、法蔵菩薩が (衆生を救済するために) 大悲心をおこした誓願

(の人が往生する浄土)を宿とするには、称名念仏が先決であり、極楽の八池を棲とするには、(3) tan

菩薩が、衆生を利益するとの約束であり、これはすなわち(阿弥陀)如来が、平等に衆生を利益するとの誠の言葉であ

る。なんと憑しいことか、なんと真なることか。

証真法師より受け、浄土宗の三心・五念の宝玉は、禀承を源空上人に伝えていただいた。幸なるかな、(6) (6) の金色の池を望んで、(池に映る) (源空上人の)弟子(弁阿)は、昔は天台宗に属し、(法華)円乗の教えの水に浴していた。しかし今は浄土(3) 念仏の明月を 翫 ぶのである。ここをもって天台宗の四教・三観の明鏡は、 弁阿は、 血脈を 相伝を

ところは、四修・三心である。これによって自行に専念するときは、口称念仏を数多く修することを正行となし、他人 白骨に留め、 の) 口伝を耳底に納めている。たしかに口に唱えるところの(念仏)は、五万、六万遍であり、誠に心に持つ

のである。すなわち末代の(人々の)疑問を解決するために、未来の(人々への)証として備えるために、手印をもっ ことがどうしてできようか。これにより肥州白河川の辺の往生院の内において、二十有余の人達と結束して、四十八の とを悩み、空しく正行の勤めが廃れることを悲しみ、 日夜を限って、別時念仏の浄業を修し、如法の念仏を勤める。この別時の期間中に、いたずらに称名の行が失われるこ ろう。私は齢すでに七十歳に及び、余命もいくばくもない。悩むことなく、愁えることもなく、空しくこのままでいる かえって念仏の行を失ってしまい、空しく浄土往生の業を廃してしまった。まことに悲しいかな。どうすればよいのだ を教化するときは、 弟子(である私)が昔 かしながら源空上人が往生されたのち、その教えの意義について水火のように諍い、議論を蘭菊のように競ったが、 称名念仏の多念相続が、浄土往生の業であると教えている。 (師より)聞いたことに任せ、 かつは師である法然上人の恩に報いるため、 沙門の相伝によって、これを記録して留めて、 かつは念仏興隆のた 後の世に贈る

2

て証となして筆記するところは、左記のとおりである。

- (1) 九品 浄土に往生する人を、その人の資質によって九種で中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生、中品上生、ある。『観無量寿経』に典拠がある。
- 〜三四七a、浄全一・五二) 楽国土有"七宝池、八功徳水充"満其中,」(大正十二・三四六c 楽国土有"七宝池、八功徳水充"満其中,」(大正十二・三四六c
- く一仏乗の教えをいう。乗の三乗の中の、仏乗をさす。天台宗では『法華経』にもとづ乗の三乗の中の、仏乗をさす。天台宗では『法華経』にもとづ
- す。 教・円教)と化儀の四教(頓教・漸教・秘密教・不定教)をさ教・円教)と化儀の四教(頓教・漸教・秘密教・不定教)をさず、 四教 天台宗の教相判釈で、化法の四教(蔵教・通教・別
- (6) 証真 十二世紀末の天台宗の僧で、宝地房証真という。弁(5) 三観 天台宗の観法で、空観・仮観・中観をいう。

阿は比叡山の東塔東谷の証真に六年間師事している。

- (7) 禀承 弟子が師匠から指図をうけること。
- (8) 三心 至誠心・深心・回向発願心の三で、第三章参照のこ
- (9) 五念 五念門のこと。礼拝門・讃歎門・観察門・作願門・

回向門の五で、第四章参照のこと。

(11) 往生院 無量山泰安寺で、現在は熊本市池田町にある。寺照のこと。 照のこと。

宝に弁阿自筆の『末代念仏授手印』がある。

末代念仏授手印

末代の念仏をする者は、浄土宗の義を知りて、浄土一宗の行を修すべきであり、その首尾次第条条のこと。

第一章 五種正行のこと

一、読誦正行のこと

この理由による。(法然)上人の在世のときは、『阿弥陀経』を一日に三巻これを読誦したのである。呉(御)音で一部、(2) 広くは通じて(浄土)三部経を読誦すべきであり、別して略しては『阿弥陀経』を読誦すべきである。(なぜならば)

二、観察正行のこと

和音で一部、唐音で一部。

信先徳の『往生要集』によるならば、略して三種(総相観・別相観・雑略観)の観の中の一観を用いるべきである。そ べきであり、もし(善導の)『観念法門』によるならば、総相観と別相観の二観を用いるべきであり、(4) 行者の根機によって観門の広と略とを行ずべきである。(広くは)もし『観経』によるならば、十三種の観を用いる(3) もし恵心僧都源

三、礼拝正行のこと

私に教示していわれた。宇治のあたりに住んでいた行者がいて、坐りながら礼拝を修して、ついに往生を得おわったと。 礼拝に、上中下があり、行者の根機によるべきである。ただし多くは下根の礼拝を用いる。 昔、 法然上人在世のとき、

四、口称正行のこと

心には往生の念いを志し、口には南無阿弥陀仏と称す。

五、讃歎供養正行のこと

もしくは、二行となすべきであろう。すなわち、一には讃歎正行、二には供養正行。

およそ五種の正行は以上の通りである。ただし一人が全ての五種を行じ、もしくは一種二種、 もしくは三種四種

するかは)行者の根機によるべきである。

注

寿経等、一心専注思□想観□察憶■念彼国二報荘厳、若礼即一心行」行者是名□正行、何者是也、一心専読□誦此観経弥陀経無量行□二種、一者正行、二者雑行、言□正行□者、専依□往生経□行□二種、一者正行、 社生の因となる五つの正しい行ない。典拠は善

よみ候き。一巻は唐、一巻は呉、一巻は訓なり。」(浄全九・六(2)『和語灯録』巻五「諸人伝説の詞」「隆寛律師のいはく。法供養、是名為」正」(大正三七・二七二a、浄全二・五八b)供養、是名為」正」(大正三七・二七二a、浄全二・五八b)

- 観、比華座観、八像想観、玧真身観、侊観音観、比勢至観、出日想観、台水想観、白宝地観、四宝樹観、知宝池観、宍宝楼(3)『観無量寿経』正宗分に説かれる十六想観の中、前十三観。
- 生浄土唯須持戒仏誦弥陀経」とある。(大正四七・二三b、浄仏三昧海経』を取り上げ観仏の方法を説き、別に「又白行者欲(4)『観念法門』の「依観経明観仏三昧法」には、『観経』と『観

· は雑想観

- 全四・二二三下)
- (6) 『浄土宗名目問答』上に、上は五体投地、中は長跪、下は総想観、三雑略観、随"意楽,応、用ュ之」(浄全十五・七九上)説"相好功徳、是故今当」修"色相観、此分為」三、一別相観、二時毘婆沙云、新発意菩薩先念"仏色相、又諸経中為"初心人、多住毘婆沙云、新発意菩薩先念"仏色相、又諸経中為"初心人、多

会釈とす(浄全一〇・四〇四下)。

第二章 正行助行、二行分別のこと

一、正行のこと

れた第一の行とした。

御意は、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏(二尊)の御意を探って、種種の往生行の中において、この口称の一行こそ、最もすぐ 心には三心をそなえ、口には南無阿弥陀仏と称えるのである。この浄土宗の意は、この行を第一の行とする。善導の

に(阿弥陀仏の名号を念ずることを)捨てないこと、これを正しく往生が定まる行為と名づける。 (『観経疏』散善義の)文には、一心に専ら阿弥陀仏の名号を念じ、行住坐臥に時間の長短に関係なく、 なぜならかの阿弥陀 片時も忘れず

仏の本願にかなっているからである、と説かれている。

向に専ら念仏を修する身となった、 (法然)上人は言われた。(『観経疏』の)この文を見ることができた後は、今まで行なってきたさまざまな行を捨て、 بح

この文について種種の義がある。

には、 『観経』が説く三心の中の深心がこれである。

に讃歎するのか。口業によって讃歎するのである。かの阿弥陀如来の名を称える、云云という文である。 二には、 (世親の)『往生論』に五念門を説いている中の口業讃歎門がこれである。この『往生論』にいう。どのよう(3)

三には、 四修の中で、四修に全て口称の意味があるが、その中において口称は無間修の意味である。

四には、 三種行儀の中のどの行儀にも通じているが、特にこれは尋常行儀の意味である。

五には、(竜樹の『十住毘婆沙論』が説く)難易二道の中の易行道の意味である。

助行のこと

正行とし、のこりの四行を傍行とする。また口称の一行だけを往生の行となし、助行を行なわない人もいる。 さきの五種の正行の中で、口称以外の四種は、口称のための助行となる。ゆえに正行と助行を兼行する人は、

(1) 善導『観経疏』巻四散善義「一心専念」弥陀名号、 行住坐 故」(大正三七・二七二b、浄全二・五八下) 臥不」問,,時節久近、念念不」捨者、是名,,正定之業、順,,彼仏願

(2) 『観経』「仏告」阿難及韋提希、上品上生者、若有:|衆生|願 生一彼国一者、発一三種心一即便往生、何等為」三、一者至誠心、

二者深心、三者回向発願心」(大正一二・三四四c、

四六

(3) 世親(天親)『往生論』「善男子善女人修! 五念門、行成就 畢竟得上生,安楽国土,見+彼阿弥陀仏,何等五念門、一者礼拝門、 二者讃歎門、三者作願門、四者観察門、五者回向門」(大正二 六・二三一b、浄全一・一九三)

第三章 念仏の行者は、必ず三心をそなえるべきのこと

『観経』には、

口称を

三種類の心を発して、すなわち、往生する。三心をそなえた者は、必ずかの極楽浄土に生れる、(1) と説かれている。

『往生礼讃』には

この三心をそなえれば、必ず往生することができる。もし(三心の中の)一心でも欠いたならば(かの国に)往生す

ることはできない、と説いている。

『観経疏』の第四には

決定して三心は、正しく理解すれば、(往生の)正しい原因であることを明らかにする、と説いている。(3)

また(『観経疏』)には、

しているのであるから、往生しないという道理は、ありえない、と説いている。 三心をすでにそなえれば、 (往生の)行が成しとげられないということはない。(法蔵菩薩の) 願と行は、 すでに完成

『観念法門』には

三心を内因とし、三力を外縁とする、と説いている。

(法然)上人の『選択集』には

(『観経疏』の) 「念仏の行者は、必ず三心をそなえるべきである」の文を引用し解釈 すれ ば、引用文の三心とは、こ

れは行者の要となるところである。極楽に生れたいと願う人は、三心を完全にそなえるべきである、と説いている。(6)

浄影寺の慧遠大師の『観経疏』には、

向発願心である。ただ往生をもとめるのを願となし、善行を持って往生を求めるのを回向となす、と説いている。 生を求めるから誠心という。二には、深心である。信じ、あつくねがって、極楽浄土に往生したいと願う。三には、 心を修する往生があり、その心に三種類ある。一には誠心である。誠とは実のことで、行をおろそかにしないで、往 П

、至誠心のこと

四句がある。

向虚仮心

とができない。 外面は実(をよそおい)内面は虚の人で、一向に偽り惑わし世を過ごす人である。この人は、全く、往生を得るこ

向真実心

内面も外面もともに実の人。この人は、浄土宗の行者であり、必ず往生を得る人である。

虚実俱具心

の人は、往生が不確かな器量の人である。

半分実で、半分虚の人である。もしくは、往生できるかもしれないし、もしくは、往生できないかもしれない。こ

非虚非実心

これは世間 一般の

(宗教に関心のない) 人である。

また、念仏に入った後に四句がある。

多虚少実

多実少虚 偽り惑わす心は多く、往生(にかなう)心は少い。全く往生できない人である。

往生(にかなう)心は多く、偽り惑わす心は少い。往生できる人もいる。

--- 152 ---

多少俱実

一向に至誠心の念仏者である。必ず往生できる人である。

多少俱虚

向に往生(にかなう)心のない人である。

また四句がある。

始虚終実、往生できる人である。

始終俱実、 始実終虚、 必ず往生できる人である。 往生ができない人である。

始終俱虚、全く往生ができない人である。 あらゆる教えにおいて、それぞれの教えごとに、虚と実の二心がある。これによって、念仏の教えにおいても、また

れを至誠心と名づけるのである。 虚と実の二心がある。今、善導のみこころは、虚仮の心を捨て、真実の心で、念仏を行じて往生を得ることである。こ

二、深心のこと

信心によって疑心を治す。

これに四句がある。

向疑心

全く往生できない人である。もしくは一分は往生するのであろうか、いやできない。

一向信心

必ず往生できる人である。

信疑俱心

往生が不確かな人である。もしくは往生できるかもしれないし、もしくは往生できないかもしれない。

非疑非信

一向に往生がない(世間一般の)人である。

また四句がある。

念仏の信仰に入った人についてである。

往生できる人である。

始信終疑

始終俱信

・
往生できない人である。念仏の信仰が退転する人である。

必ず往生できる人である。浄土宗で教えるところの念仏者である。

始終俱疑

全く往生できない人である。

自分の身の犯罪によって、自分の身を疑うことがあるとき、深心があるのであろうか、 問う。信心をそなえた人が縁にふれ事物に接するとき、もしくは愛欲の心をおこし、 または深心がないのであろうか。 もしくは罪業を造った場合に、

を恐れ、 悪煩悩においては、 えた凡夫であれば、 生を引導して下さり、自他の犯罪において自他の念仏を疑ってはならない。ただし、あるいは聖道門の意により、 心によって、途中でおこした妄念は、信心を失うものではない。いわんやまた阿弥陀仏の本願の他力は、 ながら本来信心をそなえた人は、途中でしばらく妄念をおこしても、ふたたびまた信心に住するものである。 らない。これは自分の身の癖であり、これは凡夫の習いである。しばしば妄念をおこし罪業を犯すものである。 は浄土門の意により、念仏する人はもっとも罪を怖るるべきであり、悪を厭うべきである。罪を怖れ悪を厭ったうえ 悪縁をとおざけるべきである。このように修習しても、 師僧はいわれた。深心をそなえた人は自分の罪業において、全くこれを疑わなくてもよい。仏弟子は本来罪業 往生を欣求する間、諸悪の心、 これを疑うといえども、念仏の教えにおいては、さらにこれを疑らべきではない。これを念仏往生 その力の及ぶところではない。ただ仏の本願力を信じて、固く本願往生の念仏を憑むべきである。 諸罪の念いがしばしば起りしばしば発動することは、本来煩悩をそな 煩悩をそなえた凡夫であるから、念いのとおりにはな このような衆

する。(このときその念仏は)往生の原因になるであろうか。 至誠心をそなえた人が念仏のさ中に、 急に偽り惑わす心が生れ、 世間的な名利のために申す念仏に変わったと

というのである。

る。 かし悔い改めないならば、往生の原因とはならない。往生の原因になるならないは、その人の心の持ち方によるのであ 答う。もし悔い改めの心を起し、そのことがきっかけとなり、ふたたび至誠心に住したならば往生の原因となる。し

が起ったとする。このときに申す念仏は自身のための住生の原因となるのであろうか、ならないのであろうか。 問 至誠心に住している人が念仏を修している間、他人からの要請によって念仏を申しているとき、とらわれの心

讃』には「普ねく師僧父母とともに往生を得ん」といい、「願くはもろもろの人々と共に」と説いて い(9) 行じ、他人を教化することであり、 ための功徳を回向するべきである。これは第三番めの回向発願心の意味である。このような理由から、 のあとの教えに示す通りである。もともと至誠心に住している人が、他人の要請を受けたとき、とらわれの心を起こす いわんや本当に至誠心に住している人は、必ず悔い改めの心を起し、再びまた至誠心に住することができる。それはこ たとえ念仏の中に、 答う。至誠心に住している人は、 なぜならば至誠心に住して念仏を修し、往生を志す人は、大乗の行者である。大乗とは(仏道を)自ら しばらくの間とらわれの心があろうとも、 これが菩薩の大乗の行なのである。この大乗の念仏をもって、自分と他人の往生の とらわれのこころを発して念仏を申したとしても往生できるのである。 その前後の心は至誠心であるので往生することができる。 る。 善導の V, わんや大 生礼

他人の要請を受け、あるいは自行の念仏のとき、 音曲をいだして、まるで詠歌のように念仏を称え、 意図的に美しい音声をととのえ、 舞遊のように高声に唱えることは、 好ましい声をこしらえ、 虚仮にならな

請された念仏であろうとも、

よった自利のみの過失を招くであろう。

乗仏教の意は、

初発心の行より、他人を教化した功徳を自らの功徳にすることを修習するのである。たとえ他人から要

自分も他人もともに往生の原因を作ることになる。もしそうでなければ、

いでしょうか。このときの念仏は至誠心をそなえているでしょうか。

人を利益する心に住し、 しらえることがあろうとも、その前後の心は至誠心に住しているからである。いわんや大乗の行者は、 答う。至誠心に住している人ならば、このような念仏も結局は往生の原因になる。たとえその途中には声の調子をこ しかも聞法の人が往生できるようにするのである。この志がある人は自分も他人も共に、 慈悲によって他 往生

の原因を作ることになる。だからもし往生を勧める心があり、

あるいはまた、

聞法の人が念仏と縁が結ばれるようにと

小乗仏教のかた

三、回向発願心のこと

回向発願心によって、不回向心を治す。

回向とは、(願と)行とを兼ねそなえることである。

発願心とは、ただ願うだけである。

ただ心中にのみ往生を得ようと願う、これを発願という。今、善導のみ意は、自分がなすところの正行と助行の二行に 自分がなすところの善行によって、 往生を得ようと願う、これを回向という。いまだかって善行をなすこともなく、

して、願と行がすでに成就したのに、往生できないというならば、このような道理はありえない、と説いている。(ユロ) 法然上人はかつていわれた。浄土宗の善導は、念仏者をこのように教訓した。初めて専修念仏に帰入せしめて、

よって、必ず往生できるとの心を発すことである。これを回向発願心と名づける。だから善導は

により善導は(『観経疏』に)解釈して、南無とは帰命であり、またこれは発願回向の意味である、と説いている。(2) 阿弥陀仏と称えるとき、念仏者には三心がそなわるのであり、この心の中に回向発願心を納めているのであると。

そもそもこの浄土宗の一大事は、三心である。弟子弁阿は、法然上人在世のとき、よくよくこのご教訓をこうむった。

法然上人はいわれた。三心の中、どれか一心をそなえれば、必ずその外の二心をそなえるのであると。ただし(ヨ)

と『観経疏』との文が、一には(至誠心)、二には(深心)、三には のは、念仏の行者にたいして、往生を願う心において三種の心を発すことを知らしめるためである。すなわち、 もし念仏の行者が、虚仮の心をおこしたときには、至誠心を用いてその心を治しなさいと。これを教えるために、一 (回向発願心)と、このようにそれぞれ別々に説く

南無

(『観経疏』

に

には至誠心と説くのである。

もし念仏の行者が、疑惑の心をおこしたときには、深心を用いてその心を治しなさいと。これを教えるために、二に

は深心と説くのである。

もし念仏の行者が、ただ発願だけによって往生を願うときには、自分がなすところの善行を用いて往生を願うべきで

あると。これを教えるために、三には回向発願心と説くのである。 この意味から、このことを考えてみると、これについて二種の三心がある。

には、横の三心。一心に三心をそなえるのが、横の三心である。

二には、竪の三心。三心それぞれを別々に一には、二には、三にはと説くのが、竪の三心である。

四句がある。

有願無行

浄土宗の意ではない。

無願有行

浄土宗の意ではない。

有願有行

これが浄土宗の意である。

無願無行

浄土宗の意ではなく、世間一般の人の意である。

また四句がある。

西方回願

これは浄土宗の本意であり、念仏の行者の回向発願心である。

余事回願

これは浄土宗の本意ではない。 寿命の長遠を願ったり、 福徳を願ったりすることで、人それぞれその願望は異って

いる。

西方余事俱回願

これは半分浄土宗の本意であり、半分はそうではない。往生を得ようと願ったり、また(人それぞれの) 願望を得

ようとする。

非西方回願非余事回願

これは世間一般の人である。

注

(1) 『観経』「上品上生者、若有.,衆生.,願,生.,彼国,者、発.,三種四六)『観経』「上品上生者、若有.,衆生.,願,生.,彼国,者、発.,三種四六)

(2) 『往生礼讃

「答曰、必欲」生,,彼国土,者、

一者至誠心、所」謂身業礼.|拝彼仏、口業讚.|歎称,|揚彼仏、如.|観経説,|者、具.|三心,|必得.|往生、何等為」三、

意業

〇c、浄全二・五五上)

専..念観..察彼仏、凡起..三業、必須..真実.故、名..至誠心、

三者回向発願心、所作一切善根悉皆回願,,往生、故名,,回向発願三者回向発願心、所作一切善根悉皆回願,,往、故、名,,深心、十声一声等,定得*往生,乃至一念無,,有,疑心,故、名,深心、沈声三,不,出 火宅, 今信*知弥陀本弘誓願及称,,名号,下至,,治不,不,此。史是真実信心、信*知自身是具足煩悩凡夫善根薄少二者深心、即是真実信心、信*知自身是具足煩悩凡夫善根薄少

生彼国,已来、正明-舟-定三心,以為+正因-1(大正 三七・二七(3)『観経疏』巻四「四明-得生之益、四従-何等為三、下至--必応-知」(大正四七・四三八c、浄全四・三五四下)

具,此三心,必得,生也、若少,一心,即不,得,生、如,観経具説

- 者、無5有,是処,也」(大正三七・二七三b、浄全二・六一)(観経疏』巻四「三心既具、無;行不成、願行既成若不5年
- 藉"弥陀三種願力以為"外緣、外内因緣和合、故即得"見仏、故凡夫念者乗"自三心力"故得"見仏"、至誠心信心願心為"內因、又(5) 『観念法門』「又以"此経"証、亦是弥陀仏三力外加、致"使"
- 若少;;一心;即不参得、生、明知一少是更不可、因、姑欲、生;[極楽;経則云,-具,;三心;者必生,被国、明知具、三必応、得、生、釈則云,(6)『選択集』「私云、所、引三心者是行者至要也、所以者何、

名...見仏三昧増上縁.」(大正四七・二六c、浄全四・二三二上)

之人、可"全具,,足三心,也」(浄全七・四五)

- 為、願、挾善趣求、説為。回向。」(大正三七・一八四c、浄全五・心、信楽愍至欲、生..彼国、三者回向発願之心、直尒趣求、説、之心、言楽愍至欲、生..彼国、三者回向発願之心、直尒趣求、説、之心、意遠『観経疏』「三修心往生如...下文説、心有...三種、一者
- (8) 良忠『決答授手印疑問鈔』巻下には、

九二下)

之思計無」之間、大方為"我身之癖"憂喜、共不"切思入"歟……」黎不」憑之疑也、此人如"通論家義、凡夫往生法門皆別時意也、好心中信"機法、雖、不」疑"往生、抑我身決定往生機歟思惟之処、安心中信"機法、雖、不」疑"往生、抑我身決定往生機歟思惟之処、此人如"通論家義、凡夫往生法門皆別時意也、此人如"通論家義、凡夫往生法門皆別時意也、知者安心疑心、此未」信"機法二"也、凡夫往生不」許、本願強

(浄全一〇・四八上)

- 生を否定形で読んだが、ここでは一分往生は起行の疑心にあて生を否定形で読んだが、ここでは一分往生は起行の疑心にあく。口語訳では、一分往
- 五九上) (9) 『往生礼讃』「普為師僧父母及善知識法界衆生断除三障同得(9) 『往生礼讃』「普為師僧父母及善知識法界衆生断除三障同得
- 浄全四・三六一上)(1) 『往生礼讚』「願共諸衆生往生安楽国」(大正四七・四四一a、
- (12)『観経疏』巻一「今此観経中十声称仏即有二十願十行」具足、生者、無」有二是処」也」(大正三七·二七三b、浄全二·六一上)(11)『観経疏』巻四「三心既具、無元不z成、願行既成、若不」(12) 『観経疏』巻四「三心既具、無元不z成、願行既成、若不」(13) 『観経疏』巻四「三心既具、無元不z成、願行既成、若不」(13) 『観経疏』巻四「三心既具、無元本」(14) 『一般に表記。
- 五○ab、浄全二·一○上下) 亦陀仏,者、即是其行、以,,斯義,故必得,,往生,」(大正三七·二 云何具足、言,, 南無, 者、即是帰命、亦是発願回向之義、言,,阿
- (3) 林彦明本「三心之中、発』一・四六) 順之二心,也、依、之三心之中、発。至誠心、二者深心、三者回向発心、即便往生、何等為、三、一者至誠心、二者深心、三者回向発心、即便往生、何等為、三、一者至誠心,之時、実具。後深心回向発願心」(大正十二・三四四°、浄全一・四六)
- (大正三七・二七○c~二七二b、浄全二・五五下~五八下)心、言.,深心,者、即是深信之心也……三者回向発願心……」次15)『観経疏』巻四「一者至誠心、至者真、誠者実 ……二者深

第四章 善導のみ意は、 浄土宗に入って正助二行を修し、三心をそなえた人は必ず五念門を修す

(『往生論』)を引用して次のようにい う。もしかの国に生まれたいと願う者があるならば、五念門を修すことを勧めな 『往生礼讃』には、次のようにいう。『観経』にくわしく説くように、よく心得なさい。また天親(世親)の『浄土論』

さい。もし五念門がそなわるならば必ず往生することができるのである。

て五念門を明かす理由は、『観経』に説く三心と、『往生論』に説く五念門とをあわせて解釈し、経と論とが、このよう(2) この(善導の)解釈の意味するところは、『観経』によって、すでに三心を明かしおわり、今また『往生論』によっ

に生まれることができる、と説いている。

『往生論』には次のようにいっている。

に、一致しているとの意味なのである。

五念門とは

、礼拝門 身業である。

二、讃歎門 口業である。

阿弥陀仏を礼拝する。

阿弥陀仏をほめたたえる。

観察門 意業である。

浄土の荘厳(依報)と阿弥陀仏(正報)を観ずる。

もし善男子善女人が五念門を修し、その行を成しとげれば、ついには安楽国

四 作願門 意業である。

どんな時、どんな所においても極楽に生れたいと願う。

五 回向門

作すところの善行をもって浄土に回向する。

1 三八

。、

浄全四

・三五四下) 願生彼国者、勧修五念門、五門若具定得往生」(大正四七・四 『往生礼讃』「如観経具説、応知、又如天親浄土論云、若有

(2) 『観経』「仏告』阿難及韋提希、凡生』西方」有』九品人、上品 等為」三、一者至誠心、二者深心、三者回向発願心、具,,三心,者 上生者、若有,,衆生,願、生,彼国,者、発,,三種心,即便往生、何

必生は彼国に(大正十二・三四四b、浄全一・四六)

(3)『往生論』「若善男子善女人、修',五念門,成就者、 生。安楽国士、見。彼阿弥陀仏、何等五念門、一者礼拝門、二者讃 歎門、三者作願門、四者観察門、五者回向門」(大正二六・二

(4) 注(3)参照。 三一6、浄全一・一九三)

第五章 善導の教えの意は、三心と五念の法を実践するには必ず四修の法を備えるべきのこと

『往生礼讃』には、 また勧めて四修の法を用いて、三心五念の行にはげみ、すみやかに往生を得る、(こ) と説いている。

四修とは

一には恭敬修

または慇重修と名づける。憍慢の心を対治する。

には、 恭敬修に五種ある、と説いている。 阿弥陀仏およびかの一切の諸菩薩や聖者達を恭って礼拝する、 と説いている。

『西方要決』には、

-162

一には有縁の(西方の)聖人を敬う。

行住坐臥に西方に背を向けてはいけない。

一には有縁の(阿弥陀仏)像(浄土の)経を敬う。

一仏二菩薩の像を造り、尊経を写経してつねに浄室に置く。

浄土の教えを説く人である。

三には有縁の善知識を敬う。

四には有縁の同朋を敬う。

一緒に修行する人である。

五には住持の三宝(仏像、経典、聖僧菩薩)を敬う。

今の修行の未熟なものにとって大きなきっかけとなる。

一には無余修

雑起の心を対治する。これは (阿弥陀仏に対する) 疑いの心や専念できない心である。

じえない、と説いている。 『往生礼讃』に、専ら阿弥陀仏の名 を称 し、専ら念じ、専ら想い、専ら礼拝し、専ら讃嘆して、それ以外の行為をま

『西方要決』に、専ら極楽を求めて阿弥陀仏を礼念す、ただしそれ以外の行為を雑起せしめてはいけない、と説いて(5)

いる。

三には無間修

おこたりやなまけの心を対治する。これは勇猛な精進の心である。

がなく継続して、他のことがそこに入りこまないようにせよ、と説いている。 『往生礼讃』に、継続して 恭 敬 し、礼拝し、称名し、讃嘆し、憶念し、観察し、回向し、発願し、心がとぎれること

ゆえに精勤してなまけず、まさに仏恩を念じて、その恩に報いきるまで心につねに思いをかけるべきである、と説いて 『西方要決』に、つねに念仏して往生の心をおこして、一切の時においていつでも心につねに想いえがくべし、この

いる。

四には長時修

退転や流動する心を対治する。

いる。

『往生礼讃』に、命がつきるまで誓って中止せず、これが長時修である、と説いている。(8)

『西方要決』に、初発心より菩提に至るまで、つねに清浄な行ないをなして最後まで退転することがない、と説いて(9)

において永く退転すべきではない。もしこの主旨にそむけば、永久に三宝のたすけをこうむることなく、必ず地獄の薪 らびに三宝を勧請し、宝前に香華をそなえ、大誓願をおこして往生の業を始めるべきである。命がつきるまで往生の行 私はこのように理解する。他の教えや他の行をみわたして、この文意を考えてみると、誓って中止せずとは、本尊な

となろう。

- (1) 『往生礼讚』「又勧行! 四修法、用策! 三元五下)
- 下) 『往生礼讚』「一者恭敬修、所」謂恭" 敬礼" 拝彼仏及彼一切(2)『往生礼讚』「一者恭敬修、所」謂恭" 敬礼" 拝彼仏及彼一切
- (3) 慈恩大師基『西方要決』「二者若恭敬修、此復有」五、一敬,有縁聖人、謂行住坐臥不」背。西方、涕唾便痢不」向。西方,也、二敬。有緣聖人、謂行住坐臥不」背。西方、涕唾便痢不」向。西方,也、二敬。有緣整人、謂行住坐臥不」背。西方、涕唾便痢不」向。西方,也、二菩薩、亦得教者、弥陀経等五色袋盛自読教」他、此之経像安。置室中、六時礼懺華香供養、特生。尊重、三者敬。有縁善知識、謂宣。浄土教。者、若千由旬十由旬已来、並須。敬重親近供養、別学之者、惣起。級が、即除。行障、四敬。同縁伴、謂同修業者、自雖。障重独業不」成、要藉。良朋、方能作」行扶」危救」厄助力相資、同伴善縁深相保重、五敬。一三宝、同体別相並合。深敬、不」能。具録、為。灣行者不」果。依修、住持三宝者、与。今浅識人。作。长因緣、今粗料簡言。《仏宝,者、謂雕」檀繡綺素質金容鏤、玉図、大因緣、今粗料簡言。《仏宝,者、謂雕」檀繡綺素質金容鏤、玉図、指磨、石削、土、此之霊像特可。尊承、曹爾観、形罪消增、福、若使,以使,長」、惠善亡、但想。尊容、当、見。真如、言。法宝,者、三维,以使,長、四方、以使,人以使,人以使,人以使有之人。

慢想:」(大正四七・一○九c、浄全六・六○四下) 身手清潔、言:僧宝:者、聖僧菩薩、破戒之流等心起よ敬、勿よ生.基抄:)写尊経、恒安:,浄室、箱函盛貯並合:|厳敬、読:,誦之: 時、乗教旨、法界所流名句所詮能生! 解縁故、須:,珍仰、以発.恵、乗

- (大正四七・四三九a、浄全四・三五五下) 専z礼専ュ讃彼仏及一切聖衆等、不ュ雑;余業;故、名;無余修;」 (4) 『往生礼讃』「二者無余修、所ュ謂専称;彼仏名、専;念専;!想
- 間修.」(大正四七・四三九a、浄全四・三五五下) (5) 『往生礼讚』「三者無間修、所ュ謂相続恭敬礼拝、称名讚歎、 (6) 『往生礼讚』「三者無間修、所ュ謂相続恭敬礼拝、称名讚歎、 (6) 『在生礼讚』「三者無間修、所ュ謂相続恭敬礼拝、称名讚歎、 (7) 『西方要決』「四者無余修、謂專求:[極楽、礼:]念弥陀、但諸
- 亘十念.(KEYU)・一一つa、争全は・たつなと) 心恒想巧、……中略……精勤不√倦、当ႊ念』仏恩。 報尽為。 期心(7)『西方要決』「三者無間修、謂常念仏作』往生心、於』一切時、
- 四七・四三九a、浄全四・三五五下) (8) 『往生礼讚』「畢命為」期、誓不,, 中止、即是長時修」(大正恒計念4」(大正四七・一一〇a、浄全六・六〇五上)
- 浄因、終無;退転;」(大正四七・一○九c、浄全四・六○六下)(9)『西方要決』「一者長時修、首従;初発心;乃至;菩提、恒作;

、尋常行儀

- (念仏をするときの)場所については、浄、不浄をえらばない。
- (念仏をするときの)身体については、浄、不浄をえらばない。
- (念仏をするときの) 服装については、浄、不浄をえらばない。
- (念仏をするときの)姿勢については、行住坐臥をえらばない。
- (念仏をするときの) 時間の長短をえらばない。

(念仏をするときの)

食事(の回数や内容)の浄、不浄をえらばない。

、別時行儀

(念仏をするときの) 場所については、清浄な道場にする。

(念仏をするときの)身体については、沐浴をして清浄にする。

(念仏をするときの)服装については、清浄な衣服にする。

(念仏をするときの)姿勢については、常に立ち、あるいは常に坐る。

(念仏をするときの) (念仏をするときの) 期間については、 食事については、 もしくは一日、七日、十日、九十日などと日数を定める。 一食にして、午後食事をとらず、酒肉五辛の不浄なものは食べてはいけない。

一、臨終行儀

別時の行儀を用いるべきである。

注(1) 臭味の激しい五種の野菜。 韮ら 葱菜 産、 薑(生姜、 山椒

心南無阿 Ŧi. 念南無阿 几 修南無阿 \equiv 種 行 儀南無阿

深 至 誠 心南無阿

心南院仏阿 礼

回向発願

心南無阿

作

願南無阿

無

観

讃

嘆南無阿 **拝** 南 無 阿

恭

敬

修南無阿

別 尋 時 常 行 行 儀南無阿 儀南無阿

長 時

余 修南無阿

修南無阿

臨

終 行 養南無阿

向南無阿 察南院仏阿 無 間 修南無阿

わが師法然上人のおっしゃるには「善導大師のご解釈を拝見すると、源空の目には、三心も、

五念も、

四修も、

みな

ともに南無阿弥陀仏とみえる」ということである。 時に安貞二(一二二八)年十一月二十八日申時

左手印

右手印

授手印

源空

弁阿

然阿

嘉禎第三(一二三七)歳卯月 (四月) 十日巳時

沙門弁阿在御判

-167 -

開 祖 向上人を仰ぐ

神奈川教区 西林寺住職時 宗 文 化 研 究 所 大 橋 俊

かもしれないと、 たから、まだ余塵のおさまらない、三度び来襲して来る 蒙古の大軍が北九州におし寄せて来たのが弘安四年でし すが、弘安十年といいますと、二回目の元寇、すなわち は弘安十年(一二八七)十一月十八日亡くなられたので ら七百年、七百年ご遠忌の年に当っています。一向上人 橋でございます。今年は一向俊聖上人が世を去られてか 私 長らく一向上人をご鑚仰申し上げている一人の大 日本国中の人たちが緊張していたころ

私たちは一向宗といいますと、浄土真宗門徒宗のこと

向宗という、時衆方の名なり、

一遍・一向これなり。そ

て「あまさえ当流の輩も我と一向宗と名のる也。それ一

雄

時の為政者に要求したいことを力にうったえ、それを貫 は蓮如という人の時代でした。その蓮如は一向宗につい て行動したのが一向一揆ですが、その高まりをみせたの の信者をエネルギーとした争いが一向一揆なのです。 きとうそうとする動きが一揆ですが、この場合浄土真宗 かもしれません。利害関係を同じくする人たちが団結し、 を思いらかべます。また、一向一揆を思いだす人がいる 農民が一つの村、または数ヶ村を一つの単位、惣とし

ばかりの、名神高速道路にそった所にあります。蓮華寺 **う作家が、番場の忠太郎という俠客を描いた小説** といってもお判りにならないでしょうが、 郷村番場の蓮華寺、 言うのです。江州番場の道場というのは滋賀県坂田 派を指している。その源、 は時宗方の名であり、 だと言っているが間違もはなはだしい。一向宗というの 言語道断の次第なり」と言っています。自分たちの流 の源とは江州ばんばの道場、これすなわち一向宗なり、 母』の舞台になった、 の人はいうまでもなく、 この名をへつらひてかくのごとく一向宗というか、 東海道線の米原駅で下車し、 忠太郎のいたという番場にある寺 他宗の人でさえ一 遍や一向を祖師と仰いでいる宗 すなわち江州番場の道場だと 長谷川伸とい 向宗だ一向宗 四キ 『瞼の これ 郡 息

P

ないで、 呼んだからです。あとになりますと、もう言いわけをし では、 て来たため、 土真宗のなかに多くの一向俊聖の流れを汲む信者が入っ 蓮如 での言 何故混同して用いてはいけないのかというと、浄 蓮如自身「あながちに我が流を一向宗と名のる っている一向宗とは 誰言うとなく親鸞の流れを指して一向宗と 一向派のことなのです。

> 中に、 は、一 という経文からとったと伝記の中に見えています。 と言い、『無量寿経』 説いているから一向宗と言っても差支えないのだ、と言 頼むから一向宗と言っているだけのことである。 わけではないが、ただひたすら阿弥陀仏を後生のため ることは祖師親鸞が別に、そのように呼ぶように言っ かりといへども、経に一向専念無量寿仏と説きたまふゆ を一向にたのむによりて、人のまふしなすゆへな の文により名を一向と改め、専修の行者と成りたまう」 ことは、 っていますが、一向俊聖の一向という名前も に、一向に無量寿仏を念ぜよといへるこころなるとき 向宗とまふしたるも仔細なし」と、一向宗と名乗 一向に専ら無量寿仏すらわち阿弥陀仏を念ずると 別して祖師もさだめられず、おほよそ阿弥陀仏 の「一向に専ら無量寿仏を念ずる」 一向専念 経 典

永十年(一二七三)夏大隅国の八幡宮に詣でたときのこ の手段として用いています。踊躍念仏をはじめたのは文 までの各地を遊行しながら教えを説き、 ますと、 向上人は出羽国から南は大隅国、 では、 蓮如を一向上人の再来と考えていたからです。 何故 向派と親鸞の流れとを混同したかと言 山形県から鹿児島 踊躍念仏を布

花は、未敷蓮花といって開ききっていない、つぼみの蓮 また神から授った蓮花が結びつけられていました。 は結び目が三つ、 ばたに落ちていたボ でした。踊り念仏のときに着用した袈裟は牧子という道 面にあふれ、 花でしたが、 なわり、仏と同格になったのです。このとき手にした蓮 にしたことにより一向俊聖に阿弥陀如来の四十八願がそ 2 が成就できたことを証明するものであり、 童は八幡宮のお使でした。蓮花は阿弥陀如来の四十八願 と思うと、また扉のうちに入ってしまったのです。その 行者であるからこの花を差し上げよう、と言い渡したか 八本の蓮の花を持ち出て来て、そなたはすぐれた念仏の い あったということですが、四十八日目の夜神殿 ともなく集って来て、そのさまはちょう度市場のようで たものを写したものである、というのです。蓮花を手 たかと思うと十二、三歳ぐらいの童、 それが形となってあらわれたのが踊り念仏 阿弥陀仏の証しを得たことによって喜び満 とじ目が左右に十二個あり、袈裟には 口 切れを縫 い 合せたもので、 小供が手に四十 極楽浄土にあ の扉が開 袈裟に

> は思いきり足をはね、首をふり体をゆすりながら踊った は魂が燃焼することをいいます。体と心とが一つの状態 い」と言っていました。「もの」とは霊魂、「くるい」と ようですが、こうした状態を当時の人たちは 踊 躍念仏したときには鉦を打ちならし、 踊ったときに 「ものぐる

になること、仏と一体になることです。

もう一つ、一向上人の教えを弘めようとする態度で注

仏申していますと、その名声を聞き、人びとがどこから とです。八幡宮で四十八日のあいだ断えることなくお念

りける」云々という御和讃をつくり、 ぞ発しける、行住坐臥のつとめにて、威儀も作法もなか をしているようなことばで教えを説いていることです。 極楽我等に縁深し、 意しなければならないことは、「十方浄土のその中に、 阿弥陀の因位の本願は、 和語、 私たちが話 凡夫を先と

名声を聞き公家や武士たちの帰依を受けるようになりま 唱えていたと思います。踊り、 た方法を一向俊聖のあと用 にとなえることによって人の和ができたのです。 るからには、ご詠歌をとなえているように同音に 般民衆を対象に布教しましたが、次第にその い 10 そして念仏や和讃 のが蓮如でした。 こうし 一諸に を同音 向

みを聞きながら適切に答えています。

和讃をつくってい

しかも、

法座という形式をとり信者の話に耳を傾け、悩

は最初に

ど近くはないだろうと安堵の胸をおろし帰っていったあ までとうってかわり親族と親しく話を交し、死もそれほ く病床に在ったのですが、亡くなる直前体内にあった不 ていられた人に圭村諦成さんという人がいました。長ら 亡くなる直前はローソクの火がぱっと明るくなるように 間にしますと午後三時から五時ということになります。 言うことです。申の時と言いますと、七つ時、現在の時 念仏数百遍申し、 十八日死することを予言し、弟子の礼智阿に血脈・ 俊聖を開祖と仰ぐ一向派だったのです。 ですが、古く鎌倉時代に一向衆と呼ばれてい 教団を自他ともに一向衆と呼んだことも無理からぬこと 時に救いの手を差しのべたのが蓮如でしたから、 すと、民衆への教化がないがしろになります。こうした 浄物がすべて排出され、心身爽快となり、熱も下り、今 な状態になり、しっかりした姿で立ち上ったかと思うと よ十八日の申の時になりますと病もすっかり直ったよう 衣などを付属してからのちはお念仏ばかり申し、いよい 時的に良くなるものです。曾って明治大学の教授をし 向上人は弘安十年十一月十二日病を得、一週間後の 笑みをふくみ立ちながら往生した、 たのは一向 蓮如 蓮華 ح 0

> ことです。 ることなのです。一向上人は立ち上って往生したというと亡くなったということですが、こういうことはあり得

こうした立ちながらの往生に奇特の思い、前代未聞だということで多くの人たちが一目見たいと拝みに来、そも前のことです。年輩の方はご存知でしょうが、女優に毛利菊枝さんという方がおられます。そのご主人が美術生利菊枝さんという方がおられます。そのご主人が美術生家の森暢さんです。年輩の方はご存知でしょうが、女優に私が『番場時衆のあゆみ』という一向派の歴史を書いた絵と称するものがあるので見てほしいと言って来ました。私が『番場時衆のあゆみ』という一向派の歴史を書いた私が『番場時衆のあゆみ』という一向派の歴史を書いた。ということです。臨終絵を一度は東京の外務省の研修会館で、二度目は京都東山の永観堂の近くにありました森館で、二度目は京都東山の永観堂の近くにありました森館で、二度目は京都東山の永観堂の近くにありました森館で、二度目は京都東山の永観堂の近くにありました。

臨終絵はタテ一三二センチ、横五三センチ、ほぼ畳一枚光景が強く信者の胸をうつものがあったからでしょう。絵が残されていることは、臨終の刹那が印象的で、その人の臨終を最も正確に描いたものといえます。こうしたほどたっていない頃のものと推定されていますから、上ほどたっていない頃のものと推定されていますから、上

俊阿· 「健 に立ちたまひ念仏数百反、常よりも高唱に唱へ、亥 口 K 立ち膝ならばそのような心配はないから、 す。 K 段には遺骸を興にのせ善の綱を引きながら、 る女性は る」と記したのかもしれません。亡くなった一向上人の 立とうとした意志を尊重し誇張して『一向上人伝』には 命つきたときぱたんと倒れてしまうかもし 立ち膝をしながら合掌をしています。 ここに描か たって描かれている図の場合、 念仏している中を荼毘に付している図です。 ほどの掛幅で、 描 [りにはおよそ五十六人ほどの弟子や信者を描 刻に至て歓喜の笑を含み、 野辺の送りをしている図、 この中には土肥三郎入道道日や二代をついだ礼智阿、 その中もっとも印象的 かれている方が自然の姿ではないかと思っています。 行蓮とい 「夫婦ともに道場にこもり居」 れている一 絵は三 った僧が 向 段に分れ、 おり、 上人は立 なのが往生の図なのですが、 立ながら息き絶 上段には門弟たちが 上方の簾 下の方から見ていくので 下段には往生の図、 っているというよりも 立って往生すれば 派越し て臨終までお世 むしろ臨終絵 れませんが、 松明を先頭 何段にもわ に見えてい へたまひけ ていま 合掌し 中

> す。 部に「一向上人 陀と呼ばれている阿弥陀如来の坐像ですが、 造立したうちの二番目につくったという、 本尊は応永十二年(一四〇五) の住職は「一向寺当住忍阿」でしたが、その法系 向上人・行蓮上人と記していることは、 行蓮の名は宇都宮に一向寺という寺があり、 応永十二年は行也上人の十三回忌にあたり、 行蓮上人 行也上人」と刻られてい 四月藤原満 行蓮上人が 綱 名汗 その銘 が四十八躰 その寺の その の中 かき弥 0 時 ま

多くの肖像画には「四大本より空、五蘊仮りに建立し、 ち当然なことです。皆さんの、今日集まっておられます のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています のもありますが、多くは立っている姿をしています のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。 のもありますが、多くは立っている姿をしています。

の詩と和歌は一向上人が成道し悟りを開いたときの心境く月にさもあらはあれ」の和歌が添えられています。こ五言絶句の詩と、「我れ独り入て何せん西の山に かたふ

宝号を所々に留む、

これを名づけて一向と謂う」とい

5

話をした入道道日の夫人だと思います。

向上人の弟子であったことを示しています。

ない、 聖に与えられた使命であるというのです。 を多くの人たちに残しておいてやりたい、これが一 である。あてになるのは名号だけであるから、この名号 る働きを識と言いますが、四大も五蘊もみなあてになら 正しくないと判断し理解することを想、 楽しいと感じたり、苦しいなと感ずる感覚を受、 に建立する」という五蘊とは人間を構成している肉体や する働きをする風大の地水火風を言います。 を成育するのに必要な熱すなわち火、それに動物を成長 切の物質を構成している元素のことで、土地と水、 を述べたものです。「四大本より空」という四大とは 定の方向に動いていくことを行、 頼りにならない、仮りに存在しているだけのこと 肉体を色、人としてこの世に生きていて 物事を分析し判断す 精神的な働きが 「五蘊仮り 正しい 向俊

是を積みおきて一期守り居て、

終に白日のもとに辞

も無きにも苦となるものを衆生妄りに宝と思へり。漸く

宝号あるのみと言っています。 向に宝号を唱えるほかには安心もなければ起行もない、 るものをすて、 にも代えることのできないものでしたから、「身の浄不 向上人にとって名号すなわち宝号は絶対的 仏の行せしむるものを行じ」て、ただ一 仏の摂不摂をも論 ぜず」「仏の捨てしむ な何 \$

> ども、 之を求めてたまたま得れば亦失はんことを畏る。 の為なり。 の宝は得かたふして失ひ易し、 は 今時 一祖をついだ礼智阿は、 寒冷にも汗を流し、 重病の妙楽なれば別して宝号と呼び侍る。 田なければ田を求め、宅なければ宅を求め、 炎天にも心を冷すは唯 もっと具体的に「六字の名号 貴賤品異に男女形別なれ 有るに ロ々財欲

独り黄泉の底に入るとき財宝は悉く他の有となり、 と申すべし」、炎暑寒冷に汗を流して働くの は現当二世の利益あり、是れ無上の珍宝なれば宜く宝号 を受くる時、宝は吾が苦に代るものに非ず、今念仏の宝 我か身に随はんや、此の宝の為に罪をつくりて三途の苦 は財産をふ 誰か

やそうと思うがためである。

田がない人は水田を、

浄土に赴くときにはこの世においていかなければなりま つとめるのが人の常です。 求め手に入れたからには、それを守りつづけ失うまいと ない人は家を求めようとして懸命に働 ん。持って行くことはできないのです。水田とか そうして得た宝であっても、 いてい るのです。

いった、

その人にとっての宝を得るために、

明らさまに

世

得た宝はその身代りになってくれない。苦しみを救って ともかぎりません。苦しみを受けたときでも、この世で くれるのは名号だけです。そのため名号を宝号というの かもしれません。それがもとで三塗の苦しみを受けない 目に見えなくても人をきずつけ罪をつくったこともある

だ、と礼智阿はわかりやすく説いています。

平は二祖聖光上人に帰依した人でしたから、 年はまた時宗の宗祖 ら仏教的雰囲気の中に生活していたであろうことを知る n に流罪の身となった後鳥羽上皇の亡くなられた年でもあ 西好田に草野冠四郎永泰の四男として生れました。 ことができます。 ました。父永泰の兄永平、一向上人にとって伯父の永 向上人は、 曆仁二年(一二三九)正月筑後国竹野荘 遍智真が生れ、 承久の乱で隠岐国 幼少の頃か この

K 0 書写山は姫路市の北西四キロばかりの地にある山で、 は円教寺という寺があります。 ですが、「命は念々にせまり、 寛元三年(一二四五)七歳のとき播磨国の書写山に登 以来建長六年まで九年間天台宗の学問 れ 里に近い山としては峻険で、 ここで九年間修行した を修めました。 ر ۸ ر 西

0

死は歩々に近づく、衆

東に下向し、正元元年夏から文永十年二月まで十四年間

弟子でした。

当時、

良忠上人は鎌倉におりましたので関

興福寺をはじめ多くの奈良時代からの伝統をうけつぐ寺 南都すなわち奈良に赴いたのです。 悟った上人は、ここで無為にすごすことをさけ山 修行しても修行しても仏になることの容易でないことを 生みなかくの如くならば成仏は誠に難かるべし」、日は くことができませんでした。 教えを問うたのですが、求めたいと思っていた教えは聞 がありましたので、心ひそかに期待をもって学匠を訪 無為に一日とすぎ、 命は日一日と短くなっていきます。 だが、そのとき耳に 奈良ならば東大寺や を下り

を起し道を修せんに、いまだ一人として得る者あらじ、 かはない、という「我が末法の時の中の億々の衆生、行 ない、この世で浄土に往生できる方法は浄土門によるほ

当今は末法、現にこれ五濁悪世なり、ただ浄土の一

みありて通入すべき路なり」のことばでした。

このことばに引かれ浄土門を学びたいと心に決め 脳裡にうか んだのは伯父永平の帰依 した聖光上人の たと

したの

人たちがいて修行しても一人として仏になることはでき

は道綽禅師の『安楽集』の、末法のこの世の中に多くの

遊行の旅に立 良忠上人に 師 事し、「四大本より空」の偈文を得て諸国 たのです。

花 信念が「宝号を所々に留む」ということばとなってあら うのです。 ただ一つ永遠なものがある、 し」ということです。では、すべてが空しいかといえば、 あらわしただけのことである。これが「五蘊仮りに ではなくはかない命であり、仮りに人としての姿を世に 判断する機能が発達し行動し得たとしても、それは永遠 耳・鼻・舌・身・意という感覚器管がそなわり、 あり生老病死をくりかえします、このことを一向上人は ように植物に周期があるように、 落ちても、植物は次の用意をして芽を出すのです。 も一時で凋落のきざしがみえてきます。咲いた花や葉が ばらしい花をつけ、緑の葉でおおわれるのですが、 の緑にしても、適当な水分と適度な光があてられればす 四大本より空」と言ったのです。 は紅ない 大地に適当な水と光が与えられれば植物は生育します。 何ものにも換えがたいものであるから宝号とい 柳は緑といわれるほど色を代表する花 私はその宝号を多くの人に知らせたいとい それが南無阿弥陀仏の名号 人間にもすべて周期が 人間の体にしても眼・ の色と葉 物事を この それ 建立

い

は、 われたのです。「これを名づけて一向と謂う」というの 向と名乗る私、俊聖だと言うのです。 宝号をこの世に残すために努力する人、その人こそ

信念が一向衆徒にもあったのです。あったからこそ、 ないとかを判定する権威さえもっていたから、 者であり、 っているように「法然にすかされまいらせても」という をとなえるところにこそ、行の成就がある。 こうして一向上人は身も心もともに仏に帰命して宝号 阿弥陀如来の代官として往生できるとかでき 智識は絶対 親鸞の

諸国遊行の旅にたった一向上人は文永十一年夏大隅 う条件が付与されていたのです。

陰道に入り、 幡宮で神の神威をうけ踊念仏をはじめました。文永十 豪族土肥三郎元頼の帰依を受け、ここにとどまることに 草堂に住していた蓄能・蓄生という二人の僧と、 入ったのです。 来九州を回国し 年は一遍智真が熊野で成道した年にあたっています。 北陸路まで足をのばし、弘安六年近江 坂田 たのち四国に渡り、 郡 番場の一草堂で念仏していたとき、 さらに山陽道 土地の から山 以

なり、

やがて堂宇の建立がなされたのです。これが蓮華

向衆徒には「智識の教えにまかせて唱ふ」べきであると

寺のもとになっ ています。

工

年十 期 のも 0 華寺 月の銘 土宗の宗祖は法然上人です。 陸波羅南 0 と推立 E 0 は 定され ある銅鐘、 北過去帳」が所蔵され、そのほ 国の重要文化財に指定されて てい る 元弘三年 向上人の画 法然上人を宗祖と仰 (| | | | | | | | | 像もあ い 年五月執 か鎌倉後 る弘安七 b ます。

年に、 若い皆さん 正当の日にあたっています。 ません。皆さんは一向 皆さんの力なくして一 でいる人たちによって今日 人のご鑚仰と研究に努力して下さい。皆さんがやらなけ き日に皆さんにお会いできたことを喜びとするととも あと五十年たたなければやって来ないのです。こうし した。皆さんは一 ば 今日、十一月十八 誰もやってくれる人はないのです。 私は二度とお会いすることはできません。こ は次の五十年の御遠忌に向け、さらに一向 向 上人を開 向 日 上人をささえるエ は 派をもりたてていくことはでき の浄土宗がささえられ 向上人の七 五十年、 祖と仰いでいる方々です。 百年とい 私が一 ネ 百 ル 0 ギ 向 , う節! 御 1 てきま なの 上人の 遠 0 目 忌

几

究をはじ

めたのは昭和二十三年のことでしたか

らも

十年近くたっています。

_

祖礼智阿のことはアメリ

究し、 らせていただきます。 来たこともありました。 してご精進の ら、皆さん一向派にご縁のある方はどうぞこれ 1 ル 在日中竜谷大学の朝枝善照氏 大学のジ ほ どお I 1 ・ムズ 願 ご静聴ありがとうございまし い甲しあげ、 こうした人も • ドビ ンズ氏が消息を中 私のつたない の紹介で私を訪 おられる を勝 のです 話を終 i に研 た。 縁 ね カン T

修された開祖の昭和六十一年 向上人七百回忌御遠忌法要での-一月十八日、山形県天童仏向寺

量

報

都の佛教大学を会場として開催された。 ら四日 として、昭和六十一年九月二日 昭和六十一年度浄土布教師中央研修会と 昭和六十一年度の浄土宗教学布教大会は 第三十二回浄土宗教学大会との合同大会 · 浄土宗教学布教大会 (木) までの三日間にわたり、京 (火)か

◎大会日程

院である。

主催は浄土宗布教師会および浄土宗教学

九月二日 開会式 火

九月三日(水) 特別講演 大会委員会(布教師会)

十六時半

十三時半

大会委員会(合同) 般研究発表

十二時

時

十三時

シンポジウム

合同総会

九月四日(木) 懇親会

十七時

十五時半

閉会式 意見発表 般研究発表

十三時 十五時半 時

> 日本人の宗教心 ◎特別講演

良忠上人について (『宗報』昭和六十一年十二月号に収録)

大正大学教授 玉 Ш 成

発表された。発表時間は十五分、 は法式に関する日頃の研究成果が熱心に 六部会にわかれて、

視聴覚教材を使った布教の試み 左記のとおりである。

布教と視線 三上人御遠忌を迎えて

布教の原理 現代布教の課題

現代と念仏 和歌からの布教

金 宮

浄土宗における因果の問題 布教の実践と地域史 邦

家庭における宗教教育に ついて 本 亮

啓

京都大学教授 河 隼 雄氏

◎一般研究発表 般研究発表は、九十六名の発表があり (『仏教論叢』三一号に収録) 元氏

五分である。布教研究所関係者の発表は 教学と布教、 さらに 質問は

中 成

片 Ш H 室 惠 照 浄 俊三道 教信

Ш 貫浅 光 司良

意見発表は布教師会担当の部門であり、

◎意見発表

俊

村 博 道

地獄の白蓮華・極楽の白蓮華

野

合

寺院とコンピュー A 石

隆

士

研究発表は、 教研究所報』 かった研究所員の研究報告とともに、『布 なおこの研究発表の要旨は、 浄土宗の教師であれば発表 四号に掲載した。また一般 発表できな

◎シンポジウム

示される。 資格があり、

要項は春頃の『宗報』に公

学教授、高橋弘次氏の司会により行われ 本年度のテーマは、昨年にひきつづき た。問題提起者は左記のとおりである。 現代と念仏について」であり、佛教大

佛教大学助教授 佛教大学助教授 貝 孝 彦

(『宗報』昭和六十一年十二月号に収録) 大阪教区宝樹寺 上 田

ご事蹟をあおいで―― の風間文雄氏であった。 々の発表が行われた。 いのかー 今年も三上人遠忌にちなみ、「三上人の 」のテーマのもと、左記の方 司会は、 布教師にこれでい 北陸支部

松 濤 弘 道

-178

布教師会北海道支部代表

山 昭 俍

東海支部代表 東北支部代表 出木 寬

11 11

近畿支部代表 (『布教研究所報』 西 四号に収録

▼集中研究会

◎第十二回集中研究会 される。今年度は左記のとおり行われた 所の関係者全員を招集して、 浄土宗布教研究所の集中研究会は、 昭和六十一年五月三十日 年二回開催 研究

会 東京明照会館

村博道、 ①新研究所員の松尾昭男、阿部定孝、 内 浅野義光、 村島邦俊の各氏への辞令伝達 高僧英淳、 羽田恵三

辞令伝達。

藤俊哉、

佐藤雅彦、

市川隆士の各氏への

並びに新研究員(再任)の遠田弘賢、

三上人のみ教え

大正大学教授

の所信表明、並びに六十一年度の教学布 ③総会として、板垣隆寛所長の研究指針 布教研究所報 四号に掲載 真氏

> れた。 ◎第十三回集中研究会 教大会における研究発表の打合せが行わ

昭和六十一年十二月十一日(木)

十二日(金

内 ①研究発表 会 統一テーマ『無量寿経 東京大本山増上寺

上の解釈や問題点を発表した。 本雄毅、有本亮啓、山上光俊、 研究所員として二年目をむかえる片山浄 の各氏が、『無量寿経』についての布教 教、宮原文弥、石田彰浩、宮崎浅良、 金子貫司 Щ

②講義

金

無量寿経』について 大本山增上寺法主 中村 康隆 台下

北朝 鮮の仏教事情 大正大学教授 石 上 善

応氏

浄土宗教学局長 大 田 秀 三氏

とおり東京明照会館で行われた。 昭和六十一年度の月例研究会は、 ▼月例研究会(公開

現代の医療と仏教の課題 ◎五月七日 水

教研究所研究員

藤

雅

彦氏

死をどう迎えるか ◎六月二十七日(金)

大正大学名誉教授 壬: 生 台

死に臨んでの儀礼

◎十月十六日

(未)

浄土宗法儀司 福

西

賢

兆氏

◎十一月十九日(水)

現場から見た生老病死 ◎三月二日(月) 東京都医師会理事 福 井

光

寿氏

現代における生と死」をめぐって 月例研究会を通しての意見交換

▼輪読会

宮林昭彦、小沢憲珠、大室照道、 である。なお作業にたずさわったのは、 号に掲載した。皆様方の叱正を乞う次第 が、その報告として『布教研究所報』四 つづき、いまだ内容的には不十分である の試みを行っている。この作業は二年間 手印』であり、引用文献の抽出、 指導の下、研究員を中心に行われて 布教研究所の輪読会は、宮林昭彦主任 加藤俊哉、 テキストは聖光上人の『末代念仏授 佐藤雅彦、市川隆士の各 遠田弘 口語訳

▼浄土宗布教師大会

札幌の新善光寺を主会場として開催され 布教師会北海道支部の担当により、七月 昭和六十一年度の浄土宗布教師大会は、 三日(木)、四日(金)の両日にわたり、

◎講演

悟りから救い

浄土教への出発

法然上人とその門弟 大本山増上寺法主 中村 康隆 台下

◎大挙伝道 亜細亜大学教授

村

昇氏

(竜雲寺会場)

神奈川教区

Ш 本 田 貫 公

竜正夫

河 真 瑞

山口教区

尾張教区

北海道第 (慈啓会老人ホーム会場) 一教区 松

阿弥陀寺会場

福岡教区

安

藤 本

雅 基

度を完成のめどにしている。

どのものをめざしており、昭和六十四年

寬成

富山教区 福島教区

滋賀教区

梅 石 原 山 達 秀

雄雄

布教研究所では、年一回『布教研究所報 ▼布教資料シリーズの発行

> うために、今年度より所報の別冊として、 あり、そのすべてを掲載することが困難 を発行し、研究所の活動内容を報告して きたいと存じます。 おいてご講義いただいたものを掲載いた た。内容は主に、今年度の月例研究会に 代における生と死』を編集いたしまし とになりました。その第一回として『現 布教資料シリーズを適宜発行してゆくこ な情況にあります。したがってこれを補 おりますが、紙数や発行期日等の制限も しました。所報にあわせてお読みいただ

▼浄土宗布教伝道史

員会が正式に発足することになる。内容 は時代篇と人物篇にわかれ、 回開かれたが、昭和六十二年より実行委 められている。今年度は準備委員会が二 浄土宗布教伝道の編纂の準備が現在すす 五〇〇頁ほ

るか」をテーマに、意見交換が行われた。 場に、各宗の教化研究所が一堂に会し、 昭和六十二年二月十九日、駒沢大学を会 ▼各宗教化関係研究機関連絡協議会 現代における精神的危機にどう対応す

誤字訂正願い

○一三○頁、下段、 がありましたので、 『布教研究所報』三号の次の箇所に誤字 九行目 訂正願います。

一三五頁、上段、 →蓮門住持訓 五行目、六行目 浄土随聞記』-

→『十六門記』

編 集 後 記

向寺の開祖一向上人の七百年御遠忌法

大橋俊雄先生がご講演なされた

昭和六十一年十一月、

山形県天童市仏

昭和六十一年五月の集中研究会のおり 浄土宗布教研究所の にご講義いただいたものを収録いたし 、松啓真先生の「三上人のみ教え」は 四号をおとどけいたします。 『布教研究所報

研究所員の研究成果報告は、 究発表で発表した要旨であり、 発表されなかった方の研究報告を加え 年度の浄土宗教学布教大会の 昭和六十

○この『布教研究所報』は、 布教研究所の活動は、発行時期、 じて浄土宗全寺院に配布されますが、 ける生と死』と題して別冊にまとめ、 できかねる状態です。 等の関係で、そのすべてを本誌に掲載 地域によって配布が遅延する場合もあ 発刊することになりました。 会の報告を主に、布教資料 りますのでご了承下さい。 ものを特別掲載いたしました。 今回、 各教区を通 『現代に 月例研究 『布教研

布教研究所報 第4号

輪読会報告「口語訳末代念仏授手印」

報』に掲載されています。

特別寄稿

「開祖一向上人を仰ぐ」は、

おぎたいと思います。

輪読会の報告です。斯界のご批判をあ

研究員が二年間にわたって行った 試訳の段階であり、未熟な訳です した。

なおシンポジウム「現代と念 昭和六十一年十二月号の

きのものであり、

これを収録いたしま

昭和六十一年の教学布教大会のと 布教師はこれでいいのか

仏」は、

意見発表「三上人のご事蹟をあ

おいで

究所報』と合せてお読み下さい。

て掲載いたしました。

昭和62年2月20日 印刷 昭和62年3月1日 発行

> 集行 板 垣 降 寬

東京都千代田区神田神保町3-10 印刷所 共立社印刷所

発行所 净土宗布教研究所

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

